

# 陽南乱舞



猫田あきと

河崎洋介は期末テストの結果に不安を抱きながら帰宅した。

どうしてあのとき、全34巻の漫画なんて読み返してしまったのだろうか。と、後悔が頭の中を駆け巡る。とはいえ、終わったことは仕方がない。それでも、それをわかっていながら気にしてしまうのは人間の性というヤツだろう。

洋介は平静を装うために玄関の前で一呼吸おいた。

今のタイミングで親には悟らせたくない。普通にしていれば大丈夫だ。まだ、答案が返ってきたわけではない。

いずれ、通知表を見せなければならないのはわかっていたが、とりあえずそれまでは成績の会話は避けなければならない。自分が考えなければ母親も思い出すことはないだろう。たぶん。

・・・たぶん。

そう考えて洋介は玄関の戸を開けた。

「ただいまー・・・」

ごくごく自然に、いつも通りの感じで帰宅を告げる。そして、後ろ手にゆっくりと戸を閉めながら母親の反応をうかがう。

「お帰りー」

声だけが居間から聞こえる。

(よし、大丈夫だ。)

洋介はそう判断し二階の自分の部屋へと向かった。

途中で呼び止められやしないかとドキドキしたが、大丈夫だった。おそらく昼の刑事ドラマか何かの再放送でも見ているのだろう。

階段を昇りきって、自分の部屋のドアを開ける。サッと部屋に入り、ドアの隙間から顔を出して母親の気配が居間から動かないことを確認する。母親は幸いにもドラマに夢中らしい。ドアの方を向いたまま、ゆっくりとドアを閉めて、ここでやっとホッとする。

ふうっ。と、息を吐き出し胸をなでおろした。

「なんか悪いことでもしたのか？」

背後から声がして洋介は心臓が止まるかと思った。

すばやく振り返り、声の主を見て顔を引きつらせる。

イトコの野上達也だ。確か今年で33歳だ。

小さい頃からよく遊んでもらったので仲は悪くない。しかし、いつもとんでもないことをやらかすので、最近あまり近づきたくなくなっていた。

何かを疑ったような目で洋介を見ているが、これは何かを疑っているのではなく常にこんな目をしているのだということを洋介は知っていた。

知ってはいたが、状況が状況だけに疑われている気がした。

蛇に睨まれた蛙の心境のまま、洋介は平静を装った声を絞り出した。

「タツ兄・・・会社はどうしたの？」

「有休」

野上は短く答えて、手にした漫画（洋介の物だ）を本棚に戻す。

「なんで俺の部屋に勝手に入ってるの？」

「お婆さんが、洋介の部屋で待っててって言ったから。文句はお前の母親に言え。」

洋介は言われるまでもなく、ドアを開けて下に向かって叫んだ。

「母さん！！なんでタツ兄俺の部屋にいれちゃったの?!」

洋介の叫びに対して、階下からは母親ののほほんとした声が返ってきた。

「ああ、ごめんね。言うの忘れてたー。いいじゃない、いつも部屋で遊んでるんだから。」

それ、いつの話だよ。声には出さずにツッコミを入れて、ため息をつく。

親ってそんなもんだよな。いつまでも子ども扱いして・・・。

「俺もう中学生なんだから、もっとプライバシーとか考えて欲しいのに。」

洋介は誰にともなく、ブチブチと文句を言った。

「ふんっ、エロ本の一冊も持っていない中坊が自分の部屋など片腹痛いわ。」

野上が鼻で笑う。

「・・・・・・・・俺、タツ兄と違うもん。タツ兄だって、中学の時自分の部屋ぐらいあつただろ？」

洋介の反論に野上は胸を張って応えた。

「俺だってエロ本なんか持ってなかったさ。名目上は俺の部屋だったが、あれは実質姉貴の領地だった。」

「威張って言うことじゃないと思うよ。」

うんざりした様子で洋介が言うと、野上はわざとらしくため息をついてポケットからタバコを出した。

「お前も言うようになったなあ・・・・・・・・。」

続いてライターを出し火をつける。

「でもなあ・・・・・・・・自分の立場ってモンをわきまえないとダメだぞお？」

煙を吐いて、ガンを飛ばす。

洋介は自分の机の上にある灰皿（野上用にずっと置いたままだった）をとって野上の前に正座し、両手でそれを差し出す。

「申し訳ありません、達也お兄様。高々中学生の分際であなた様に逆らおうなんて思い上がっておりました。」

洋介は小さい頃から野上には逆らえなかった。

実際、体力の差が大きすぎる。

自分ももう少しすれば体力的には追いつくはずだと思いながらも、何の格闘技も習っていない自分では、この自称喧嘩王には敵うまいと悟っていた。

「良く分かってるじゃないか。さすが、我が従弟。」

舎弟の間違いだらう、などとツッコミたかったがあえてそれは放っておく。

「まあ、実はひとつ頼みがあってだな。」

野上は咳払いをした。タバコはもう灰皿のうえだ。

ほとんど吸っていない所を見ると、単なる演出効果だったのかもしれない。

彼女ができてからタバコの量が減っているのは知っていた。

この男と付き合おうという人がいるというだけで洋介にとってはミステリーだった。

というか、この男が人を愛するなんてことが出来るということがミステリーだった。

「頼み？」

野上が頼みなんて珍しい。お使いと言う名のパシリなら何度もあるが頼みというのは一度もなかった。

「栄地フィレンってのが今度お前の学校に転校してくるから、そいつの面倒を見てやってくれ。」

「は？」

洋介には野上が言っている意味がよくわからなかった。

何が自分の学校に転校してくるって？

「要するに大変だとは思うが友達になってやれってことな。」

「な、何が転校してくるって？」

「栄地フィレンツェ一金髪のカキ。」

「金髪?!」

洋介の学校に茶色いのはちょくちょくいるが、金髪はさすがにいない。

いや、ひとりいたかな？たしか次3年の、なんか怖い人。

それよりも、何だその名前は。人の名前にケチをつける気はないが、明らかに日本人的な名前ではない。

「あ！留学生！」

洋介はぼんっと手を打った。

「アホか。俺が留学生のことなんか知るワケないだろ。ハーフだよ。」

野上に軽く頭を殴られた。

痛かった。

「殴ることないのに……。でも、何で俺がそいつの面倒なんか見なきゃなんないのさ。」

今度は腹を殴られた。

「ほほう。この俺様の命令に『何で』……。だと？」

野上は淡々と三打目の準備をしていた。

洋介は恐怖に顔を引きつらせ、慌てて頭を下げる。

頼みじゃなかったのかよ。と心の中では思いつつも実際には全く違うことを口走る。

「いえ！滅相もございません！この河崎洋介、謹んでその使命まっとうさせて頂きとう存じます！！」

「うむ、頼んだぞ。」

何様のつもりだよ。とは思いながらも口には出せない自分の弱さを噛みしめながら洋介は頭を下げているしかなかった。

そのうち結婚するらしいので、ここにも来なくなるはずだ。もう少しの辛抱だ。彼女が出来てから、ここに来る回数も断然減った。どんな人かは知らないが感謝感激ってやつだ。

別に野上を嫌いなわけではないが正直ついていけない。野上と比べればうちの学校のはちゃめちゃ生徒会長の方がまだマシだ。

そんなことを考えていると、野上が話かけてきた。さっきの続きらしい。

「なんなら、褒美でもやろうか？」

その言葉に洋介は顔を上げた。

「マジで?!じゃあさあ……」

洋介が何か言うよりも早く、野上が続ける。

「AVぐらいなら借りてきてやるぞ。」

「いらぬよ!!!」

即座に大声で叫ぶ洋介を見て野上は眉を寄せる。

「じゃあ、何がいいんだよ。」

本気かこの男は、などと思いながら洋介は気を取り直して口を開いた。

「ゲーム……」

「エロゲーか？」

「違う!!!」

またも即座に否定して洋介は肩で息をしていた。

「なんでタツ兄は何でもそういう方向にもっていくのさ！！」

「いやぁ、健全な中学生男子が興味を持ちそうなものっていったらそういうのかなって思って。」

さも当たり前のように言う野上に洋介は脱力した。

「もう、いいよ。」

「そうか？」

ああ、そうだよね。この人ってそういう人だったよね。

洋介はなんとなくそんなことを思い出し、期待した自分が馬鹿だったのだと悟ったのだった。

同時に、こんな人と付き合ってる彼女っていうのはどんな人なのかものすごく気になったのは、どうでもいい話だったりする。

この後、河崎洋介は野上の命令に従う気があるとなかろうと、結局フィレーンと関わることになるのだが、このときの洋介はまだそれを知るわけもなく、「適当にやっとけばバレないだろう」などと安易に考えていた。

洋介の意思とは関係なく、波乱に満ちた学校生活が始まろうとしていた・・・・・・・・。

## イトコ～幕間～

---

～春休み初日～

洋介は友達と遊びに駅前の繁華街に来ていた。

成績は悪いというほどではなかったので、親からのお咎めもなかった。

ゲームセンターでしばらく過ごし、小腹が空いたので何か食べようと外に出たところだった。

この辺りが、野上の住むマンションの近くなのは知っていた。だが、今までここで遊んでいて野上と会ったことはなかった。

そう、なかったのだ。さっきまでは。

「あ」

よほどアホ面だったのか、一緒にいた友人三人は顔をしかめた。

「どうした洋介？口半開きでアホっぽい顔になってるぞ。」

一言いらないことを言うのは、前島だ。洋介の反応がないので、三人は洋介の視線の先を追った。

洋介の視線の先には見慣れた町並みしかなかった。自分達と同じ中学生から、カップルらしき人、買い物帰りのおばちゃんやおじいちゃんが歩いている。特に変わった点はない。

しかし、洋介はその中に知った顔を見つけていた。

「……タツ兄……」

思わず口にする。

「……タツ兄って、洋介がいつも言ってる変なイトコの兄ちゃん？」

門田が聞いてきたが、洋介にとってそんな質問に答えることは重要ではなかった。

「どれだ？」

前島が洋介の視線の先に野上を探そうとする。

「……セミロングの……女の人」

「はあ？」

三人が再び洋介の方を向いた。

「……と、一緒に歩いてる……」

洋介の続きの言葉を聴いて前島が洋介の頭をはたいた。

「変なところで切るなよ！ビビッただろうが。」

「ああ、あれ？タツ兄って結構背高いんだな一。」

いち早く見つけた門田がうらやましそうに言う。洋介にとってはそんなことも、どうでもよかった。

「ってか、一緒にいる人美人じゃん。彼女かな？」

山本が口笛を吹いた。

そう、それだ。

「なんであんな綺麗な人がタツ兄なんかとつきあってんの？！」

洋介は叫んでいた。前島に口を押さえられ、最後の方は近くにいた三人にしか聞こえなかったが……。

前島がニヤリと口の両端を吊り上げた。

「なあ、つけてみようぜ。」

「あ、いいね。面白そう。」

山本は乗り気だ。

洋介はもがいて前島の手を口から引き剥がした。

「ダメだって！ばれたら殺されるって！！」

「よーすけー。」

山本がポンッと肩に手を置く。

「お前、気にならないのか？本当にあの二人が付き合ってるのか。」

「え？そりゃ……気になるけど……」

前島が門田の方を向く。

「お前はどうか？」

門田は野上の方を見つめていた。

「俺、二人がつきあってるんならタツ兄に弟子入りする。」

「マジで?!」

洋介の叫びなど何処吹く風、門田の目はキラキラと輝いている。

「よし！決まりだな。尾行開始だ！！」

前島が高らかに宣言した。

尾行といっても、所詮中学生の出来ることといたら、こっそり後をつけるぐらいだ。

しばらく後をつけていたが、さほど面白いことはなかった。

二人は手をつなぐでもなく、ただ話しながら歩いているようだった。

「やっぱ、距離が遠いと会話が聞こえないしつまんねーな。」

山本が言った。

「確かに……」

前島が同意する。

「もう、やめようよ……マジで殺されるんだって。」

あきらめつつも抗議したのは洋介だ。

「あ、喫茶店に入った。」

門田の一言で全員が二人の入った店の看板を見た。

「入るか。」

前島が神妙な顔で言う。

「二人の近くの席に座れば会話を聴ける可能性もあるな。」

これは山本。

「いや、あんまり近くにいると俺、ばれるんだけど……」

「大丈夫大丈夫。さ、行こうぜ。」

山本に背中を押されて、洋介は強引に喫茶店の中に入れられた。

前島がさっと辺りを見回して野上と彼女のいる席を見つける。

野上が座っている後ろの席を指して「あそこの席いいですか？」とか聴いている。

洋介にはそこが禁煙席であることがすでに驚きだった。

やはりタバコの量が減ったのは彼女が原因らしい。

席に着くと前島と山本は注文をさっとすませ、お前もなんか頼めよ、と言った。

洋介は仕方なく小声でレモンスカッシュを頼むと、野上と女性の会話に耳を傾けた。

「でも、久しぶりだな。二人で外出するのって。」

照れたような野上の声。今まで聞いたことのないような優しさが含まれている。

「そうね。」

野上の向かいに座る女性は声も綺麗だった。

「このあとどうする？・・・つっても、もう三時か。」

「夕飯はどうするの？」

「帰って食べようぜ。何がいいかなあ・・・」

「たしか、ジャガイモとニンジンが残ってたかな。」

なんだかほのぼのな会話だ。全然タツ兄っぽくない。

「んー。肉じゃがとか食べたいなあ〜。」

「じゃあ、そうしょっか。足りない材料買って帰りましょ。」

ああ、なんだかとっても家庭的。

なんでこんないい人がタツ兄なんかと付き合ってるんだらう。

「同棲・・・してるんだ・・・。」

山本がポツリと言った。

「らしいな。」

前島も山本と同じような顔をしていた。

洋介は固まった。同棲？？？そういえば、近々結婚するって話も聴いてたっけ。

ああ、そうなんだ。そういうことなんだ。タツ兄って実は結構すごかったのね。

洋介はそんなことを思いながら、タツ兄の彼女を眺めていた。本当に綺麗な人だ。

「・・・・・・・・・・帰るか。」

注文したケーキを口に運びながら、前島が言った。

「こんなにほのぼのされちゃあねえ。」

山本はコーヒーをすすった。

「いいなあ・・・」

門田はなんだか夢見心地な感じだった。

洋介はレモンスカッシュを飲み干し、他の皆が食べ終わるのを待っていた。

「ほお、帰るのか。」

前島の後ろから声がした。

洋介の背筋が凍った。

「探偵ごっこは楽しかったか？ガキども。」

他の三人も同じことを感じたのだらう。皆、固まっていた。

「まさか気づいてないとでも思ってたんじゃないだらうなあ・・・なあ、洋介？」

背を向けたままの野上のまわりに赤いオーラが見える気がした。

メラメラと燃えていればまだいいものの、そのオーラはねっとりとしている。

「ご、ご・・・・・・・・ごごごごごめんなさい・・・・・・・・」

震える声で洋介はそれだけ言った。

その後、本気で殺されるかと思ったが、野上の彼女の取り計らいでそれは免れ、しかもジュース代までおごってもらえた。

なんて心の広い人なんだ。4人はそう思い、彼女に感謝した。本気で感謝した。

ちなみに、門田は本当にタツ兄に弟子入りするつもりらしかったのだが、それは洋介にはどうでもいいことだった。

時は洋介が野上から転校生の話を聞いた日から1ヶ月前にさかのぼる。

午後七時。とあるアパートのダイニングキッチンに一人の少年と一人の男がいた。

少年はイギリス人である母親譲りの淡いブルーの瞳で、キッチンで夕食を作っている男の後ろ姿をまっすぐに見ていた。指通りのよい金髪も母親譲りだが、その目の鋭さは、父親から受け継いだものだ。少年の父親は、男の会社の社長でもある。

男は少年の神妙な面持ちには気づかずに慣れた手つきで野菜を切っていた。

少年とは対照的な漆黒の髪と瞳。会社から帰ってきてすぐに夕食を作り始めたのでワイシャツの袖をまくり、エプロンをしている。身長が高いため、キッチンが低くて使いにくそうだ。

もう慣れたことではあるが、三十路を過ぎて腰への負担が辛くなってきている事実には本人も気づいていた。

二人とも端正な顔立ちだが、少年は目の鋭さから近寄りがたい雰囲気であるのに対し、男は柔和で親しみやすい雰囲気だ。

少年は、小学4年の頃から卒業までの間このアパートでこの男と生活していた。父親が嫌いで家出し、このアパートに押し掛けたのだ。現在は父親と暮らしているが、今でも度々このアパートに夕食を食べにきている。仕事でほとんど家にいない父親よりも、少年はこの男を信頼していた。

「開封。僕、学校やめる。」

少年が言った。男の名は開封（カイフォン）と言う。

「はぁッ?!」

開封は手を止めて振り返った。少年はまっすぐに開封を見ていた。

「ちょ・・・ちょっと待ってください、フィレーンさん。もう一回言ってもらえますか？」

開封は中国人だが、既に10年以上日本で生活しているため日本語も流暢だった。

「学校やめる。」

少年――フィレーンは、聞き間違えのないほどにはっきりと言った。

開封はしばらく動きを止めて頭の中でその言葉を繰り返してみた。それから、実際に口に出してみる。

「えっと・・・学校をやめる・・・？」

開封が聞き返すとフィレーンは力強く頷いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁッ?!や、やめるって、中学校をですか?!」

「うむ、期待以上のリアクションをありがとう開封。正確には今行っている私立中学を退学して公立中学に通う。」

長い間のあと叫んだ開封に、フィレーンはいつものように平然と返した。

「何でまたそんな事を・・・」

「とりあえず夕食作ってよ。学校から直接ここに来たから何も食べてないしお腹へってるんだ。・・・あ、冷蔵庫の中のプリン勝手に食べたけど問題ないよね。」

前半はため息混じりに聞いていた開封がプリンと聞いて慌てて冷蔵庫の中を確認する。

「全部・・・食べたんですか？」

顔が引きつっているのを見て、フィレーンは不思議に思った。開封がプリンごときで動揺するわけがない。が、とにかく素直に答える。

「うん。2つあったから両方食べた。」

開封は冷蔵庫を閉めて苦い顔をした。

「……まずいですね。」

「どうかしたの？」

「いえ……まあ、今さらどうしようもないことですから。ただ、タツが来たら覚悟しておいた方がいいですよ。」

フィレーンの顔から一気に血の気が引いた。タツというのは、開封の会社の同僚だ。本名を野上達也という。

「あれ……野上のだったの。……ん？でも最近来ないだろ？」

「いえ、今日は来ますよ、確実に。どうしましょうか……私としては早めに帰るのをお勧めします。」

フィレーンは少し考えて、ふとした疑問を感じた。

「あのさ、僕が学校やめるよりも野上のプリンがないことの方が重大なのっておかしくないか？」

「え？でも公立中学には行くんでしょ？だったら別にいいじゃないですか。」

「いや、うん。そうだね。いいんだけど、理由とか気にならないの？」

「気にはなりますけど、また今度にしましょう。今日のタツはイライラしているでしょうから怒らせると相当怖いですよ。私、なだめられる自信ありませんし。」

かなり真剣な顔で言う開封にフィレーンは若干の恐怖を覚えた。本気でヤバイのかもしれない。

「えと、せっかくネタとして考えてきたのでこういう披露の仕方は嫌なんだけどこの際いいや。」

フィレーンの言葉に開封が不思議そうな顔をした。

「ネタ？」

そんな開封は無視してフィレーンが続ける。

「そう、あれは忘れもしない小学校3年生の時だった……中略。と、いう訳で霞ヶ浦雲が本当にマジでしつこいのでいい加減死にたくなりそうな感じだし、あの学校やめる。以上。」

「………。ネタ……ですか。」

「だから、こういう披露の仕方は嫌だって言ったんだ！！」

フィレーンが半ばすねたような表情で言い訳をする。

「嫌ならやめましょうよ。私もどうツッコんでいいのかすごい困りました。」

「うう、正論を言われるともっと惨めな気持ちになるし……。」

「いえ、そんなこと言われても……。」

「何やってんだ？お前ら。」

半ばあきれた声が廊下が続くドアの方から聞こえた。

二人はおそろおそろそちらを向いた。

「よう、開封。案の定来てやったぞ。酒出して、酒。」

気楽に言ってきたのは多少くせのある黒髪にネクタイを緩めた背広姿の男だった。野上である。

開封が怪訝な顔をしていた。

「あの……タツ。私、鍵、閉めてましたよね？」

「ん？ああ、バッチリ閉まってたぜ。」

野上は親指を立ててバッチリ感を強調した。

開封にとっては予想通りの答えではあったし、既に嫌な予感が的中するであろうと確信めいたものを感じてもいた。その嫌な予感が当たって欲しくはないし、そんな現実を直視したくない気持ちもあった。しかし、どうやって鍵を開けたのか、聞かない訳にもいかない。開封は見たくない現実と対面すべく、意を決して野上に尋ねた。

「……………じゃあ、どうやって入ったんですか？」

野上が一瞬止まる。そして、待ってましたとばかりにニヤリとした。

「開封。世の中にはな、合鍵ってものがあるんだよ。」

と、ポケットから鍵を出す。

ここまでは開封の予想通りの展開である。

「それぐらい知っています。……けど、何故あなたが持っているのですか？私はフィレーンさんにしか渡していませんし、それ以上合鍵を作った記憶もありませんよ。」

野上は相変わらず勝ち誇ったような笑みを浮かべている。

「そりゃそうだろう。だって、フィレーンから借りて作ったんだから。自腹だぜ、自腹。」

「返してください。」

開封が明らかに怒りをこめて言った。なんとなく想像できた答えだったとはいえ、悪びれた様子もなく言われ腹が立った。

「返すってのはおかしいだろう。俺の金で作ったんだから。」

「そういう問題ではないでしょう。私の家の鍵なんですよ。無断でそういうことしないで下さい。」

「ったく、男の癖に合鍵一個増えたぐらいで怒るなよ。」

開封が本気で怒っているのがわからないのか、それともわざとか野上は真面目に相手をする気はなさそうだ。

「男も女もないでしょう！確かに女性の部屋の合鍵勝手に作る方が酷いですけど、自分の部屋の合鍵持っている人が二人も三人もいたら気持ち悪いでしょう！しかも自分の知らないうちに。」

ここまで言われても尚、野上は飄々としていた。

「いや、別に俺は気にしないぜ。それより開封。三人ってどういうことだ？他にいるのか？！」

「言葉のあやです！」

開封が怒鳴ったが、野上は一向に反省する気配はなかった。

「なんだ。びっくりした……………開封に彼女できたのかと思った。あーマジでビビった。良かった一違うのか。」

「……………ううっ……………。誰か……………誰か一般常識のある人をここに連れてきて…………。」

野上の台詞の終わる頃には開封は頭を抱えて泣きそうになっていた。

「あ、ごめんごめん。今日ちょっと本気でイライラしてるからさ……………返すわ。ごめん。」

ははっ、と軽く笑って野上は鍵を開封に渡した。

開封は少しだけ立ち直って、鍵を受け取る。

タグがついていた。なんとなく見てみる。

### 『愛鍵v』

開封は完全に沈黙した。野上が笑い出す。

「はははははっ！いや、ホントごめん！だってさ、やってみたくなるでしょ、これは。思いついたとき絶対やってみるべきだと思ったんだけど……………だめ？」

開封がゆっくりと頭を上げた。

「……………そおいう冗談はあなたの恋人にでもしてあげてください。」

「そ……………」

野上が一瞬固まった。

「そんな恥ずかしいこと出来るか！！」

そして耳が痛いほどに叫ぶ。

「あのさあ……」

二人に完全においていかれているフィレーンが口を開いた。

「ぼ、僕……もう帰っていい？」

野上のプリンを食べたことが発覚する前に逃げなければならない。

フィレーンにはいつもと違うようには見えないが、開封が言うのだから野上はイライラしているのだろう。

殴られたりしたらたまったものではない。

「いや、ちょっと待て。」

野上の声にビクリとする。

「お前、なんか大事な話をしてただろう。」

野上がいきなり真顔に戻ったので、フィレーンは心底ヤバイと思った。冷や汗が首筋を伝う。

「学校やめるとか何とか。」

「なんだ、そっちかあ……」

フィレーンは安心して息を吐いた。

「そっちって何だ？まだ他にあるのか？」

どうやら、プリンの件に関しては聞いていなかったらしい。

「いや、何でもなし。うん、学校やめるんだ。それで公立中学いく。」

「いじめられるんじゃないの？お前性格悪いし。」

フィレーンの決意のこもった言葉に、野上はさらりと恐ろしいことを述べた。

「……………野上ほどじゃないよ。」

フィレーンは反撃を試みた。

「馬鹿かお前。俺ぐらいになれば怖がって誰もいじめたり出来ないんだよ。」

「……………」

開封は言いたいこともあったが、それを言うと野上に怒られそうなので言わないことにした。

「そんなことよりもだな。俺の従弟が割と近所の中学に通ってるんだが、そこに行ったらどうだ？って話なんだが、どうだ？」

野上のいきなりの提案にフィレーンは眉を寄せた。

「どこ？」

「まあ、ちょっと田舎になるけどそっちの方が校風が穏やかでいいだろ。」

「そうかもしれないけど……………で、なんて学校？」

野上が意味もなく一拍おいてニヤリとした。

「陽南中学。」

それが、フィレーンの新たな学校生活の幕開けだった。

～フィレーンが帰ったあと～

「なんだかんだ言って、結局優しいですね。」

夕食の片付けをしながら開封が言った。

「何が？」

缶ビールを一口飲んでから野上が聞く。

「フィレーンさんのこと心配なんでしょう？」

「ああ、あれ？どっちかって言うと、従弟が心配でなあ・・・」

開封の手が止まる。

「何かあったんですか？」

「うーん・・・その従弟がさ、生徒会に入ってるらしいんだが、そこの生徒会長が・・・なんていうか・・・」

「ひどい人なんですか？」

「いや、やる気満々でいい人はいい人らしいんだが・・・猪突猛進って言うの？振り回されてるんだよ。あいつ。」

「・・・・・・・・・・あの、タツ。」

食器を洗い終わった開封が缶をまわしている野上の方を向く。

「それって、逆効果じゃありませんか？フィレーンさんも人を振り回すタイプですよ。」

「・・・・・・・・・・」

缶が止まった。

十分すぎるほどの沈黙。

「・・・・・・・・・・ま、いいか。大丈夫だろ。・・・・・・・・たぶん。」

野上は一人頷いて残ったビールを飲み干した。

「開封！ビールもう一本！！っていうか、お前も飲め！」

「私は飲まないと言っているでしょう。何年言わせる気ですか。・・・これ飲んだら帰ってくださいよ。」

開封は新しい缶を野上に渡し、空き缶は水を入れて流しに置いた。

野上は缶を受け取ると深いため息をついた。

「帰れって？まだ、愚痴もいってないのに」

開封はエプロンを椅子の背に掛け、その椅子に腰掛けながら目を細める。

「あなたの愚痴は、のろけにしか聞こえないので聞きたくありません。」

「だってさー。今日友達とご飯食べるから、夕食は適当に作って食べてね。とか、言うんだぜ？」

開封は野上よりも深い深いため息をついた。

「いいじゃないですか。たまに友達とご飯食べるくらい。」

「俺に作れって言ったんだぜ？！信じられねえよ。俺が家事できないこと知ってるくせに。」

「いいじゃないですか。結局、私が作ったご飯食べてあなたは何もしていないんですから。」

「・・・・・・・・それもそうか。」

野上は以外にあっさり納得した。

「いや、でもさ。ちょっと困った顔して『ごめんね・・・』とか言われたら許しちゃうだろ！なんか・・・」

可愛くて。それってずるくないか？」

「もう、いいですから。その可愛い彼女のところに帰ってください。」

「ヤダ。むかつくから帰ってやらん。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

開封の顔が一瞬曇ったことに野上は気がつかなかった。

「そもそもだなあ」

野上が続きを言いかけたときだった。

「さっさとそれ飲んで、帰ってください。」

「そんなに怒らなくってもいいだろおが」

缶に向けていた不機嫌な顔を開封の方へ向けて、野上はようやく開封の異変に気がついた。開封の右手のつめが左手の甲に沈んでいた。

野上は自分が不用意な言葉を口にしてしまったことを後悔した。開封にも愛する人がいる。しかし、彼は彼女ともう二度と会うことはできない。誰一人、彼女と会うことはできない。

「ごめん・・・。」

野上は忘れていた自分を責めて、開封に謝った。

「そういや」

言いかけてから、思い直してビールとともにその言葉を飲み込む。

今聞くべきではない。相変わらず気の利かない自分に嫌気がさして、残った缶の中身を一気に腹へ流し込む。

「ごちそうさま。帰るわ。」

椅子を立ったが、開封は動かなかった。

ダイニングから出る前に開封の方をもう一度見る。

「開封。」

名前を呼ばれて開封は少しだけ反応を示した。

「まだ、しばらくはここにいるよな。」

開封は答えない。

「あんまり遠くに行くなよ。俺が連れ戻せる場所にいるくれ。」

返答を期待したわけではなかった。ただ、伝えておきたかった。

「でなきゃフィレーンがかわいそうだ。」

開封が顔を上げたとき、そこには野上はいなかった。玄関の戸の閉まる音がした。

開封はゆっくり立ち上がり玄関の鍵を閉めにいった。

そして、鍵を閉めたあと左手の甲を見る。血がにじんでいた。

開封は少し困った顔をして、それから微笑んだ。

死んで会えるのなら、それでもいいと思っている。今も、そう思っている。ただ、今の自分では会わせる顔がないと思った。

十年前だっただろうか、それに気づいたのは。

彼女との約束は果たさなければならない。

さっき野上が言いかけたことは、容易に想像ができた。「家には帰らないのか」とか「墓参りにはいかないのか」といったところだろう。

次の盆にでも帰ろうか。

盆だからといってどうというわけではないのだが、帰るには少し長い休暇が必要だ。

開封はカレンダーを見た。

2月6日。今日の日付を見て、大切なことを思い出す。

「あ！」

慌てて玄関を開け、外に身を乗り出す。開封の部屋は二階にある。

野上が下前方の道に立っていた。

「親友の誕生日忘れんなーッ！アホー！！」

野上が大声で叫んだ。

気付くのを待っていたらしい。合鍵の件もあったので「男の癖に誕生日忘れられたぐらいで怒るなよ」という思いが開封の頭をかすめたが、それは言葉にはしなかった。

「ごめんなさいっ！今度何かおごります！」

近所から苦情がくるかもしれない。そんな事を思いながら、開封も叫び返した。

野上は大きく手を振って、ようやく帰途に着いたようだった。

開封は野上が見えなくなるまで見送った。そして、もうひとつ。大切なことを思い出す。

「プリンのご事は忘れていたようですね……。」

安堵のため息は外気の冷たさに白くなる。

その白さは決して濁ったものではなく、透明なものの乱反射だ。開封は部屋の中に入っていった。

フィレーンは教室に入って、新しいクラスメイトの顔を見回した。

誰が河崎洋介なのかは即座に分かった。ざわついた教室の中で、そいつの周りだけ空気が止まっていたからだ。他の人間は好奇の目でこちらを見ている。

当然だろう。この田舎（この辺りでは田舎だろう。たぶん。）の公立中学で金髪なんて早々いない。

地毛なのだから仕方ないことだが、やはり人というのは大多数と違う人間を好奇の目で見る。

（好奇の目だけマシか・・・）

皮肉な気分には多少の楽観が混ざった心地でフィレーンはもう一度クラスメイト達を見渡した。

非難の目で見られたりしたら、たまったものじゃない。あと、敵意も勘弁だ。中途半端な不良がいたりすると、因縁をつけられかねない。

「栄地フィレーンです。よろしくお願ひします。」

やあ愚民ども、よろしく頼むからありがたく思え。というネタもあったのだが、さすがにヤバイだろうと思ひそれは言わなかった。

月並みな挨拶をして、担任の女性教師に指示された机へ向かう。河崎洋介とおぼしき少年の席の前だ。どうやら、クラス名簿を作るまでには編入届けが間に合っただけらしい。

静かに席に座り、先生が話し始めたところでフィレーンは後ろを向いた。

「お前が野上の従弟の河崎洋介か。」

フィレーンの言葉に少年がビクリとした。

「・・・え・・・何で分かったんだよ。」

小声で返してくる洋介の声にも顔にも「ビビってます」という空気が含まれていた。

「僕を見た反応で。普通、期待とか好奇心とかだろ。明らかにお前だけ驚愕と恐怖が出てた。」

「あ・・・そうなの・・・」

引きつった笑顔が似合う少年だ。フィレーンはなんとなく、野上に虐げられているんだろうな。と思った。

癖のある黒髪に意志の強そうな眉の少年だ。眉の方は見た目だけらしい。

「あと、野上となんとか似てる。」

「似てねえよ！！」

さっきまでとは打って変わって、そこは即座に否定する。

大声で。

「河崎くん。どうしたのー？」

担任がのほほんとした口調で聞いてくる。

「いえ、すみません。」

洋介は素直に謝って下を向いた。顔を下に向けたまま、フィレーンを下から睨みつけてくる。

「お前がくだらないこと言うからだぞ。」

フィレーンは肩をすくめて前に向き直った。と、後ろでひそひそと話す声が聞こえてくる。

「洋介、お前知り合いなのか？」

「別に。」

「ふーん・・・で、誰に似てないんだ？」

「イトコ」

「・・・イトコと知り合いなのか？」

「らしいよ。」

後ろの声と担任の声を聞きながら、フィレーンは新しい生活に期待と希望を抱いていた。

洋介とはうまくやっていけそうな気がする。こういう勘は結構あたる。休み時間が待ち遠しかった。

一通りホームルームも終わり、休み時間に入った。

洋介の周りに、三人の生徒が集まってきた。

「お前、何ホームルーム中に叫んでるんだよ。」

一人が洋介を小突いた。

「ってかさ、栄地……でいいんだっけ？洋介と知り合いなわけ？」

もう一人がこちらにいきなり話しかけてきたのでフィレーンは驚いた。まさかこんなに普通に話しかけられるとは思っていなかった。前の学校では、この髪の色でなかなか話しかけてくる生徒はいなかった。

「え……いや、従兄と知り合いなんだ。」

そこにいた全員が顔を見合わせた。

「洋介の従兄って……タツ兄……？」

さらにもう一人が恐る恐る聞いてくる。

三人の様子から、洋介の友人達も野上を恐れているらしい事は想像できた。フィレーンは三人に見つめられる中、静かに頷いた。

瞬間、三人の瞳が輝いた。

「すげー！！マジで?!」

「何で何で??どーやってあんな人と知り合ったの?」

「な、な、じゃあ彼女は?タツ兄の彼女は?!」

何故この三人がこんなに興奮しているのか、フィレーンには理解できなかった。恐怖というよりは畏怖ということだろうか。立て続けに野上についての質問をされるとは思っていなかったため、フィレーンはボカンとしてしまった。

「お前らしい加減にしろよ。タツ兄タツ兄って、うるさいんだよ。」

ただ、洋介だけは明らかに不機嫌だった。低い声で凄みをきかせているつもりらしいが、野上と違い全く怖くない。声変わりが完了していないため声質自体はまだ幼いこともあるが、言い慣れていない不自然さが際立っている。

それがフィレーンには少し不思議だった。似ているようで似ていない。やはり同じ血が流れていても、育ちが違うと違うのか。と当たり前のことを思う。

前島（名札に書いてあったので名前が分かった）が洋介の頭に片手をのせる。

「洋介。ジェラシーは良くないぞ。」

「違う!!」

「え?何にジェラってんの?」

これは門田。

「タツ兄にか?お前が勝てるわけないだろ~。俺ら四人がかりでも無理っぽいもんな。」

山本が一人で「うんうん」と頷いて何故か誇らしげにしている。

「だから違うって言ってるだろ!!」

洋介が顔を真っ赤にして怒鳴る。

「……あのう……」

盛り上がる(?) 四人の後ろでフィレーンが小さく声をかけた。

最近こんなのばかりだなあ。と思いながら。

四人に反応する気配はなかった。ジェラシーなのかそうでないのかで盛り上がっている。途中から、野上がいかにすごいかという話になり、深夜の国道で100mを5秒で駆け抜けるとか、ポマードと三回唱えると逃げていくとか、都市伝説のような話になっていた。

フィレーンはこのまま聞いているのも面白いかと思ったが、それはそれで困るので、この状況を打開すべく息を吸い込んだ。たぶん、この単語でどうにかなるだろう。

「あ、タツ兄。」

教室の入り口をさしてポツリと呟く。

面白い具合に四人が四人とも瞬時に指の先に顔を向ける。洋介が最大限の恐怖の顔をしていた。が、もちろんそこには野上はいない。無駄に好奇心旺盛な生徒が金髪の転校生を見ようと入り口からこちらを伺っているだけだ。

「さて、じゃあ今のうちに学校案内でもしてもらおうか、河崎洋介君」

フィレーンはそう言って、立ち上がった。

「……へ？」

四人は啞然としてフィレーンを見ていた。フィレーンは四人の注意が自分に向いたので満足して口の両端をわずかにあげた。

「野上から頼まれてるだろ？僕を宜しくって。」

洋介の顔が引きつっていく。三人は納得したようだった。

「まさか、嫌とは言えないよね？」

洋介の顔は引きつった顔から情けない、泣き顔のように変化していく。よっぽど野上が怖いらしい。これは遊びがいがありそうだ。

「……鬼だあ……。」

洋介の悲痛な声にフィレーンは満足した。

これぞ中学生ライフ。13歳の生き様だ。世間一般的には間違っているかもしれない。しかし、フィレーンにとってはこういう生活が一番自分の中学生らしい生活だと確信していた。

～門田のひとり言～

俺の名前は門田祥平。

陽南中学2年4組8番だ。

去年仲の良かった洋介や前島、あと山本とは違うクラスになってしまった。正直寂しい。だって、あいつら三人は同じクラスなのに俺だけ一人なんて……。

先生の阿呆！！教育委員会に言いつけてやる！！

……って意味ないか……しかも、できないし。

それはともかく、一人になってしまったのだ。

友達作るの苦手な俺としては、誰か一人ぐらいいて欲しかった。でも、いないものは仕方がない。

そのうち作ろう、とは思うが、今日のところはとりあえず、あの三人のいる2組に遊びに行くことにした。

そのうち作るよ。そのうち。明日にでも……ね。

で、遊びに行ったわけ。

そしたら、なんか2組の前の廊下に妙に人がいるんだ。

転校生らしい。名前はエイチとかいうんだって、金髪で目青いって、外国人とかハーフとかカラーコンタクトだとか皆で噂してるのさ。俺にとってはどうでも良かったし、聞き流して入ったら本当に金髪だったんだよ。本気でビビった。すごい不良だと思った。

良く見たら、その後ろの席が洋介の席で、俺、洋介が危ないって思ったのよ。友達思いっしょ？

すぐに行こうと思ったら、前島と山本も洋介の方に行くから一大事なのかなって思った。

でも、前島と山本の顔がニヤニヤしてたんだ。

あ、なんか面白いことあったんだなって思って一緒に洋介のところに行ったら、前島が洋介を小突いて、山本が転校生に気軽に声かたんだよ。

俺は一瞬ヒヤッとしたけど、その転校生別に怖い人じゃないみたいだった。

目つきは多少悪いけどコンビニ前で学ラン着てタバコ吸ってる兄さん達みたいなトゲトゲオーラも出てないし、むしろ高貴で優雅な感じ。

いいなあ……俺もそういうのがあったらなあ……。なんて思ったけど、俺には似合わないのもその妄想はすぐに消えた。

俺はワイルドな男を目指すんだからな。うん。タツ兄みたいなワイルドな男になるんだ。

そんで、タツ兄みたいにかわいい彼女を作……るのは無理か、高望みはしないでおこう。

それはそれとして、転校生と話してたら、どうやらタツ兄のこと知ってるらしいんだ。何でかは、わからなかったんだけど、そうらしい。

俺は別に直接知り合いてわけじゃないから、なんか転校生がうらやましかった。

そうなんだよ。この前、洋介に「弟子にしてってタツ兄に頼んで」って言ったら、洋介の奴タツ兄に言いもしないで、「弟子はとらないと思うよ。舎弟ならいいと思うけど。」とか言ったんだ。

舎弟でもいいからって言ったら、「じゃあ言っとくよ」って言ってたんだけど、たぶん洋介は忘れてるんだろう。返事は聞いていない。

そんなこんなで、関係ない話もいろいろ混ざって支離滅裂（四字熟語。これ、前島がよく使うから覚えた。）

になったけど転校生と仲良くなれそうです。  
新しいクラスにも頑張っ  
て慣れていこうと思います。  
門田祥平に清き一票を。(これも前島がよく使うネタ。)

## カイチヨウ

---

掃除時間、洋介は教室内で雑巾を絞っていた。

今時、雑巾を水でぬらして雑巾がけもないだろう。モップ使わせてくれよ。あるんだから。

洋介は正直、そう思っていた。が、掃除にできるだけ時間をかけたい気持ちもひとしおだった。放課後など来て欲しくもない。

そう思った矢先だった。教室の入り口から女生徒の声がした。

「河崎洋介君いますか〜？」

洋介はその声に顔を引きつらせる。

来た。来てしまった。地獄からの迎えが……。

「そこで雑巾絞ってます。」

応えたのは同じく教室掃除をしていたフィレーンだった。フィレーンは箒で床を掃いている最中だった。

おそらく名札で学年を把握したのだろう。彼女が先輩だと気づいたらしく丁寧語で対応している。

「入ってもいい？」

「どうぞ。」

女生徒は掃除中なので気を遣ったらしく、フィレーンに許可を得てから教室に入ってきた。

洋介は彼女のことは見たくなかった。例えそれが現実逃避以外の何者でもなくても。

肩に何かが触れた。それが、その女生徒のものであることは知っていたし、この後、何が起こるのかも大体予想がついていた。

動揺からか、絞りきる前に雑巾をバケツから離し、床へ下ろす。

「行くわよ。」

すぐ近くで女生徒の声がする。

「いえ、でも今掃除中ですし……」

洋介は女生徒の方は向かずに、水を含みべちゃりとしたままの雑巾で床をふこうとした。

ああ、何故自分は無駄だと知っていながら抵抗を試みるのだろう。

「い・く・わ・よ♪」

洋介が恐る恐る振り返ると、生徒会長が満面の笑みを浮かべていた。

「ははっ……」

洋介は力なく笑ったのとほぼ同時に、生徒会長が洋介の腕をつかんだ。

はっきりと周りの風景が映ったのは、そこまでだった。

いつも、よくわからない間に生徒会室についている。景色と人が、視界を風のように横切っていく、頭がぐるぐるして、体が痛い。いつもそんな感じだ。

「うあああああああ……」

基本的に洋介はずっと叫んでいる。

「いってらっしゃーい」

廊下掃除をしていた山本の声がかろうじて耳に入った。

まず、教室のドアにぶつかる。次に廊下の曲がり角にぶつかり、最終的には階段で数えきれないほどぶつかる。

そして、やっとなぶつかるのをやめた頃、ドアの開く音がする。

「ただいま〜」

生徒会長がそう言って、生徒会室に入る。

「生徒会室に入ってきて、ただいまはないでしょう……。」

あきれた口調で返してきたのは副会長だ。

洋介は生徒会長の手を引き剥がして、副会長にすがりついた。

「うああーん！！谷口先輩、聞いてくださいよ！会長酷いんですよ！！」

洋介の言葉に生徒会長はムツとした。

「何よ。私そんな酷いことしてないじゃない。」

「まあまあ、坂本さんも河崎君も落ち着いて……。」

「ドアと曲がり角と階段で、ありえないくらいぶつかったんです！！これはもはや、会長が俺のこと人と思っていないとしか考えられません！」

「え？そんなにぶつかった？ごめん。気づかなかった。」

ここまでの一連の流れが、生徒会がある日の恒例となっている。

軽い調子で謝るショートカットの女子生徒。坂本優。彼女が陽南中学の生徒会長だ。

「なんというか……役員狩りって感じですね。」

眼鏡をかけ、落ち着いた風貌をしているのが谷口雪彦。副会長である。

実は洋介も副会長なのだが、それは形だけという感じだった。実質、生徒会はこの二人が動かしている。

洋介は去年の後半にこの二人と共に生徒会をやっていてそれを知っていた。

周りにいる役員達も、あきれた笑顔で洋介と坂本を見ていた。

「さて、役員も全員そろったところで会議よ会議。」

坂本は洋介の言葉も周りの目も気にすることなく話し始めた。

「会議って……何の会議するんですか？」

あきれた口調で洋介が聞く。逃げられないなら腹をくくるしかない。

「そんなもん、この半年の活動計画に決まってるでしょ。はい、何か意見のある人。」

そんなこと急に言って意見が出るはずないだろう。ってか、結局この人一人で全部決めるんだよね。

洋介はそんなことを思っていた。

十秒ほど待ったが、案の定何の提案も出ない。いつも通りやればいいじゃないか。コレが大半の意見だろう。それがこの沈黙に現れている。

洋介も同感だった。何も無駄に仕事を増やすことはない。

「私が去年一年、生徒会をやっていて思ったのは、イベントが少ないってことなのよ。」

そうやって、坂本は黒板にカツカツと文字を書き始めた。

球技大会（3回）、文化祭、体育祭、合唱コンクール。

書き終わるとカツンとチョークで黒板をたたき、全員を見回した。

「たったコレだけです。一年12ヶ月365日8760時間525600分3156000秒。こんなに時間があるのにたった4つです！」

そんなに学校来ないよ。しかも、テストとかあるじゃん。部活だって大会あるだろ。

その場にいた大半がそう思っていた。思っていて口には出せなかった。

「そこで、あと2つぐらい祭りを増やしたいと思います。」

誰か止めろよ。この会長を。

洋介は、他力本願なことを考えながら話を聞いていた。

「私が考えたのは雨祭り。これから、梅雨になり、室内でつまらない遊びをして若人が体と精神にカビを生やす季節になります。」

洋介はため息をつき、谷口がいつものように止めてくれるのを待っていた。

「なるほど、確かにそうですね。それで、その雨祭りとは一体何をするんですか？」

突然聞こえた声に生徒会室にいた全員がドアの方を向いた。

「フィレーン！！？」

ガタンと音をたて、洋介が立ち上がる。

「おまっ・・・何でっ・・・ええ?!」

洋介が動転していることなど気にもせず、目を輝かせたのは生徒会長だった。

「良くぞ聞いてくれました！！何か知らんけど金髪の人！」

フィレーンは「何か知らんけど金髪の人」と呼ばれたことに若干の怒りを感じ顔を引きつらせた。

フィレーンの後ろで山本がひらひらと手を振っている。

(あの野郎・・・余計なことを・・・)

どちらへともなく（むしろ両方を）睨みつけて、洋介は椅子に座りなおした。

会長が咳払いをする。全員の注目が会長に戻る。

「雨祭りとは、ずばり！皆で雨を楽しもうというお祭りなのです！」

「そのまんまじゃないですか！！」

洋介が突っ込んだが、会長はいつものようにそれを無視した。

「具体的には、雨の中で鬼ごっこなどをして童心に返り、ジャージをぐしょぬれにして親に怒られるという素敵イベントを経由した上で、その日の夜に雨粒が屋根に当たる音を聞きながら心臓をバクバクいわせて電話で意中の人の自宅に愛の告白をしようとしたら家族の人が出て、うわあああ！どうしよう！？と、焦って受話器を思わず切ってしまうという寸法です。」

「いや、ワケわかんないですよ！それ！」

再び洋介が突っ込んだのだが、これもまた、無視される。

「なかなか壮大な計画ですね。」

フィレーンがにやりとした。

「ふふ・・・あたりまえじゃない。生徒会長ですもの。」

言って会長は前髪をかきあげる。

「最終的には、体育祭のあと体育館裏で直接愛の告白タイムに突入して OK をもらい、その現場をこっそり見ていた友人達に茶化されながら祝福されるということですね。」

「惜しいわね、体育館裏じゃなくて屋上よ。」

「これは失敬。屋上がありましたか・・・」

会長とフィレーンは向き合っていた。その顔は好敵手を見つけた格闘家のものであった。

「あなた、生徒会に入らない？」

「いえ、そのつもりはありませんので。」

「そう・・・残念だわ。」

完全に別の世界に行っている二人を眺めた後、洋介は谷口副会長に話しかけた。

「あの・・・そろそろ止めませんか？」

「そうですね。見てるのおもしろいんですが・・・会議も進めないといけませんし。」

おそらく、この学校内でこの暴走特急生徒会長を止められるのは彼しかいない。

谷口は声を荒げるでもなく、立ち上がるでもなく静かに生徒会長に語りかける。

「坂本さん。そろそろ本題に戻りましょう。」

「ん？あ、そうね。何か意見のある人。」

驚くほどすんなりと会長は席に座り、何事もなかったように話を進めた。

「雨祭りの件についてですが、後半は実現不可能かと思います。」

谷口が言う。

「えーなんで？」

本気で言ってるのか、この人は……。

洋介はそう思いながら、口にはしなかった。会長をうまく動かせるのは谷口先輩だけだ。先輩に任せるのが一番だ。

「まず、全校生徒が全員、意中の人がいるとは限りません。それに、電話しても家族の人が出るとは限りませんし、もしかすると誰も取ってくれないかもしれません。」

洋介はいつも思う。こんな説得でいいのか。と。

「うーん、確かにそうね。自宅番号を知らない可能性だってあるものね。」

「さらに、屋上には生徒全員は入れません。当然男女比も正確に1対1ではないので、OKが出ない人もいるはずです。」

「そうよね……。人生そんなに甘くはないものね。」

妙に納得して、会長は役員に向けてこういった。

「じゃあ、雨祭りはない方向で。」

洋介は、前半はできないとは言っていないんだがなあ。と思いながらも、せつかくなくなったのに、わざわざ穿り返すこともない、と思い直し、手を叩いた。役員達からも拍手がおこった。

会長は少しの間残念そうにしていたが、突然パッと顔を輝かせてこう言った。

「じゃあ、代わりに台風祭りを……」

洋介を含めて、役員全員が立ち上がった。

『いいかげんにしろ！！』

## カイチョウ ～幕間～

---

### ～弓道部の部活動～

ここは陽南中学運動場の端っこ。弓道部の活動場所である。

「おーい、前島。河崎と山本はどうした？」

部長に声をかけられ前島が振り返る。

「河崎は生徒会です。生徒会長に拉致られたって山本が言ってました。」

前島の答えを聞いて部長は苦笑する。

「ああ、今年も生徒会やってるのか、河崎は・・・坂本さん張り切ってるもんなあ〜。」

どこか遠い目でそんなことをいう部長は、たしか今年のクラス替えで坂本会長と同じクラスになったと嘆いていた。

「はは・・・部長も大変ですね。文化祭どうなるのやら・・・。」

「前島。それは言うな。考えたくないんだ。・・・で、山本は？」

「おもしろそうだから、フィレオンを連れて行くって言ってました。」

「ああ、例の転校生か。気が合うかもしれんな、坂本さんと。」

「そうですね・・・。」

柔らかな風が二人の間を縫うように吹いた。

「で、門田は数学の補習か・・・。」

「そうですね。」

「・・・。」

部長が前島の両肩をつかみ、目をまっすぐ見つめた。

「友達を選んだ方がいいぞ。」

「山本に関してはそう思わなくもないですけど、河崎と門田はいい奴ですよ。」

「たしかに、河崎に関しては河崎に責任があるわけではないが・・・あいつは不幸に巻き込まれそうなオーラを出してるからな、一緒にいると、そのうちお前も巻き込まれるぞ。」

「そんな言い方しないで下さい！！」

前島は部長の手を払い叫んでいた。

「あいつは・・・確かに苦労性で人に思いっきり振り回されるし、いかにも厄介ごとに巻き込まれそうですけど・・・けど」

前島は両の拳を硬く握り締め、部長の顔を見た。

「いじりがいがあるんです・・・。楽しいんです、あいつをいじめるの。」

部長がふっと微笑んだ。

「お前も・・・山本と同類だったんだな。」

そしてくるりと前島に背を向け歩き出す。

去り際に部長は背を向けたまま前島にこういった。

「友達を選べって言葉・・・今度、河崎に言うておくよ。どうやら、あいつに言った方がいいらしいからな。」

「ええ、そうですね。そうしてください。」

部長の影が夕焼けに映えていた。これぞ男の哀愁。

前島はそんなことを思いながら部長の背を見送った。

ここは、やる気ない感じの陽南中学弓道部。

彼らの放課後はこうして過ぎていく。

窓の外では、いつものように雨が降っていた。

窓脇のカーテンレールに吊り下げられた照る照る坊主が、所在なさそうに室内の人間に背を向けている。

「降ってますね」

フィレーンが窓の外を眺めながら隣にいた先輩に話しかける。

「そうですね。ここ数日降りっぱなしですね。」

眼鏡をかけた落ち着いた風貌の生徒会副会長、谷口雪彦が机に置いた数学の宿題から目を離し応えた。

「ってか、なんでお前が生徒会室に居座ってるんだよ。」

洋介がくだらない質問をしてくる。実にくだらない質問だ。あまりにくだらないので、フィレーンはその問いを無視した。

「いつまで降るんでしょうね。」

「さぁ・・・天気予報では2、3日は降り続くそうですよ。」

谷口と和やかに会話を続ける。

「いや、おい！無視するなよ！！」

洋介が声を荒げたが、そんなことはフィレーンにはどうでも良いことだった。

「何かおもしろいことありませんかね？」

「面白いことですか・・・難しいですね。とりあえず、河崎君の相手をしてあげたらどうですか？」

「さして面白くもないですよ。洋介の相手しても。」

フィレーンはさらりと言った。実にどうでもいい事だ。

「おい！フィレーン、お前今さりげに酷いこと言っただろ！！」

「そういえば会長は何処へ行ったんですか？」

フィレーンは洋介のことはとりあえず無視して、話を進める。

谷口はいつものように軽くハハ、と笑うと生徒会室のドアに目を向けた。

「そのうち帰ってきますよ。」

廊下をパタパタと走る音が聞こえてきた。

谷口が「ほらね」と言いたげにフィレーンに微笑みかけた。

ドアが勢いよく開いて生徒会長である女生徒が姿を現した。坂本優だ。

満面の笑みを浮かべて、コンビニの袋を室内の3人に突き出した。

「なんですか、それ？」

洋介が聞くと、会長はフッフッフ、と不適な笑いを漏らした。

「よくぞ聞いてくれました。河崎君にしてはいい質問ね。」

「いや、河崎君にしてはってどういう意味ですか?!」

洋介はせっかく褒められたのに、またいつものようなくだらない質問をする。

「そのまんまよ。そんなことより、これが何かって聞いたわね。」

「そんなことよりって・・・」

言いかけたが、洋介は何かを悟ったらしく口を止めてからため息をついた。

「これはねえ・・・」

とりあえず、3人は会長の周りに集まり、会長が続きを言うのを待った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

洋介とフィレーンがつばをごくりと飲み込み、十分に間が出来上がるころだった。

「水鉄砲ですか。」

谷口が袋の中身をちらりと見て、さらりと言ってしまった。

「・・。」

会長が無言で間の抜けた顔を谷口に向けた。

「?どうしました?」

谷口はきょとんとしていた。

「なななな何で言っちゃうのよ!! せっかく絶妙のタイミングで私が言おうと思っていたのに!!」

「は?」

「だから、私のせっかく作り出した雰囲気と演出効果がね、ね?!」

会長が必死で訴えたが、谷口は全くわかっていないようだった。

「え? いや、よくわかりませんが・・・・・・・・その、すみません。」

どうやら谷口はあまり空気が読めない人間らしい。フィレーンはそんなことを思っていた。

しかし、水鉄砲とは思わなかった。この、雨のさなかに水鉄砲で何をするというのだろうか。

「ま、まあいいわよ。谷口くんは大体いつもそんなんだし。」

「でも、水鉄砲なんかどうするんですか? 雨の中で撃ち合いしても楽しくもなんともありませんよ。」

洋介が言う。確かにそうだ。フィレーンも同意見だ。

「は? 誰が雨の中で撃ち合いなんて面白くもなんともないこと何かするのよ。」

「じゃあ、室内か?」

フィレーンの言葉に坂本の瞳が輝いた。

「そう! 雨の日に室内で水鉄砲によるサバゲーをするのよ。ワケがわからない感じでいいでしょ。」

「サバゲーってなんですか?」

谷口の質問に洋介が答える。

「サバイバルゲームの略ですよ。まあ、多分会長がやりたいのは水がかかったら負けてゲームでしょ?」

「そんな感じね。この階を範囲にしてやるんだけど、どう?」

フィレーンと洋介は顔を見合わせた。

暇つぶしにはちょうどいいが、制服がぬれてしまう上に、先生に怒られそうな気がする。

坂本はキラキラした瞳で二人を見ていた。

先に洋介がため息をついた。

「やりますよ。やればいいんですよ。」

拒否権なんかあるわけがない。おそらく、そう思ったのだろう。フィレーンもそれを理解して苦笑した。

「もちろん僕もやりますよ。」

坂本がにやりとした。

「ちなみに、負けた人間は最後まで残った人の言うこと何でも聞くのよ。」

「マジっすか?! .. . よーし。それなら頑張るぞ。」

洋介が俄然やる気を出す。

フィレーンには完全にどうでもいいことだった。しかし、勝負ごとには負けたくない。

坂本が一つずつ水鉄砲を渡す。

「じゃ、水の補給は各自で勝手にやること。合図してから30秒後にゲーム開始ね。」

「了解。」

「よーい・・・スタート！！」

洋介の目がかなり本気なことと、坂本の口元が笑みの形を描いていることを気にしながらフィレーンは水の補給に向かった。

谷口も、いつの間にかやることになっていたらしく、不思議そうな顔をしながら水道に向かっていった。

\* \* \* \* \*

そろそろ30秒が経過する。

フィレーンは廊下にたたずんでいた。

1階の見取り図は、この1ヶ月でだいたい頭に入っていた。

どうせ、至近距離からでなければ、命中しないのだ。変なところに隠れるよりは見通しのいいところにいたほうが懸命だろう。

水道があるのはトイレ周辺のみ。とりあえず、ターゲットは洋介だ。

一番行動がわかりやすい。

おそらくトイレで身を隠しているとかその辺だろう。

フィレーンは辺りを見渡し、誰もいないことを確認してからトイレへ向かった。

どうせ、しばらくしたら不安になって出てくるだろう。

ここで待ち伏せしているのが妥当な気がする。

開始から1分が経過した。

トイレの中から足音が聞こえてきた。

フィレーンは一瞬、他の生徒である可能性も考えたが、1分以上もトイレに入っている男子生徒なんてそうそういない。

洋介か谷口だろうと考え、水鉄砲を構えた。

その際、周囲の安全を確認することも忘れない。

トイレの出口の前で足音が止まる。ドアがゆっくりと開いた。

今だ！

フィレーンはドアを開けた人物に放水した。

「うわぁ！」

谷口だ。

続いてフィレーンの顔に水がかかった。

「あ」

「あらら」などと言っている谷口の後ろで洋介が不適な笑みを浮かべていた。

「いえーい！俺の勝ち～♪」

「??? どういうことだ?!」

混乱しているフィレーンを蔑んだ目で洋介が見ている。

「ふふん♪誰が単独で行動しなきゃならないって言った？」

「谷口先輩を盾にしたのか?!」

「盾にしたなんてそんな・・・ちよーっと前を歩いてもらっただけさ。」

「まぁ、それを盾にしたって言うんですけどね。」

谷口は朗らかに笑っていた。

フィレーンは洋介にしてやられた悔しさから舌打ちした。

「そのセコイ考え方が野上そっくりだな。」

「はっは一！何とでも言うがいい。所詮は負け犬の遠吠えよ！」

いつもは、野上と似ているという怒るのだが、上機嫌の洋介には効果はなかった。

「さーて、後は会長だけだな。」

勢いに乗った洋介は水鉄砲を構えて辺りを見渡した。

「あ、坂本さんなら女子トイレに入っていくのを見かけましたよ。」

谷口の情報に今度は洋介が舌打ちをした。

「ちっ。あの野郎安全地帯に逃げ込んだか……。」

「洋介。お前キャラ変わってるぞ。」

フィレーンがやや啞然としながら言ってみたが、洋介はほとんど聞いていなかった。

「俺は、これで勝利して自由を手に入れるんだ。いわば、自分自身の解放運動！正義は我にありい！！」

「うわぁ……完全に違う人になってますね。」

「隠れているなら出てくるまで待てばいいだけの話。居場所さえわかれば怖くもなんともないわぁ！！」

「おとなしい奴ほど、キレると怖いっていいですからね。」

フィレーンと谷口は完全に外野として洋介を眺めていた。

フィレーンは女子トイレの前で待ち構える洋介を眺めていた。

他の生徒がいなくて良かった。いたら、ただの変態になってしまう。洋介のことだからどうでもいいが。

一緒にいる自分たちまで同類にされるのは嫌だ。本当に他の生徒がいなくて良かった。

と、そんなことを考えてるフィレーンの視界の端で何かが動いた。

洋介の死角となる窓からひとりの女生徒が入ってくる。

フィレーンは気づかないフリをして「そういえば、普通トイレって窓があるよな。」等と思いながら洋介を眺めていた。

坂本が洋介の後ろまで来て、水鉄砲を洋介の背中に向けた。坂本の水鉄砲からピューと水が出て洋介のカッターシャツがその水を吸った。存外情けない光景である。

「つめたっ！！」

洋介が叫んで後ろを振り向くと、坂本が笑顔で立っていた。

「私の勝ち♪」

洋介は絶望とともに、その場に崩れ落ちた。

\* \* \* \* \*

「あれよね。結局普段と変わらないってことなのよね。」

洋介は生徒会室の掃除をしていた。

本来、何人かでやるものだろうが、勝者の命令である。

ちなみに、フィレーンと谷口はそれを眺めているだけである。

「誰が正義かわかったかしら？ねえ。河崎くん？」

「はい……、でも何で俺だけなんですか？」

「セコイ手段使ったからよ。先輩様を盾にするなんて許されるわけないでしょ。」

「いえ、別に私は構わないんですが……」

「谷口君が許しても、私が許さないからダメ。」

洋介がしかめっ面でフィレーンを指差した。

「栄地くんは生徒会役員じゃないもの。」

坂本がさらりと言っただけ。

「不条理だあああああ」

「うるさいわよ。さっさと掃除しなさい。」

洋介の悲痛な叫びは空しく宙に消えていった。

～その日の夜～

フィレーンがいつものよう学校帰りに開封の部屋に遊びに行くと、玄関に見知った革靴があった。開封のものではないが、きちんと揃えられている所を見ると開封が出迎えたらしい。この靴の持ち主は、靴を揃えたりしない。

フィレーンはダイニングキッチンに続くドアを開け、室内に予想通り何かを疑ったような目の男がいることを確認した。開封の同僚で洋介の従兄、野上達也だ。

「おう、フィレーン。学校楽しいか？」

「なんで野上が開封の部屋にいるんだよ。」

「暇だから。」

野上はめずらしく開封の部屋に来て、ダイニングでくつろいでいた。

「彼女と喧嘩でもしたのか？」

フィレーンの問いに、野上は苦笑した。

「お前、いつから開封みたいなこと言うようになったんだ？」

「割と最近。」

「まあ、残念ながらハズレだけだな。」

と、野上は勝手に淹れたコーヒーを一口飲んだ。

フィレーンは部屋を見渡し、部屋の主がいないことに気付いた。

「それより開封は？」

「買い物行った。」

野上の答えを聞きながら、フィレーンは鞆を床に放って、野上の向かいに腰掛けた。

「で、彼女はどうしのさ。」

「お前、俺がいつも彼女と一緒にいるとでも思ってんのか？」

野上のさめざめした声に、フィレーンがキョトンとする。

「違うの？」

「ガキの発想だな。」

「ガキで悪かったな。」

フィレーンはふてくされて言い返したが、野上は鼻で笑ってそれ以上は何も言わなかった。そして、コーヒーをもう一口飲む。

「友達と遊びに行ったよ。」

「は？」

唐突な会話の変化にフィレーンがついていけなかった。

「だから、俺の彼女。友達と遊びにいったんだよ。」

「ふーん。」

適当に相づちはうったが、正直、フィレーンはそんなことに興味はなかった。

「あれだな。将来の決まった男の余裕ってやつ。」

「何が余裕だよ。寂しくて遊びに来たんだろ。……で……将来が決まったってどういうことだ?!」

フィレーンが驚いたのを見て、野上が満面の笑みを浮かべた。

「そ・の・ま・ん・ま。もう、結婚決まったんだよ。ご両親に挨拶にも行ったし。」

「・・・・・・・・え」

フィレーンの呆然とした顔に野上は満足した。

「ただいま〜」

玄関からこの部屋の主の声がした。開封が帰ってきたようだが、フィレーンの頭の中はそれどころではなかった。

「えええー—————ッ?!」

「どうしたんですか?!」

フィレーンの叫び声を聞いて買い物袋を持ったまま、開封がダイニングに駆け込んできた。

「よお開封。式の日取り決まったから教えてやろうと思って来たんだが何かフィレーンの奴驚いちゃってさ。」

「ああ、決まったんですか。おめでとうございます。いつですか？」

「開封知ってたの?!野上が結婚するって。」

焦るフィレーンを見て開封は首をかしげた。

「あれ?フィレーンさんは知らなかったんですたっけ。あ、そういえば言ってませんね。でも、そんなに驚くほどのことでもないでしょう。」

「だだだだって野上だよ?!」

「ええ。もう、いい年ですしね。付き合っただけ?二人がいいならいいんじゃないですか？」

「親とか何も言わないの?!」

「結構気に入られたって言ってましたよね。」

「そんなアホな!!」

「フィレーンさん。失礼ですよ。」

困った顔をして言ってから、野上の方へ顔を向ける。

「で、いつなんですか？」

「10月4日。本当は6月の花嫁ってやってみたかったんだけど、一年も延ばすのやだしね。」

「へー大抵半年先くらいと聞きますけど、空いてましたか。まあ、幸せそうで何よりですよ。」

「開封も幸せにならなきゃダメだぞ。」

「ですねえ・・・」

「て、訳で酒。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

開封の表情が固まった。今、冷蔵庫内には酒類はない。加えて、野上が酔うと絡み酒なので面倒だ。

開封は表情を変えないまま、暫しの間そんなことを考えて対応策を選択した。

「さあて、フィレーンさん。今日は夕飯食べていきますか？」

くるりと振り返りフィレーンに話しかける開封。

「え?あ、うん。」

フィレーンがそれに答える。

「開封!お酒!」

「今日はハンバーグですよ。」

野上が懸命に開封に声をかけるが、開封は反応しない。

「開封さーん!お酒くださーい!!」

フィレーンが一瞬野上を見た。そして、開封の判断に従うのが賢明であろうと思った。

「うわーい。僕ハンバーグ大好きー」

無視を決め込み、わざとらしい演技もしてみる。

「てめえら俺の話聞けよ！！」

結局、野上が酒をあきらめるまで、二人は無視を続けたのだった。

チャイムが鳴り、教師が立ち上がった。

「鉛筆置いて、解答用紙を後ろから回収してください」

静まり返っていた教室に、ため息混じりなざわつきが戻った。後ろの席から解答用紙の束が回ってくる。フィレーンは洋介から受け取ると、自分の解答用紙を上のにせ前の席の上田に渡した。

期末テストの初日である。本日の科目は英語、音楽、理科だった。

「きり一つ、れー」

日直当番のお決まりの号令で「ありがとーございましたー」と形ばかりの礼をして、全員着席する。

フィレーンは後ろを向き、洋介に話しかけた。

「ダメそうなのか？」

解答用紙を受け取ったときに一瞬見えた表情から、そうなのだろうと思ったのでそのままストレートに聞いてみる。

洋介は顔を一瞬引きつらせたものの、反論はせずに机に突っ伏した。

「そうですよー。今回こそダメそうですよー。」

前島と山本が洋介の周りにやってきた。洋介の様子を見て、テストの出来がどうだったのかを悟ると前島の顔には同情が浮かんだ。

「お前もダメだったのか……。俺も理科は完全に山勘外したよ。」

対して山本は飄々としている。

「終わった事は後悔しても仕方ない。俺は、明日の数学に向けて今から悪あがきしてみようと思うので、さらばだ。」

「あ、ちょっと待てよ山本！お前の勘当たるんだろ？数学の山はってくれよ！じゃあな、洋介、健闘を祈る！」

山本が鞆を持って教室を去り、前島はその後を追いかける。

二人が去った後、門田が教室に入ってきた。そしてキョロキョロと周囲を見回す。

「あれ？前島と山本はもう帰ったの？」

二人の姿が見つからないようなので、門田は洋介に話しかけた。

「洋介どうだった？って、ダメそうだね。あー俺、今回も補習組かも……。洋介も補習だったら一緒に受けような」

洋介は「俺は補習まではいかない」と思いながら「うーうん」と返した。

「早く帰って、ちょっとでも勉強しなきゃいけないし帰るよ。じゃ、また明日！」

そう言って門田もそそくさと教室を出て行く。

洋介は机に突っ伏したまましばらくじっとしていた。フィレーンはそれを眺めていた。

いつまでも自分を眺めているフィレーンに、洋介は机に突っ伏したまま声をかける。

「で、フィレーンはどうだったのさ。」

「いつもどおり。」

フィレーンはしれっと応えた。

いつもどおり。その言葉を聞いてから、洋介はフィレーンの中間テストの結果を思い出した。フィレーンは全科目90点台の解答用紙を机の上に広げて「まあ、こんなもん。」と平然と言っていた。髪の色がこれだし成績ぐらいよくないと色々言われるから。とも言っていた。

「どれくらい勉強してんの？」

洋介は、顔も上げずにフィレーンに聞いた。

「そこそこ」

フィレーンは短く応える。洋介は間を置かずに次の質問を投げかける。

「なんかコツとかあんの？」

「なくはない」

「教えてとか言ってもイヤだって言うんだろ。」

「いいよ。」

「ほら、やっぱ……え？」

洋介はそこでようやく机に張り付いていた顔を上げた。

「勉強、教えてやってもいいよ。」

フィレーンがもう一度繰り返した。

「マジで？」

洋介が再度確認すると、フィレーンは頷いた。

\* \* \* \* \*

「フィレーンの家って金持ちなんじゃなかったっけ？」

洋介は、築年数のかなりたっているであろうアパートの階段を上ろうとしたフィレーンに問いかけた。

家で教えてやるよ。とフィレーンが言うので付いてきたのだが、あまりにも想像していたものと違うのでつき聞いてしまった。しかも中学の学区外なのが謎だった。

それとも、一見普通のアパートのように見せかけて、中に入ると地下へと続くエレベーターがあるとかそういう要塞的な家なのだろうか。などと想像してみたが、さすがにSFじゃないんだから、と、その妄想は振り払った。

「父親の家は無駄にでかいよ。庭とプール付きで、家政婦も雇ってる。」

自分の家のことを「父親の家」と呼ぶのもいまいち理解できなかったが、お金持ちというのはそういうものなのかもしれないと思い、洋介は次に浮かんだ疑問を素直に聞いてみた。

「フィレーンて一人暮らししてんの？」

フィレーンはそのまま階段を昇っていくので、洋介はとりあえず後に続いた。

「いいや。何言ってんの？」

洋介の質問に答えながら、フィレーンは廊下を進んで奥から2番目の部屋の前で立ち止まり、靴から鍵を出した。それを鍵穴に差し込んでまわす。鍵が開く音がした。

フィレーンはドアを開けて、玄関に入る。そして、洋介に入るように促した。

「じゃあ、ここは誰の家だよ？」

洋介は怪訝な顔で玄関には入らずにフィレーンを見ていた。

「誰って、開封の家だけど。」

さも当たり前のようにフィレーンが言う。洋介は困惑していた。

(カイトフォンで誰だよ。てか、何人だよ。)

フィレーンがあまりにも普通の事のように言うので、どこから突っ込んでいいのかわからず口ごもる。

「入れよ。」

再び促されて、洋介は仕方なく玄関に踏み込んだ。そのときだった。

「あーっ！」

声が出たので振り返ると、階段の方にセーラー服の女子生徒がいた。そういえば、この辺りの中学の女子

の制服はセーラーだったな、と洋介は思い出した。アパートの住人らしい。同時に、洋介はハッとした。これは、何かやはり不審者と思われているのではないだろうか。

「ち、違うんです！」

何が違うのかはわからないが、洋介は咄嗟にそう叫んでいた。フィレーンが廊下に顔を出し、少女に話しかけた。

「あ、由紀。久しぶり。」

「え？」

洋介が状況を理解できていない事など気にせず少女とフィレーンは話し始めた。

「あーやっぱりフィレーンやん。久しぶりやねー。この時間ってことは、あんたの学校もテストやったん？」

「うん。明日に向けて、勉強しようかと思って。」

「フィレーンは勉強せんでも点採れるやん。」

「そんなことはないけど、こいつが教えてくれって言うから。」

「あ、ちょうど良かった！私も混ぜて！数学でわからんところあってん！」

「ああ、いいよ。」

「ほな、お母さんに言ってからすぐ行くわ。」

少女は早口の関西弁で言うと、一番奥の部屋へ「ただいまー」と言って入っていった。

「あれは田中由紀。同い年で、元々関西出身だから関西弁なんだ。開封の家の隣に住んでる。」

「へー」

フィレーンの説明に洋介はそうとしか応えられなかった。

(だからカイトンて誰だよ。てか、何人だよ。)

「入れよ。」

フィレーンにもう一度促されて、洋介はようやく部屋に入っていった。

由紀は少し経ってから、おにぎりを持ってやってきた。

「お母さんがお昼まだならどうぞって」

「あ、ありがとう。開封いないからどうしようかと思ってたんだ。」

フィレーンは由紀からおにぎりを受け取り、洋介のいるダイニングに戻ると、むしゃむしゃと食べ始めた。

洋介も勧められるまま、おにぎりをほおぼる。

(だからカイトンて・・・)

洋介は何度も同じ疑問を頭の中で繰り返しながら、完全に聞くタイミングを逃したことを後悔していた。

「あ、そうや。初めまして。田中由紀です。中2です。小3まで関西で暮らしてたので、こんなしゃべり方ですが、よろしくー」

少女はカラッとした明るい笑顔で自己紹介をしてきた。我に返った洋介も、あわてて自己紹介をする。

「河崎洋介です。フィレーンの同級生です。えーと・・・」

他に何か言う事はあったかな、と思いを巡らせているとフィレーンが口を挟んだ。

「野上の従弟な。」

由紀はそれを聞いて「あー」と声を漏らし、こう続けた。

「お悔やみ申し上げます。」

「どゆことっ？！おく、お悔やみて！」

洋介の狼狽ぐあいにも、由紀はカラカラと笑っていた。

「河崎君、フィレーンにいじめられてるやろー。あと、野上さんにも。なんか、そんな感じするわー」

「正解」

由紀の言葉に、フィレーンが勝手に答える。

洋介は、なんで初対面でそこまで言われなきゃならないのさ、と思ったが、凶星だったので言い返せなかった。とはいえ、腹が立ったので、フィレーンのことは睨みつけておいた。

フィレーンは一瞬だけ洋介の方を見たが、すぐに鞆から教科書とテスト範囲を書いたプリントを取り出した。

「由紀のここは教科書どこの？」

「あ、それぞれ。おんなじヤツ。テスト範囲はちゃうけど。」

由紀はフィレーンの出したプリントを見ながら「しまった」という顔をした。

「うちの学校の方がちょっと進んでんねんなー。フィレーンどこまでやってる？」

「教科書のレベルなら一通り最後まで理解してるから大丈夫。」

フィレーンがとんでもないことをサラリと言ったので、洋介は言葉を失った。賢いのは知っていたが、そこまで予習済みとは思わなかった。

「さっすがフィレーン様様やねー。ほんま天才は違うわー」

由紀は特に驚きもせずに関心している。

「由紀がわからないの、どの辺かまとめといて。」

フィレーンはそう言うと、電話機周辺から付箋を持ってきて自分の教科書にぺたぺたと貼り始めた。

洋介がぼーっと見ていると、フィレーンは付箋を貼った自分の教科書を洋介に渡した。

「付箋貼ったところが、今回の範囲の要点だから、そこの公式覚えること。あとは、その類似問題が出ると思う。ただし、外れても責任は負わないからな。」

「へ？」

洋介はぼかんとしたまま教科書を受け取った。

「なに間抜け面してんだよ。さっさと付箋のどこ見て問題解いていけよ。わからなかったら聞いて。」

「あ、うん」

洋介はフィレーンの手際の良さに唖然とし、間抜け面と言われたことにすら気付かなかった。

「で、由紀は？」

「これこれ。なんでこの式の次がこーなんの？」

フィレーンの態度はそっけないものの、意外にも教え方は丁寧でわかりやすかった。洋介は馬鹿にされたりするかと思っていたが、そんなこともなかった。

二時間ほど経った頃、フィレーンが立ち上がった。

「今から休憩。オヤツにしよう。」

と、キッチンの戸棚からポテトチップスとチョコレート、冷蔵庫からジュースを出した。コップを3つ出してジュースを注ぐ。

「それ、ええの？」

由紀が聞いた。

「うん。僕用に置いてるものだから大丈夫。」

「最近はどのくらい来てんの？」

「週3くらいかな」

「えー？その割には会わへんかったな・・・あ、さては帰宅部やな？帰る時間違うんや。」

フィレーンと由紀の会話にはついていけず、洋介は黙ってジュースに口をつけた。

「河崎君も帰宅部なん？」

突然、由紀に話をふられて洋介はビクツとした。

「い、いえ。弓道部です。」

由紀はきょとんとしていた。

「え？なんで敬語なん？おんなじ学年やで。普通でええよ。普通で。それともあれ？開封的な誰にでも丁寧な感じ？」

「いいや、由紀が恐いんだろ。」

またしても洋介が何か応える前にフィレーンが勝手に返事をする。

「恐い？なんで？なんでなん？！関西弁か、関西弁が怖いんか！私の関西弁、そんな大阪のミナミの方のキツつい感じでもないやん？むしろ京都よりというか、いや京都でもないけど、やわらかめやと思ってんねんけど、あかんの？京都というと『どすえ〜』とか『おいでやす〜』とか思ってる人おるみたいやけど、そんな人京都におらへんからね。あれ、舞子さんとか芸子さんだけやからね。」

「そのマシンガンの話し方が恐いんだろ。」

「えー！うそー！あ、あれかな？話の最後にオチがないとイヤな顔されるとか思ってるとか？大丈夫。もうこっちきて長いからオチのない話でも大丈夫やし、そもそも関西人が全員話にオチついてないとアカンと思ってるわけでもないし、関西弁がどうも抜けへんけど、あっちこっち引っ越してるから関西人ってワケでもありませんよ！」

「語尾に若干無理がでてるぞ。」

必死の形相で弁解する由紀に圧倒されて、洋介はぼかんとしてしまった。ちなみに、今の話の中で頭に残ったのはカيفونという人は誰にでも丁寧に話をすることだけだった。

「恐くないのに・・・」

失速した由紀は少し悲しそうな顔でそう言った。ようやく口を挟む間ができたので、洋介が口を開く。

「いや、恐いわけじゃないよ。」

「ホンマに?!」

とたんにパツと顔を輝かせ、由紀は洋介の手を両手で握った。急な事だったで、洋介は一瞬ドキリとして身を引きかけた。満面の笑みで洋介を見つめる由紀を見て、こうして見ると結構カワイイ子だなと思い今度は別の意味でドキリとする。女子の手に触れるとか小学校の運動会以来じゃないかと思ったが、生徒会長に度々腕をつかまれ引きずり回されていた事実を思い出す。洋介は、生徒会長を女子には入れない事にして小学校以来ということで自分を納得させた。

「ふーん・・・」

フィレーンはポテトチップスを箸でつまんでパリポリと食べながら洋介を眺めていた。心の中を見透かされた気がして、洋介は手を引っ込めた。そして、違和感に気付きもう一度フィレーンの方を向いた。

フィレーンは相変わらずポテトチップスを箸でつまんでパリポリと食べている。

「え？フィレーンて、スナック菓子を箸で食べたりするタイプ？」

「うん。だって手が汚れるだろ。」

フィレーンは当然のように言う。

「ああ、それ私も初めて見たときちょっと引いた。」

由紀が洋介の気持ちを察してか、小さく笑う。そして、自分はチョコレートを口に放り込む。

「洋介、お菓子触った手でそのまま僕の教科書触るなよ。」

「あ、はい」

フィレーンに釘を刺されて、洋介はおとなしく従った。

「そういえば、開封は何時頃帰ってくるの？」

由紀が時計を見ながら話を変えた。

「今日は水曜だから・・・定時退社日だし6時くらいかな。」

フィレーンが答える。

「野上さんも来るん？」

「来ないだろ。たぶん。」

二人の会話に、洋介は大きな疑問を感じた。そういえば、由紀が出会い頭に野上の話をしていたのも今思い出してみるとおかしな話だ。この少女は野上と面識があるようだし、今更だが、フィレーンが野上と面識があったのもどういう経緯なのか聞いた事がない。そして、どうやらこのカيفونという人の家には野上が来る事があるらしい。

「この家、タツ兄が来ることがあるの？」

「うん。」

洋介の質問にフィレーンと由紀が頷いた。なるほど、この家に野上が来るから、お隣の由紀は面識があるということらしい。それは納得できた。

「なんでタツ兄がこの家に来るの？」

「なんでって開封が作ったご飯を食べたり、愚痴ったりするためだろ。」

今度は洋介の聞きたいこととはズレた解答がフィレーンの口から返ってきた。

「え？それって・・・」

洋介は思った事を口にしかけて、ふと不安を感じて口ごもった。部屋の雰囲気からてっきりカيفونという人は男性だと思い込んでいたが、ご飯を食べにくるということは野上の恋人、女性ということだろうか。しかし、この間会った野上の彼女は日本人のようだった。アジア系なら日本語さえ流暢に話せば見分けはつかないこともあるだろうし、もしかしたらあの人がカيفونさんだった可能性もある。だがしかし、別人だった場合、これは野上が二股をかけているという事になる。あの男ならやりかねないと思う気持ちと、あんな綺麗な彼女がいるのに、まさかそんなという気持ちが五分五分ではあるが、仮に二股をかけていたとすると、迂闊な事は言えない。由紀はわからないが、フィレーンなら平然とカيفونさんにその事実を伝えかねないし、そうなるときっと（見た事はないが）昼ドラみたいな修羅場になるに違いない。当然、野上の耳に入り、洋介がバラしたということになる。結果、理不尽なことに野上の怒りの矛先は洋介に向くかもしれない。いや、きっとそうなるだろう。これは深追いは禁物だ。

そこまで考えた所で、洋介はフィレーンと由紀が自分の言葉の続きを待っている事に気付いた。野上とカيفونさんの関係についてはこれ以上聞かないことにして、洋介は一番の謎に取りかかった。

「そのカيفونさんとフィレーンはどういう関係なの？」

洋介の質問にフィレーンと由紀が顔を見合わせる。

「え、フィレーン話してへんの？説明せんと開封の家に連れてきたん？」

由紀が最もな質問をする。フィレーンは、すこし考えてからこう答えた。

「うん。だって、ややこしいから説明するの面倒だし。」

身も蓋もない回答に、由紀が頭を抱えてため息をつく。

「まあ、説明し難いのはわからんでもないけど・・・」

由紀は困った顔をしていた。フィレーンはまた少し考えてからポンと手を打った。何か思いついたらしい。

「小学生のときの、親公認の家出先がここ。」

「知ってる人間が聞いたら納得やけど、知らん人が聞いたらますます意味不明やで。親公認の時点で家出っ言うのかどうかも謎やし。」

「父親の会社の従業員の家。」

「それはそれで事実やけど、それじゃあ説明足りなさすぎるやろ。」

「家出をしようと思ったので、父親の会社の人事部のデータベースにアクセスして、従業員の中から良さそうな人と住まいを選択し、3年ほど居候してました。」

「うーん、70点！」

由紀の採点の意味もよくわからなかったが、洋介は耳を疑うような話の内容に眉を寄せた。

「3年も？」

フィレーンと由紀が頷いた。

「データベースにアクセスって・・・」

「大量データを扱うサーバ・・・要はコンピューターのことだと思ってくれたらいいよ。」

洋介が釈然としない表情でいたので、フィレーンは説明を追加した。

「それって、社長の息子が見れるもんなの？」

「まさか。そんなワケないだろ。本来、社員の個人情報なんて社員でも一部の人間しかアクセスできないもんだよ。社長の息子なんか部外者だしね。」

フィレーンはしれっと言うが、洋介はなんとなくイヤな予感がした。

「犯罪チックな臭いがするんですけど」

「不正アクセスだから立派な犯罪だね。当時、セキュリティの弱かった部分と対策を教えて父親に不問にしてもらったけどね。」

洋介は返す言葉もなく、チョコレートを口に運んだ。チョコレートの味が記憶に残らない程度に脳内は混沌としていた。

フィレーンが時計を見る。いい具合に30分ほど経過していた。

「さて、そろそろ勉強に戻るか」

フィレーンはそう言って問題集を広げた。

\* \* \* \*

洋介は、カイフォンさんとやらが帰ってくる前に家に帰ろうかとも思ったが、二股かどうかをせめて確認しておこうと思い、家の主の帰宅までフィレーンとテスト勉強を続ける事にした。

休憩後しばらく、洋介は話の内容の整理がつかずにぼんやりとしていたが、そうは言っても明日はテストがあるので気持ちを切り替えて勉強に専念した。

一人で勉強しているときより手応えがあったので、今回の数学はかなり高得点を期待できるかもしれないという自信もついた。こんなことなら、もっと早くからフィレーンに教えてもらう事にしておけばよかったと思うと同時に、今後も勉強に関しては世話になることにしようと思い決めた。

他の教科にも軽く手を付け、一通り明日のテストへの備えを終えようとちょうど6時頃になった。こんなに長時間、きちんと勉強したのも初めてかもしれない。大抵は途中でイヤになって休憩から戻らなかったり、気付いたら教科書を枕に寝ていたりした。やればできるものだと、洋介が自分で自分に感心していると、玄関の鍵が開く音がした。

「おかえり」

フィレーンが玄関に向かって声をかけると、ドアが開いて長身の男が現れた。

「フィレーンさん来てたんですね。あ、由紀さんもいらっしやい。」

さわやかな優しい笑顔のよく似合うスーツ姿の男性だ。

「お邪魔してまーす」

由紀が元気よく挨拶をする。男は洋介と目が合うと、軽く会釈をした。

「初めまして、波開封(ポー・カイフォン)と申します。フィレーンさんのお友達ですか？」

洋介の思考は完全に止まっていた。

「野上の従弟の河崎洋介だよ。」

思考停止している洋介の代わりにフィレーンが紹介する。

「ああ、タツの従弟の・・・フィレーンさんがお世話になってます。」

「テスト勉強教えてるんだから、お世話してるのはこっちだよ。」

「フィレーンさん。そういう事は言わないものですよ。」

開封はフィレーンをやんわりとたしなめた。誰にでも丁寧なのは確かだと洋介も思った。だがしかし。

「男かよ！」

洋介は心の叫びをそのまま声に出してしまった。失礼極まりないことをしてしまった事に咄嗟に気付けないほどに、洋介の思考は高速で空回りしていた。

フィレーンと由紀、開封も洋介の方をポカンと見ていた。それから開封は一度目を閉じて次に発する言葉を考えた。

「フィレーンさん。私について、どういう説明をしましたか？」

開封の経験上、こういった事象の原因は大概フィレーンにある。言われたフィレーンは腕を組み、何を言ったかを思い出す。

「父親の会社の社員で僕が3年間居候していた事は話した。性別については、そういえば触れていなかったけど、特に女性を思わせるような要素は話してないはず。」

「誰にでも丁寧な話し方っていうのと、あとは・・・あ、あれちゃう？野上さんが開封の作ったご飯食べにくるとか。」

由紀がフィレーンの後を続けた。開封は納得して「ああ」と声を漏らし苦笑した。

「それって僕が悪いのか？」

「疑ってすみません、そういうつもりではありませんよ。ちょっと勘違いしただけという事ですね。」

やや不機嫌になったフィレーンをなだめて、開封は洋介に微笑みかけた。

「か、彼女じゃなくて彼氏ってことですか？」

洋介は未だに正常な思考に戻っていないらしく、ぷるぷると震えながらそう聞いてきた。さすがに開封の笑顔が一瞬ひきつる。

「そういう、勘違いの仕方します？ただの会社の同僚ですよ。」

開封の応えに洋介の頭を覆っていたモヤモヤが一気に晴れた。

「あ、そうか。そう、ですよ。は・・・ははっすみません。タツ兄が二股で彼氏とか、勉強しすぎて頭おかしくなってますね。ふふ・・・」

思考が冷静になるにつれ、とんでもない事を口走ってしまったという後悔が膨らんでくる。

「いえ、誤解が解ければそれでいいですけど・・・」

開封は言いながら、洋介は野上のことをどういう人間だと思っているのだろうかと思問に思ったが、それについては気にしない事にした。

「男だったから彼氏とは、なかなか柔軟な発想だな。」

「本当に・・・申し訳ありませんでした・・・」

フィレーンは感心して言ったのだが、洋介は泣きそうになりながら開封に謝っていた。

「大丈夫ですよ。誰にでも勘違いはあることですから気にしないでください。」

洋介は、開封の慈悲深さに菩薩様がいるとしたらきっとこんな感じなのだろうと感動を覚えると同時に、鬼神のごとき従弟と友人だなどとはとても信じられない気持ちでいっぱいだった。

しばらく開封になだめられ、落ち着いた頃に洋介は帰宅の途についた。

「大変失礼なことを言ってしまう、本当に申し訳ありませんでした。このことについては、従弟の野上には

どうか内密にお願いいたします。」

「そうですね。私も敢えて話たいとは思いませんし、言いませんよ。」

帰り際に洋介が再度頭を下げてきたので、開封は軽く笑って返事をした。

「あ、そうなの？」

と、携帯電話を操作していたフィレーンが顔を上げた。ものすごく嫌な予感がして、洋介の血の気が一気に引いた。

「今、メール送っちゃったよ。」

フィレーンが洋介の方に向けた携帯電話の画面には「送信完了しました」というメッセージが表示されていた。

「おいっ！」

洋介の叫びが、室内にむなしく響いた。

開封は大きなため息をついて、哀れな洋介をせめて家まで車で送ってあげることにしたのだった。

～帰りの車内～

日は傾いてきていたが、車内はまだ蒸し暑かった。開封がエンジンをかけるとエアコンが動き出したが、その送風も生ぬるかった。

洋介は助手席に乗り込みシートベルトをする。頭の中は次に野上に会ったときにどんな目にあうのかということではしゃいだ。

「お家はどちらですか？」

開封に聞かれて、洋介は我に帰る。

「駅の向こうの、えーと国道も超えて佐々木医院のある通りの坂を上っていった先なんですけど・・・」

「ああ、ケーキ屋さんのある辺りですか？」

「あ、はい。その先の住宅地です。」

「だいたいわかりました。すみませんね、古い車なのでカーナビも付けてなくて」

開封は言いながら、発進した。

「フィレンさんがあそこのケーキさんのチーズケーキ好きなんですよ。」

「そうなんですか」

洋介は、そんな情報には興味がないなと思いながら相槌をうった。

しばらく走った所で、開封が口を開いた。

「大変でしょう？フィレンさんやタツ・・・じゃなくて、野上さんの相手するのは」

開封に問われて、洋介は「ははっ」と乾いた笑いを漏らしす。

「私も最初はかなり疲れましたからねー。」

洋介の言わんとする事を察して開封は困ったように笑いながら、そう言った。ふと気になった事があり、今度は洋介が開封に問う。

「開封さんはタツ兄と仲いいんですね。」

「え？」

「今、タツ兄のこと『タツ』って呼んでましたし」

「ああ、それは『タツ』と呼ぶように強要されたんです。」

開封はやはり笑って応えた。そして、言葉を続ける。

「仲が良いと言われると・・・何か違う気がしますけど、世間的にはそう言いますかね。」

「やっぱり、開封さんも喧嘩強いんですか？」

洋介の唐突な質問に、開封は眉を寄せた。

「いえ、喧嘩なんて二十年以上してませんから分かりませんが、弱い方だと思いますよ。何故急にそんな話になるんですか？」

洋介は、また失礼な事を言ってしまったと少し恥ずかしくなって下を向いた。

「すみません・・・タツ兄と対等っていうとそういうイメージがあったので・・・」

洋介の返答に開封はぶっと噴き出した。そして、おさえきれずに笑い出す。洋介は、何がおかしいのか分からずにキョトンとしていた。

「洋介さんの中ではそんなイメージなんですか？野上さんて。」

「・・・はい。」

としか答えられず、洋介は笑っている開封を見ていた。ひとしきり笑った開封は「あーおかしかった」と

言って、赤信号で止まったタイミングで洋介の方を向いた。

「野上さんも、フィレーンさんも根はいい人ですよ。力で人間関係を決めるような人ではありません。」

「はあ」

開封は優しく微笑んでいた。洋介がすぐにはそう思えないのも分かっていたので、気の抜けた返事が帰ってくるのもなんとなく想像できていた。

「面倒臭い人達ですけどね。」

と、言って少し意地悪く口角を上げる。そして、小声で「これは内密に」と言った。

洋介は、後半に関しては同意して「はい」と答えて開封と同じように少し意地悪く笑った。

信号が青に変わり、車が動き出すと右手に例のケーキ屋が見えた。

洋介は、もし何かフィレーンにすごく感謝する時が来たら、ここでチーズケーキ買っていくことにしようと思ったのだった。

## プール

---

夏の日差しがジリジリと痛い。あまりの暑さにTシャツの袖をまくり肩を出したのだが、その腕は見事にポッキーのようになっていた。登下校と体育でついたTシャツ焼けというやつだ。肩から二の腕辺りまではあまり焼けていないのに対して、そこから指先にかけては綺麗に小麦色に焼けている。

洋介は同じような腕をした友人三人と学校の近くにあるプールの前に立っていた。そして、洋介だけがうんざりした顔で向かいにいる人間を見ていた。

自分達とは違い、何故か全く日焼けしていない白い肌の金髪の少年、四月に転校してきた栄地フィレーンだ。

「なんでお前がいるんだよ。」

「誘われたから来たまでだ。」

洋介の問いに、フィレーンはさらりと答えた。

「なんだよ、洋介。お前フィレーン誘わないつもりだったのか？」

ポッキー仲間である前島がのんびりと聞いてくる。

「まあ、別にフィレーンは構わないんだけど・・・」

洋介はフィレーンをじっと見ていた。

だが、本当に洋介が気にしていたのはフィレーンの後ろにいる男だった。あまり目を合わせたくないのもあって、あえてフィレーンの方を見ているのだ。

「あ、申し訳ありません。勝手についてきてしまって、フィレーンさんがどうしてもと言うので来たのですが・・・。」

フィレーンの後ろにいた男の「片方」が言う。身長は高く、細いのでスラリとした印象の男である。休日なのに白いワイシャツと黒のスラックスを着ている。ネクタイはつけていないものの、どうもプールを連想させない格好だ。

サラサラの黒髪に誠実そうな顔立ちは、この人の性格そのものを映し出していることを洋介は知っていた。

「いえ、開封さんはいいんです。来てくれて嬉しいぐらいですよ。」

これは実際、洋介の本音だった。

「じゃあ何が不満なんだよ。」

フィレーンの後ろにいた「もう一人」の男が言った。開封よりは若干背が低く、これまた細いのだが、開封とは違い筋肉の引き締まった細さである。洋介と同じ癖のある髪。黒シャツに色あせたブルージーンズと、ラフな格好をしている。今はサングラスをかけているため見えないが、その目は「誰かを疑ったような」目をしている。

洋介の従兄であり、洋介が来て欲しくなかった人間。野上達也である。

「いえ・・・何も、不満なんてありません。」

相変わらず逆らえない洋介は、自分の気持ちを押し殺して、こう言うしかなかった。

「ごめんなさいね。勝手に来ちゃって・・・」

野上の横にいた女性が少し申し訳なさそうに微笑んだ。野上の彼女だ。肩にかかる長さの少し茶色い髪は彼女に合わせてふわりと動き、白いカットソーと深い海を思わせるブルーの膝までのフレアスカートがまぶしい。スカートの裾には控えめに貝殻の模様がちりばめられている。

「全然オッケーっス！！」

洋介を含めたポッキー腕の4人が同時に右手の親指を立てて同じことを言った。

「ほう。」

野上の冷たい声に、4人の背筋が凍る。会話が止まり、蝉の声が忙しく耳にしみる。

フィレーンがため息をついた。

「どうでもいいから、早く入ろうよ。」

「だな。」

フィレーンの提案に野上が同意する。

その目はサングラスで隠れているにも関わらず、この炎天下の中、四人の中学生を凍らせるだけの力を発していた。野上は、四人を凍らせておいて、自分は彼女と一緒に中に入って行った。フィレーンもその後続く。

さらに、その後を開封が凍った四人に遠慮がちに入っていた。

「……………やっぱ…怖えな。タツ兄は…………。」

前島が小さな声で言った。残りの三人は黙って頷いた。蝉の声がいつそう大きくなった気がした。

\* \* \* \*

「なんかこう…………スリリングなプールになったな。」

山本が浮き輪でぶかぶか浮かびながら、ポツリと言った。

「タツ兄の彼女キレイだねえ…………。」

門田が山本の浮き輪につかまっている。

「な。フィレーン呼んで正解だったろ？」

前島が平泳ぎをしながら得意げに言う。

「どこがだよ。」

ふてくされたように言ったのは洋介だった。洋介は洋介で自分の浮き輪で浮いていた。

四人は上から見ると流しそうめんの機械のような楕円形の流れるプールで流されていた。野上とその彼女を眺めながら。

洋介はなんとなく情けない気分でした。

「何やってるんだよ。」

あきれた顔でプールの外から声をかけたのはフィレーンだった。25mプールで泳いでくると言っていたが、どうやらそれは終わったらしい。後ろに開封もいる。

少し離れたところで、女子高生らしい二人組みが開封とフィレーンの方をチラチラと見て騒いでいる。

(そりゃ、目立つよな。背の高いカッコイイ男の人と、金髪の中学生って)

劣等感を感じてしまうのは自分だけなのだろうか。

洋介はそう思うと余計に情けなくなってきた。

「そろそろお昼にしませんか？」

開封が笑顔で言う。時計を見るともう12時だった。

「そうですね。」

洋介は、情けない気持ちのまま、無理やり作った笑顔で答えた。

「あ、ホントだ。もう、こんな時間だったんだ。じゃ、上がるか。」

言って、前島がプールから上がる。山本も続いてプールから出た。洋介も、ゆっくりとプールの縁に足をかける。

「あーっ！！」

突然、門田が大声を上げた。

「うわっ！？」

ガンッ

驚いて足をすべらせた洋介が、さっきまで足をかけていた縁に頭をぶつける。そして、ドボンと音を立てて、洋介はプールの中に逆戻りしてしまった。

「おい！！大丈夫か洋介？！」

慌てて前島と開封が駆け寄る。フィレーンと山本はそれを眺めていた。

少し間があって、ホラー映画のごとく、水面から腕がぬっと出てきた。洋介の腕だ。

洋介は、腕の力で、サンショウウオのようにズルズルとプールから這い上がった。

「大丈夫・・・じゃ・・・ない」

言って、洋介は力尽きた・・・かった。が、しかし

「何が大丈夫じゃないだ。馬鹿かお前は。」

容赦ない前島のピンタが洋介を襲う。

開封が驚愕しているのが、洋介には一瞬だけ見えた。

「ってか、どうしたんだよ？門田。」

微塵も心配した様子のない山本が門田に聞く。

「うん。お昼ごはん代もってくるの忘れた。」

前島と山本がため息をついた。

「またかよ。悪いけど今日は貸せるほど持ってきてないぞ。」

「う、うん・・・。」

門田が寂しそうに頷く。

「それでは、今日は私がごちそうしますよ。皆さんの分・・・」

洋介の心配もしながら開封が提案した。途端に、寝ていた洋介が飛び上がる。

「マジっすか?!わーいやったー!!」

「やっぱり、お前大丈夫なんじゃねーか。」

前島が冷めた目で洋介を見ていた。

「わー、ありがとうございます。よかったな。門田。」

特に、良かったな。というニュアンスを感じない声で山本。

「うん。ほんとにありがとうございます！」

門田は素直に喜んでいて。

六人は野上とその彼女と合流し、昼食を食べた。

食べ終わって、少し休憩するとそれぞれ再び遊びに行くことになった。

「ごめん。俺、もうちょっと休んでる。」

頭を打ったこともあって、洋介はいまいち泳ぎに行く気にならなかった。

「そっか。じゃあ、仕方ないな。」

前島が少し残念そうに言ってくれたのが洋介の救いだった。

「フィレーン、今度は俺らと泳ごうぜ。」

が、前島はすぐさま笑顔でフィレーンを誘う。

「うん、いいよ。」

フィレーンが返事をする、友人達はさっさと遊びに行ってしまった。

なんて友達がいない奴らなんだろう。洋介は、それを痛感していた。残ったのは洋介と大人三人である。

「あ、私もちょっと疲れたから休んでるね。」

『えっ?!』

彼女の発言に野上と洋介の声が重なる。

「だから、2人で遊んできて、ね。開封さんも。」

「え、あ……はあ。」

開封も驚いているらしく、呆然としたまま応える。

「ま……まあ、それなら、……そうするよ。」

野上も、そうとう驚いているようだった。

「それじゃあ、ゆっくり休んでください。」

開封は、自分が残ろうと思っていたのだが、「疲れたから」と言われてはどうしようもない。

開封としては、大人の男が二人でプールで遊ぶというのは非常に考えにくかったが、野上を連れてその場を離れていった。そこにいられたら、彼女も逆に気を遣うだろうと思ったからだ。

洋介は、野上の彼女と二人で残ることになってしまった。

一番今の状況に驚いているのは洋介だった。ありえない状況だ。

周りからはどう見えるのだろうか。親子にしては年が近すぎる。姉弟に見えるのだろうか。そんなことを気にしてしまう。

しかし、これはまたとない機会である。これを機に聞いたかったことを聞いてみようか。そんなことが頭によぎった。

でも、聞いていいものだろうか。聞きたい。でも、聞いたらダメな気もする。そんな葛藤が洋介の中で起こり、洋介の頭は段々ぐるぐるしてきた。

いや、聞こう。

洋介は決心して、彼女の方を向いた。

「あの……」

「何？」

素敵な笑顔を返されてしまった。素敵過ぎて心臓がバクバクいっている。

「えと……ですね。」

「？」

キョトンとした顔も素敵である。どうしよう。

「聞きたい事があるのですが……」

「何？」

洋介は何だか恥ずかしくなって、彼女から顔を背けた。

「タツ兄の何処がいいんですか？」

心底、それが謎だった。あんな男の何処がいいのか。

「え……」

彼女はしばらく何も言わなかった。

ああ！困らせてしまった！やっぱり聞かないほうが良かったんだ！！

今更後悔しても遅い。洋介は罪悪感にさいなまれた。

しかも、もし、これがタツ兄に知れたら、自分はどうなるのだろうか。よく考えたら、これが一番怖いかもしれない。

「・・・やさしいから・・・かな？」

小さな声で彼女が言った。

「は？」

唐突な、しかも予想しなかった答えに洋介は間抜けな声を口から漏らした。

「表現の仕方が大雑把だったり乱暴だったりするけど、それって不器用なだけだと思うの。」

「はあ・・・」

彼女の顔は恥ずかしそうだったが、嬉しそうでもあった。

「不器用なあの人なりの精一杯の優しさが、なんか可愛くて・・・本当に周りの人を大切にしてくれてるんだなって。確かに悪いところもあるけど、それも、ちゃんと自分で気づいてるし。」

ああ、この人本当にタツ兄のこと好きなんだ。

洋介は彼女の表情を見てそう思った。やっぱり、タツ兄には勝てない。

「でも、俺には全然優しくないっすよ。」

「そう？そんなことないと思うけど。」

「だって、タツ兄俺のこと下僕かパシリだと思ってますよ。きっと。」

洋介がそういうと、彼女はクスクスと笑った。洋介には理由がわからなかった。

ふと顔を上げると、野上が何かを両手に持ってこっちに向かってきていた。

そして無造作に両手に持っていたカキ氷を突き出す。

「ほら、喰っとけ。」

「ありがとう。」

彼女は笑顔でそれを受け取る。

「へ？」

洋介が啞然としていた。

「なんだ、洋介。お前、俺様のカキ氷が食えないとでもいうのか？あ？」

いつものように威圧的な態度でカキ氷を突き出す。

「い、いえ！滅相ありません。ありがたく頂戴いたします！！」

そして洋介はいつものように、へこへこと下手に出て、それを受けとった。

「ね？」

彼女が洋介に笑顔を向ける。

「あ、はい。そうッスね。」

洋介も笑顔を返す。

「なんだ？」

野上が聞くと彼女は「なんでもないわよ。」といって野上にイチゴシロップのかかったカキ氷を一口あげた。

「なんか、気持ち悪いな・・・洋介、てめえ俺の彼女に手え出したら殺すぞ」

威嚇だけは忘れずに野上は去っていった。

洋介は、さわやかな気分で自分の好きなスカイブルーのカキ氷をほおばった。

カキ氷の冷たさが喉にしみた。

\* \* \* \*

午後三時ごろ、プールを出て、フィレーンと開封、野上とその彼女は帰っていった。

残った若干ポッキーじゃなくなった腕の四人は自転車置き場に移動した。

「タツ兄の彼女とちょっとしゃべっただけさあ……」

洋介がふと口を開く。

「本当にタツ兄のこと好きみたいだった……」

ぼんやりという洋介に三人はブツと噴き出した。

「あたりまえだろ！」

前島が笑いながら言った。

「今さら何言ってんだよ……。」

山本が笑いをこらえながら言う。

「へ？」

三人の反応に驚いて洋介は混乱していた。

「そーだよ。だって、10月に結婚するんでしょ？」

門田の言葉に洋介は一瞬固まった。

「何ーッ？！！！」

洋介の叫びが駐輪場に響いた。

本日のラストスパートとばかりに蝉の大合唱が洋介の声をかき消して、本格的な猛暑の始まりを告げていた。

～その日の夕方～

前に訪れたのはちょうど二年ほど前だっただろうか。

そのときは、酷く無機質で生活感の欠片もない部屋だったのを覚えている。部屋にあったのは、確かベッド、机、椅子、冷蔵庫、タンス。どれも整然とおかれていて、使っている雰囲気はなかった。冷蔵庫の中にはビールの缶が2本と1000mlの牛乳があった。

流しにあったのはガラスコップが一つ。

生ごみはおろか、カップめんの残骸もなかった。

別に、その部屋の住人が驚くほど几帳面なわけでも、潔癖症だったわけでもない。その証拠に、キッチンのコンロには埃が溜まっていたし、彼の職場のデスクの上は乱雑であった。引き出しの中も、彼に言わせればこの配置が一番使い勝手がいいらしいのだが、開封には信じられなかった。

彼の部屋は、風呂に入って、寝て、朝起きて着替えるためだけにあったらしかった。

「ずいぶん変わりましたねえ……」

部屋に入ったその場所で、二年前とは全く違う部屋の様子に開封は感心していた。

フィレーンとその学友達とプールに付き添ったその帰り、フィレーンを自宅に送った後に、開封は野上の部屋に来ていた。

「そうか？」

部屋の持ち主である野上は何てこともなさそうに言った。

「そうかって……だって前に来たときは、何もなかったじゃないですか。」

開封にしてはめずらしい口を半開きにしたアホ面を見て、野上は嘖き出した。

「いや、何もないってことはないだろ……ってか、お前その顔面白い。」

ぶあはは、と声に出して笑う。

「そんなに笑うことないでしょう！！」

今度は怒った開封を見て、それはそれで面白かったので野上は笑った。

「何笑ってるの？」

ひょこっと別の部屋から顔をだしたのは野上の婚約者、上村美咲だった。

「開封の顔が面白くてさあ」

「面白くありません！まったく……でも、上村さん。よくここまで変えられましたね。」

野上の発言を即座に否定して、開封は笑顔で上村に話しかけた。

「そうですか？……あ、でも始めて私がこの部屋に来たときのこと考えれば、確かに変わりましたね。」

上村が言ったのだが、野上は「そうかあ？」と言って自覚はないようだった。

今、この部屋は生活感のある整頓された空間になっている。洗濯機や食器、なべなど、さまざまなものが増えた。ベランダに洗濯物が干されている。

「変わったなんてもんじゃありませんよ。昔は本当に人が住んでるのか疑われるような場所だったんですから。」

開封が感心してもう一度部屋を見渡した。

「そうか？でも、キレイだっただろ。」

何もわかっていない野上に開封が呆れ顔を向けた。

「綺麗すぎて生活感がないって言ってるんです。」

「そうだったか？俺、よく覚えてないわ。」

そんな会話を交わす二人を見て、上村はクスクスと笑っていた。

野上に「座れよ」と言われて、開封はソファに座る。

目の前のテーブルには吸殻のない灰皿がおいてある。

野上は開封の隣に座った。

「煙草、まだやめられそうにありませんか？」

開封に言われて、野上は苦笑した。

「もうちょいかな……。式までには絶対やめる。」

『俺ほどタバコの似合う男はいない』とか豪語していたタツは何処に行ったんでしょうね。」

言って、開封がニヤリと笑った。

「うるせーよ」

野上は恥ずかしいのか顔を背け、口元に手を当てる。

開封が野上から聞いた話では、キスした後に「煙草のにおいがする」と、彼女に嫌な顔をされたいらしい。

それが相当ショックだったらしく、野上はそれ以来煙草をやめるために尽力を注いでいる。

「何の話？」

上村が二人分のお茶を持って後ろから話に入ってきた。

「ッ?!いや、別に……」

野上が焦っている姿に開封の顔が自然とほころぶ。

上村が首をかしげ、なんとなく釈然としないままにお茶を開封と野上の前に置く。

「ゆっくりして行って下さいね、この人なんだか最近落ち着きがないですけど。」

「そんなことねえよ。」

お茶を置くと、上村は開封にそう言い、それを野上が即座に否定した。

「そうですか。じゃあ、私はいない方がいいみたいだから買い物に行ってきますね。」

上村は野上に静かに微笑んで一度台所に戻ると、それから玄関に向かった。

野上と開封は玄関に行くまで、そっと上村を眺めていた。

玄関から出て行く前に上村は一度振り返り野上に声をかける。

「あ、開封さんに失礼のないようにね！」

「俺はガキか!!」

言った上村に言い返して、野上は舌打ちをした。

「つくそ。」

開封が口元を隠して笑いをこらえていた。それを見て野上が開封を睨みつける。

「……. . . . . そんなにおかしいか？おい。」

「いや、だって……恋人同士というよりは、その……」

野上がじっと見ているのが、またおかしかったらしく、開封はついに嘔き出してしまった。

「何がおかしいのか言えよ！それ、すげムカツクぞ!!!」

「すみまっ……せん……いえ、笑うつもりはなかったんですが……なんていうか、二人が……」

そして再び笑い出す。

野上は立ち上がって、笑い続ける開封の襟首をつかんだ。

「な・に・が・お・か・し・い・ん・だ？」

野上が殴ったりしないことを知っている開封は特におびえるでもなく言葉の続きを吐き出した。

「なんとなく母子のようだなあと……」

「誰が子どもだ！！」

耳元で大声を出されて、開封は耳をふさいだ。

「いやぁ・・・それよりも、気付いてるんじゃないですか？上村さん。」

開封の言葉に、野上の手が緩んだ。

「・・・かなぁ？俺もなんとなくそんな気はするんだけど。」

「タツは隠し事が下手ですから。いっそ話してしまったほうがいいんじゃないですか？」

野上は開封から手を離し、ソファに座りなおした。

開封も襟を整えてから野上の隣に座る。

「とは言ってもなぁ・・・誕生日何が欲しいとか聞くわけにもいかないし。」

考え込んだ野上は見ずに開封は天井に向かってため息をついた。

「聞いたらいいと思いますよ。今更、なんだっていいと思いますけど。」

「今だから、大事なんだろう！」

がぱっと、開封に向けた野上の顔を真剣そのものだった。

「で、来年もまた『今だから大事』って言うんでしょう？」

開封が呆れ顔で放った言葉に、野上は一瞬動きを止めた。

「毎年そう言って私に相談するつもりですか？」

「いや・・・だって、他に相談する人がいないから・・・」

小さくなっていく野上に開封は頭を抱えたい気分だった。

「いい加減、自分で考えて選んだ物に自信を持ってくださいよ。」

「こういうこと意外なら結構自信あるんだけどなぁ・・・」

ブツブツ言っている野上を見てから、開封は天井を見上げた。

特に意味はないが、何かを思い出すときはついこうしてしまう。

去年、一昨年は何をプレゼントしたのだったか思い出し、なんともベタな贈り物をしたものだと思う。

とはいえ、開封には彼女がいたことなどない。贈り物もしたことはない。

野上は彼女はいたが、それまで付き合ったことのある女性は欲しいものを誕生日の前に言う人だったらしい。

上村にしてみれば、野上からのプレゼントなら何でもうれしに違いなかった。

この不器用な男が懸命に考えて、不器用なりに照れ隠しなどしながら渡すのだから、それ自体が面白いといえれば面白い。

上村はそれで十分喜んでいて、それは開封にも見て取れた。

それにしても、野上はいつまでプレゼントすることを恥ずかしがっているつもりなのだろうか。

開封は、お茶を一口飲んで上村のことを考えた。

野上の話では、ほとんど毎日とっていいほど野上のマンションで家事をしているらしい。

仕事もあるのに、よくもまあこんな男の世話をする気力があるものだと開封は感心していた。

考えてみれば、開封も数年前似たようなことをしていたが、世話をする相手は小学生（フィレンだ）だったのでなんとなく諦めもついた。

「・・・料理でもしてあげたらどうですか？」

開封はなんとなくそんなことを言ってみた。

いつも家事の手伝いをしない子どもが、母の日にしそうだ。などと勝手に思いながら野上の方を見る。

野上はキョトンとしていた。

「俺が？」

「あなた以外の誰がやるんですか。」

若干投げやりな口調の開封に、野上は自分の右手人差し指を突きつけた。

「・・。帰っていいですか？」

しばしの沈黙のあとの開封の質問に、野上はフルフルと首を横に振った。

「でも俺、調理実習以来料理なんてしてない。」

「レシピを見れば大体できますよ。」

「包丁ですら何年も触ってないし。」

「別に高度な技術は要求しません。」

「ccとかmlとかもう、全然わからんし。」

「1ccが1mlです。1000mlが1リットル。すぐに覚えられます。」

「いや、その・・・」

野上は、開封の視線が冷たくなっていくのをヒシヒシと肌で感じていた。

「好きな人のために、ちょっと頑張ってみようとか思わないんですか？」

「俺、頑張るとか努力するとか、そういう類のことはちょっと・・・・・・・・」

開封が立ち上がった。

「もういいです。勝手にしてください。私は帰りますから、どうぞ自由に独りで考えてください。」

野上が慌てて開封の腕をつかむが、開封の歩みは止まらない。

「お、おい！ちょっと待てよ！！」

「知りません。どーでもいいですよ、『野上さん』の好きにしたらいいでしょう。あー上村さんが可哀想ですわー！」

「いや、ちょっ・・・わかったよ！頑張るよ、努力しますって！だからその・・・」

開封が歩くのをやめ、野上の方を向いた。

「だから・・・なんですか？」

野上が、気まずそうに開封の顔をうかがう。

「・・・・・・・・手伝って・・・・・・・・ください」

開封はいつになく弱気な野上を眺めてから答えた。

「・・・・・・・・わかりました。」

一方、上村はというと、野上と開封のことを気にしながらも、近所のスーパーで明日の朝食のメニューを考えていた。

（また、私の誕生日のプレゼントで悩んでるんだろうなあ、別になくてもいいんだけど。・・・ま、いいか）  
卵とベーコンが安かったので、上村は次の日の朝食はベーコンエッグにすることに決めたのだった。

夏休みも半ばを過ぎた陽南中学の校門前に、黒塗りの高級外車が停まった。さほど広くないその道に異様なほどの存在感を放っている。

昔は開け放たれていた校門だが、ここ数年の時代の変化に伴い生徒達の登下校時間以外は閉ざされている。今は夏休みのため、部活の練習で出入りする生徒はいるものの、やはり門は閉鎖されている。

そこかしこで鳴くクマゼミの声は昔と変わらず、夏の蒸し暑い空気を満たしていた。

車の運転席から、この蒸し暑さには似合わない黒いスーツ姿の男が降りてきた。ネクタイも靴も黒だが、白い手袋をはめている。ドアの開閉音以外の音を立てずにアスファルトに着地すると、革靴であるにも関わらず足音もなく後部座席のドアの前に移動する。そして、車内にいる主に一礼すると、ゆっくりとそのドアを開けた。

「ありがとう」

声に続いて、黒いレースの日傘が開いた。男が差し出した手にほっそりとした手を軽く乗せ、一人の少女が降り注ぐ日差し中に現れる。クマゼミの声が一瞬止んだ。

夏の青空のような眩しい空色のワンピースは、風通しの良い軽い素材でできており、スカートの裾を彩るフリルは南の美しい海のきらめきを思わせる軽やかさと上品さを兼ね備えている。

男がドアを閉めると、セミは再び鳴き始めた。

少女は校門を見たときに、長い睫毛に縁取られた瞳から一粒の涙をはらりと流した。

「お劳しや・・・このようなひなびた廃屋が学校だなどとは・・・」

黒スーツの男が白いシルクのハンカチを少女に差し出す。少女はそれを受け取ると静かに涙を拭いて男に返した。

「坂御原。本当にこのような場所にあのお方が？」

「はい。お嬢様。4月より、この陽南中学にご通学されている事、及び、本日こちらにいらっしゃる事は調べがついております。」

黒スーツの男、坂御原（さかみはら）は手帳を開き、少女の問いに答える。

少女は「ふう」と息をついて、もう一度門を見つめる。あの人が姿を消してから、この数ヶ月間、ひとときもあの人の事を忘れた事はなかった。何度、枕を涙で濡らしたことか。

方々手を尽くして情報を集めさせ、ようやくここまでたどり着いたのだ。

「ようやく・・・お会いできるのですね。」

独り言を声に出してしまうほど、待ちこがれていた瞬間が近づいている。

と、ジャージ姿の若い男が門の中から声をかけてきた。おそらく教師だろう。

「すいませーん。そこ、駐車禁止なんで、本校に御用でしたら、ぐるっと裏に回ると駐車場あるんで、そちらに停めていただけますー？」

少女は静かに目を閉じた。そして、坂御原に目で合図を送る。

「坂御原、対処しなさい。」

「御意」

\* \* \* \* \*

同時刻、陽南中学の運動場の端っこ。ここが弓道部の活動場所である。

「暑い」

「だるい」

「しんどい」

半袖、ハーフパンツの体操着姿で洋介、前島、山本がそれぞれ己の今の心境をぶちまける。他の部員もほとんどが三人と同様の表情でぐったりしていた。門田だけが一人熱心に基本動作の練習をしている。

「足踏み、胴造り、弓構え、・・・えーと、次なんだっけ？」

「打起こし」

門田はいつも4つ目の動作が出てこない。いつものように洋介が助け舟を出し、「そうそう」と門田は基本動作を続ける。

「なんで今年は、こんなに張り切ってる訳？」

前島がいい加減嫌になって地面に腰を下ろした。

「部長のきまぐれ。しかし、当の部長が本日欠席とはこれいかに。」

山本も地面に腰を下ろし、前島の問いに答える。

「前島！山本！勝手に休憩しない！」

やや離れた場所から副部長に注意され、渋々前島は立ち上がった。

「前島、俺はもう無理だ。」

山本はそう言って地面に寝転ぶ。前島が「えー」と不平を漏らすと、副部長が駆け寄ってきた。

「どうした山本」

「副部長、俺はもうダメです。俺に構わず先に行ってください。」

前島と洋介は山本の臭い芝居をうんざりした顔で見下ろしていた。

副部長は少し思案してから、山本の肩をつかみ激しくゆさぶった。

「しっかりしろ山本！お前を置いてなんて、そんなことできる訳ないだろー」

前島と洋介、そして門田も練習の手を止めて副部長のワザとらしい演技にぎよっとする。棒読みもいいところである。

副部長は立ち上がり、全員に告げた。

「よし、皆休憩！！」

副部長も思いは同じだったらしい。全員がほっとして、それぞれの水筒やタオルをとりにいく。

山本もさっと立ち上がり自分のペットボトルを取りに向う。歩きながら、横にいた副部長に小声で話しかけた。

「で、部長は今日はなんで休みなんですか？」

副部長はしばし考えた様子だったが、すんなりと答えた。

「本当は口止めされてるけど、デートだよ。」

傍でお茶を飲みかけていた前島が嘔き出した。

「えええええ？！帰る！俺はもう帰る！！皆で帰っちゃいましょうよっ！！」

「激しく同意する。」

叫んだ前島に山本も加勢する。

「でもなー顧問がなー」

副部長も本音では帰ってしまいたいのだろうが、立場上、困った顔をしてみせた。

「どうせ職員室で暇してるだけなんですから、むしろ喜ぶんじゃないですか？」

洋介も加勢した。最初だけ顔を出した顧問は「あと僕がいなくてもいいよね。よろしくー」とヘラヘラした顔で副部長に任せて冷房のきいた職員室に帰っていったのだ。洋介の読みはおそらく正しいだろう。そもそも、部長が夏休みの練習を言い出したときも、あまり乗り気ではないのが見え見えだった。

「あーそんな気はする。」

ぐったりとした様子で副部長は苦笑した。

「僕も早く帰りたいです。暑いし。」

ズズズズと紙パックのジュースを飲み干したフィレーンも会話に参加する。フィレーンだけは、制服の夏服だった。この暑いのに何故か涼しげな顔である。

「お前は関係なく帰ればいいだろう。」

洋介がじっとりとしたまなざしでフィレーンを睨みつけた。

「うん、栄地君は部員じゃないんだし、帰りたくなったら帰ればいいと思うよ。ていうか、なんで登校してきたの？」

副部長が至極真っ当な質問をする。

「暇だったんで、洋介が学校に行くって言うから何か面白い事でもあるかと思って来てみました。」

「あー残念だったね。部活見ても面白くないよね。」

「そうですね。そもそも大会も終わった所なのになんの練習ですか？」

フィレーンの身も蓋もない質問に、優しく接していた副部長の表情が固まった。そして、長い息を吐く。

「俺、顧問にもう帰るって言うてくるわー」

副部長は力なくそう言うと、ふらふらと職員室へと歩いていった。

職員室へ向かう副部長を見送ってから、残った部員は全員諸手を上げて喜んだ。

「グッジョブ！」

前島、山本に加えて、洋介もフィレーンに賛美を送る。

「よし、帰る準備しようぜ！」

さっきまで気力を失っていたはずの部員達も「明日以降もなくなりゃいいのにな」等と話しながら、嬉々として帰り支度を始めた。洋介達も口々に部長に対する文句を言いながら帰り支度を始める。

「なんだあれ？」

部員の一人が運動場の反対側の端、校舎側の正門の方向を見たまま手を止めた。異変に気付いた他の部員達も、その部員の見ている方を見る。

「ん？」

洋介達も同じようにその方向を向いた。

「おい、あれ・・・」

前島が呆然とした様子で何か言おうとしたが、言葉が続かない。何をどう表現すべきなのか、何からどう言うべきなのかが見当がつかないらしい。

全員の視線の先には、見慣れぬ男女がいた。どうやら、こちらへ向かっているらしい。

男は黒スーツ、黒ネクタイ、黒靴と暑苦しい格好な上に、白い手袋をしている。そして、女のために黒レースの日傘を差している。

一方、女は部員達とそう変わらない年齢と思われる少女で、空色のワンピース姿である。手足は白くほっそりとしていて、いかにもお嬢様らしい姿である。しゃなりしゃなりという表現がしっくりくる歩き方でこちらに歩みを進めている。

山本がようやく言葉を見つけた。

「縦ロールだ。紛うことなき縦ロールだ。」

少女の髪は色こそ茶色くはあるが、中世ヨーロッパの貴婦人を連想させるような縦巻きだった。その姿に全員がざわつき始める。洋介は、その少女の姿から何かフィレーンに通ずるものを感じ、フィレーンの方を向いた。

フィレーンは酷い顔をしていた。血の気が引いて、ただでさえ色白の顔が蒼白になっている。さらに、い

つもの強気な表情からは想像もできない絶望にも似た表情で愕然としている。持っていた紙パックも手から落ち、紙パックらしいポスツという間抜けな音がした。

「霞ヶ浦・・・雫・・・」

フィレーンのその声が聞こえたのかどうかは定かではない。が、少女はそれと同時に部員達の中に金髪の少年を発見したらしかった。少女の表情はパツと明るくなり、坂御原の持つ日傘を取り上げると目標に向かって走り出した。

華奢な四肢からは想像できないほどの力強さで、陸上部顔負けのスピードで部員達の間を駆け抜け、フィレーンの目前に迫る。

フィレーンはハツとして瞳に意思を取り戻すと、半身をそらして横に跳躍した。

フィレーンが一瞬前までいた場所を日傘の尖った先端が貫く。少女は先端をくるーりと回転させ、日傘を差し直すとフィレーンに清々しいほどの笑顔を向けた。その仕草は、育ちの良い洗練されたものに戻っている。

「お会いしとうございましたわ。フィレーン様。」

「殺す気かっ！！」

フィレーンはそう叫びながら、後方へ跳んだ。

「まさかそんな。フィレーン様ならば、華麗にかわされれると思えばこそですわ。」

少女、霞ヶ浦雫（かすみがうらしづく）は何故か頬を赤らめて照れた様子でそう言った。

その場にいた全員が固唾を飲んで、フィレーンと雫の様子を伺っていた。

「だからって、傘の先端で突く必要ないだろ！」

「あなた様と再び出会える日を待ちわびて、この日のために一生懸命研いでおりましたので、つい。」

もう一度吠えたフィレーンに対して、雫は至って穏やかな様子で応えた。

「雫お嬢様は、栄地様がお姿を消されてからというもの、毎夜あの日傘の先端を研いでは、栄地様のお名前を記した人形（ひとがた）に突き刺し、またお会いできるようにと祈っておられました。」

背後から男の聲がして、フィレーンは振り返った。そこには坂御原が涙を拭く仕草をして立っていた。仕草はしているが涙は一切流れていない。

「それ完全に呪いの手順だろ！」

フィレーンが叫ぶが、雫も坂御原も特に気にした様子はなく雫が話を続ける。

「婚約者である私に黙ってお姿を消されたからには、何か深い訳があっての事とは存じております。探さない事が愛なのかとも考え悩みました。しかし、それでも私のフィレーン様への想いは募るばかり・・・運命の相手であればいずれは会えるはず。私は信じて祈り続けました。そして、その甲斐あって、ついにお会いできたのです。やはり、私たちは運命の赤い糸で結ばれているのですね！さあ今日こそ、この愛の血判状に捺印を！」

巻き込まれると危険だと察知した部員は、副部長の帰りを待たずにこっそりと帰宅を始めていた。洋介達もそれに習って、静かにその場を離れ始めたところだった。

「婚約者？」

洋介は中学生が遣うとは思えない単語に疑問符を浮かべると同時に、うっかり声に出してしまった。前島と山本に「バカっ」と小声で言われて、洋介もハツとする。

洋介達が逃げようとしていることに気付いたフィレーンが、洋介の所に駆け寄り、その腕をつかんだ。

「え？」

困惑している洋介をよそにフィレーンは雫に反論する。

「婚約してない。転校したのはお前を避けるためだし、金に物言わせて集めた情報網で突き止めるのは運命

とは言わない。あと、誰に教わったか知らないけど、それは祈りじゃなくて呪いだし、なんで血判状が出てくるのか意味不明だぞ。」

「私が助言いたしました。」

最後の反論にだけ坂御原が返答する。雫は顔を赤らめて、もじもじし始めた。

「そんな・・・『お前』だなんて・・・まだ、結婚もしていませんのに」

「なんでそこだけ都合いいように拾うんだよ！おかしいだろ、前後の文脈から意図を汲み取れ！」

フィレーンが必死に言うが、雫は一切気にした様子はなかった。

フィレーンに腕をつかまれた洋介は身動きがとれないため、前島、山本、門田は声は出さずに洋介に別れを告げると、こそこそと運動場から出て行った。

「おいフィレーン、放せよ！俺関係ないし、もう帰るから！」

「うるさい、お前も道連れだ。」

騒ぐ洋介をつかむ握力はゆるめずに、フィレーンは雫と対峙していた。次の一撃を警戒しているのだ。

「嫌だ！お前の婚約者なんだろ？！お前でなんとかしろよ！」

フィレーンの切迫した様子など、あまり見た事がない。洋介としては、外野で見られる分には楽しいだろうと思ったが、巻き込まれてはたまったものではない。

「何度も言わすな、婚約者じゃない。くそ、この開封がないときに・・・」

フィレーンが返した言葉に、洋介の頭にふとした疑問とわずかな希望が浮かんだ。

「開封さんなら、なんとか出来るのか？」

「いや、盾ぐらいにはなるだろうと思っただけだ。」

「酷っ！！」

希望が瞬時に打ち砕かれると同時に、洋介は自分の腕をつかまれている理由に気付いた。

「それってまさか・・・俺も？」

洋介がおそろおそろ聞いたが、フィレーンは応えなかった。雫から目を離さずに様子を伺っている。

雫がふと何かを思い出し、坂御原の方を向く。

「坂御原、例のものは？」

坂御原は、すみやかに雫のやや後ろに回り込み、どこからか小箱を取り出した。

「こちらにございます。」

小箱は可愛らしいラッピングがされており、リボンもついている。坂御原は日傘を受け取ると、小箱を雫に差し出した。

雫は受け取った小箱を両手で胸のまえに持ち、フィレーンに熱いまなざしを向けた。

「フィレーン様。私、フィレーン様のためにクッキーを一生懸命作りましたの。どうか、お召し上がりください。」

「いらん！」

フィレーンは即座にきっぱりと断った。

「ふふ、フィレーン様ったら、そんなに恥ずかしがらなくても・・・」

「違う！」

フィレーンが否定するが、雫はやはり気にした様子はなかった。小箱を自分であけるとクッキーを手にとり、フィレーンの方に走り出した。

「はい、あーん！」

フィレーンは後方に下がりながら、つかんでいた洋介の腕を引っぱり、自分と雫の間に引き込んだ。そして、反対の手を、洋介の口にひっかけ、むりやり口を開かせる。

「はがっ?!」

洋介が何が起きているか理解する間もなく、雫の手が洋介の口に向かう。雫が慌てて減速したが、クッキーだけは洋介の口の中に入ってしまった。洋介はようやく何が起こったのか理解し、クッキーを口から出そうとしたが、フィレーンにそれを阻まれる。洋介は死を覚悟した。

「そ、そんな・・・」

雫が始めてショックを受けた顔を見せた。

洋介は、どんな恐ろしい味がするのかと思ったが、雫のクッキーは香ばしく甘い香りを漂わせ、固すぎず柔らかすぎず、要はおいしかった。洋介は、クッキーを飲み込むと、フィレーンに向き直った。

「すごいうまいよ。これ。」

「そうか、それは良かった。」

フィレーンは喜ぶでも悔しがるでもなく、淡々とそう言った。

「邪魔して申し訳ないですけど、すごくおいしかったです。」

洋介は雫にも同じようにそう伝えた。

ショックを受けていたはずの雫は洋介をキョトンと見ていた。

「あなたは？」

雫に問われ、洋介は「ああ」と自己紹介をした。

「河崎洋介です。中学2年です。」

「生徒会役員もやってます。彼女はいません。」

洋介の自己紹介に続けて、フィレーンが情報を追加する。洋介が最後の説明はいらないうとムツとして、フィレーンに文句を言おうとしたそのときだった。

「河崎・・・洋介様」

自分の名前に思いも寄らぬ敬称がついている違和感から、洋介は声のした方を振り向いた。

霞ヶ浦雫が夢見心地な表情で洋介を見つめていた。

フィレーンがポンと洋介の肩に手を置いた。

「御愁傷様」

「え？」

いまいち状況を理解しきれずにいる洋介に、フィレーンは教えてやった。

「今のでターゲットがお前に変わったから。」

「え？」

洋介の血の気がだんだんと引いていく。

「洋介様・・・私、霞ヶ浦雫は、あなた様の熱いプロポーズをお受け致しますわ！」

\* \* \* \* \*

職員室で顧問と部長への愚痴で盛り上がってしまった副部長は、運動場に戻ってくるとクッキーを口にねじ込まれ倒れている洋介の肩をぼんぼんとたたいた。

運動場には、洋介と副部長だけだ。

「大丈夫か？何があったか知らんけど、皆先に帰ったみたいだし、俺も帰るな。」

「あ、はい」

ようやく意識を取り戻した洋介は、ぼんやりとした頭でそう応えた。空は夕焼けで赤く染まっていた。カラスが3、4羽山に向かって飛んでいく。きっと巣に帰るのだろう。

少しして、正門の方から「山田先生！大丈夫ですか?!」という副部長の声が聞こえてきた。

洋介はなんとなく、英語の山田先生も奴らの被害に会っていたのだな、と思った。

昨日までは漠然とモテたいと思ったりしていた洋介だったが、今日を境に好きな人にだけ愛されれば十分だと考えを改めたのだった。

～霞ヶ浦雲について～

「フィレーンさん。ちょいとお伺いしてもよろしいですか？」

洋介はげんなりした顔で向かいに座るフィレーンに問いかけた。

「なんだよ改まって、気持ち悪いな。」

フィレーンは焼きたてのホットケーキにバターを乗せたところだった。フィレーンの後ろでは、開封がホットケーキを焼いている。土曜日なので会社は休みらしい。

洋介がフィレーンにちょっと直接聞きたい事があるということで携帯にメールを送ってきたので、開封の家にいたフィレーンが「開封の家に来いよ。ホットケーキ焼いてるから。」と返信した結果が今の状況である。霞ヶ浦雲の出現からは1週間ほど経過していた。

「あれから毎日部活の練習見に来るんだけど、あのお嬢様は一体なんなの？」

「霞ヶ浦グループ会長の孫娘。年の離れた兄が二人いるんだっただけかな。」

フィレーンは即答したが、洋介はため息をついた。

「いや、なんかそういう感じなのはだいたい想像つくいてたけど・・・なんとかならない訳？すごく迷惑なんですけど。」

「ならない。だから僕は転校した。夏休み終われば向こうも学校あるから、ある程度静かになると思うよ。」

フィレーンは絶望的な答えのあとに僅かばかりの希望を添えてあげたつもりだったが、洋介は机に突っ伏してしまった。

「あ。転校したのは本当にそれが理由だったんですか。」

焼けたホットケーキをフライパンから皿に移しながら開封が会話に入ってくる。

「うん。」

フィレーンは頷くと、メープルシロップをかけたホットケーキを口に運んだ。

「洋介さんもどうぞ。」

開封がホットケーキを洋介の前に置いたが、洋介はそんな気分ではなかった。

「クッキーおいしいって言ったらプロポーズ扱いってどういうことなの・・・」

洋介は誰にともなく、泣きそうな声でそうつぶやいた。

「大丈夫だ。僕なんか消しゴム貸しただけで求婚したことになる。」

「フィレーンさん。大丈夫の使い方おかしいですよ・・・」

開封が力なく笑う。

「学校同じだったから、かなり悲惨だったぞ。何をしてもついてくるし、学校中の人間から完全に勘違いされるし、何よりあの坂御原とかいう奴が変な事吹き込むから怖いんだよなー。」

フィレーンは今や完全に他人事である。

「そういえば、この部屋にチェーンソーで鍵壊して入ろうとしたときもありましたねー」

開封は開封で苦笑しながらとんでもない思い出話をする。

「それ、どうなったんですか？」

あまりにも酷すぎる話に、思わず洋介も顔を上げて話に入ってきた。

「由紀さんが関西弁でビシッと厳しく言ったら帰っていきました。」

開封の言葉に、洋介の顔が明るくなった。

「それ！今回もそれで行こう！」

「あー無理無理。未だに、この辺り含めて由紀には近づかないようにしてるみたいだし。」

洋介の希望をフィレーンが軽い調子で即座に打ち砕く。

「うぐう・・・でも、少なくともこの辺りは安全地帯ってことだろ？」

洋介が食い下がる。

「まあ、そう言われればそうかな。」

フィレーンは洋介の話には興味がない様子で、適当な相槌をうってホットケーキを口に運ぶ。市販のホットケーキの素を使用しているので味は可もなく不可もなくといった所ではあるが、ふんわりとした焼き上がりと適度な香ばしさは開封の料理の腕前を物語っている。

「とはいっても、ずっとここにいるワケにもいかないだろ。今回の件で逃げるのは難しそうなのがあったから、ターゲットを替えるように仕向けるしかないと思うよ。」

フィレーンの言うことは最もである。それは、洋介にも分かっていた。

「仕向けるって言っても・・・また、新たな犠牲者が出るって事だろ？」

「じゃあ受け入れてみたら？」

「無理！」

洋介は、わずかばかりの良心をかなぐり捨てた。フィレーンは、洋介をしばらく眺めてから、またホットケーキを食べ始めた。その態度に、洋介は身を乗り出す。

「なんでそんなに他人事みたいに冷たいんだよ！」

フィレーンは手を止めて洋介を見る。

「だって他人事だろ。恋愛なんて当人同士の問題だから周りがとやかく言う事じゃないし。」

「うっわ・・・何その大人な言いぶり。ってか、恋愛じゃないし、ストーカー被害だよこんなの！」

「じゃあ、警察に相談しろよ。」

「こんなの警察が取り合ってくれる訳ないだろ！」

「うるさいなー」

「開封さーん！」

洋介は、面倒になって不機嫌な顔をしたフィレーンに頼るのを諦めて、今度は開封にすぎる。

「いやあ・・・私に言われても・・・。恋愛経験ほとんどありませんから、何のお役にも立てませんよ。」

開封は困ったように笑ってから、ふとあることを思いついた。

「タツに聞いてみたらどうですか？」

開封の提案に洋介は、暫し思案した様子だったが「そうですね」と言って携帯電話でメールを作成にかかった。フィレーンは、再びホットケーキを食べ始める。開封はひととおり焼き終えたらしく、後片付けを始めた。

メールを送ると、ものの一分ほどで返事があった。件名はつけずに送ったので返信を示す「Re:」の文字のみが表示されていた。

洋介が本文を表示すると、そこには一言だけ書かれていた。

『知るかボケ。』

洋介は、三度読み返し、それから画面の下に何かまだメッセージがあるのではないかとボタンを何度も押してみた。それもないと分かったと、次のメールがあるかもしれないと、一分ほど待ってみる。

携帯は何の音も発しないし、ぴくりともしなかった。

ああ、タツ兄ってそういう人だったよな。と今更ながら思い出す。

洋介はその場に崩れ落ち、そのまま泣きたい気持ちになったのだった。

夏休みも半ばに差し掛かった頃だった。

フィレーンはいつものように開封の家に遊びに来ていた。開封の仕事が終わるところを見計らって訪れ、夕飯をご馳走になって帰るのがいつものパターンだ。

ガチャン

フィレーンが来ることを知っているため、いつもは鍵が開いたままになっているのだが、今日は何故か鍵がかかっていた。フィレーンは不思議に思いながら開封から渡されている合鍵を使い、部屋に入った。

「開封ー？」

声をかけるが返事がない。室内は驚くほど静まり返っていて暗かった。単純に蛍光灯がついていないというのものもあるが、まだ外は明るい今の時間にこの暗さはおかしい。

玄関の電気をつけて奥に入り、リビングに入って見てやっとな暗さの理由がわかった。カーテンが閉め切られている。

「夜逃げでもしたのかな？」

とんでもない冗談を一人つぶやいてから、フィレーンはダイニングへ向かった。歩きながら、カーテンが閉まっていることぐらい特段おかしなことでもないなと思いつく。外出時にはカーテンくらいするだろう。開封がいることに慣れてしまったから違和感を感じただけだ。

ダイニングの電気もつけ、食卓の上に置かれた書置きに気づく。

なんてことのないメモ用紙に、ボールペンで几帳面な字が書かれている。フィレーンはそれを手に取り、首をかしげた。

「なんだこれ？」

書置きの内容はだいたいこんな感じだった。

まず第一に、開封はちょっと長い旅行に行っているということ。第二に、何か食べたかったら、冷凍庫の中に冷凍食品があるから適当に食べても良いということ。冷蔵庫にはプリンも入っているらしいが、それはどうでもいいことだった。

開封が旅行に行く。そんなことは、フィレーンが知る限り社員旅行以外にはなかった。

フィレーンと開封が関わり始めた5年前、フィレーンが小学4年生の頃から、開封は一度だって旅行らしい旅行をしたことはなかった。別に行ってはいけなわけでもないのだが、フィレーンにとっては、開封が旅行に行ったことが驚きであり、ショックでもあった。

書置きを何度も読み返すが、さっきと同じ情報しか得られなかった。何処に行ったのかも、いつ帰ってくるのかも書かれていない。

フィレーンはそのままで考えて、そんなこと自分にわざわざ報告する必要はないのだということに気づいた。(……何か……気になる。)

開封が何も言わずに、これだけの書置きしか残さずに旅行に行ったというのが、酷く不可解だった。

フィレーンは、とりあえず自分の携帯を取り出し、開封の携帯電話にかけてみる。しばしの呼び出し音のあと、流れてきたのは淡々とした音声案内の女性の声だった。電源が入っていないか、電波の届かないところにいるらしい。

使えない。

こうなってしまうと、どうしても知りたくなるのが人間というものだ。

今度は野上に電話をかけてみる。フィレーンの携帯電話は、7、8回呼び出し音を繰り返した後、気だるい声

を吐き出した。

「……………何？」

挨拶も愛想もない。野上の声からは「本当は出たくなかった」という気持ちがにじみ出ていた。いつものことなので、フィレーンはそんなことは気にしない。

「あ、野上。僕だけど……………開封何処行ったか知らない？」

「……………」

受話器は押し黙ったまま、野上の声の代わりに野上の心情を流し出す。しばらくしてから、ようやく野上の声がした。

「……………そりゃ、知ってるけど。」

「何処に行ったの？」

「聞いてどうするんだよ？」

聞き返されて、フィレーンの思考は一旦停止した。

そうだ。そういえば、聞いてどうするのだろうか。そのことは考えていなかった。

「追いかける。」

思考とは関係なく、口は勝手に動いていた。

「は？」

間の抜けた声で野上が聞き返した。

「追いかける。」

「追いかけてどうすんだよ？」

「いや……………なんとなく言ってみただけ。」

「……………お前。頭大丈夫か？」

野上にしては珍しく心底心配したような声だった。

「誰？」と電話の奥の方から女性の声がした。野上の彼女……………もとい婚約者だ。

「ん？ああ、フィレーンだよ。」

フィレーンに聴こえることなど、まったく気にせずに野上が応える。

「大丈夫だと思うよ。」

「ん？」

「頭。」

「……………」

また沈黙だ。それから深いため息。

そして、次の一言にフィレーンは自分の耳を疑った。

「中国」

「へ？」

「開封が行ったの。中国だよ。」

「中国地方じゃなくて……………？」

「中国。中華人民共和国。チャイナ。」

これでもかというほどに、野上がゆっくりと言う。

「……………」

「中国のどこかまでは知らないけど、多分実家だろ？悪いけどこれ以上は本当に知らないからな。」

「……………そっか、ありがと。じゃあね。」

フィレーンは短くそう言うと、野上の反応も待たずに電話を切った。

「・・・中国か・・・」

一人蛍光灯の明かりの中でつぶやいてから、フィレーンは冷蔵庫を開けてプリンを取り出した。引き出しからスプーンを取り出し、プリンを黙々と食べる。そして、スプーンとプリンが入っていたプラスチックカップを洗い、水気をとってからスプーンを元の位置に戻す。プリンのカップはどうしようかと思ったのだが、とりあえずその辺のコンビニのゴミ箱に捨てることにした。

いつ帰ってくるかわからない開封の家の台所においておくのは、虫が湧きそうで怖い。

フィレーンは電気を消して、玄関へ向かう。玄関の電気を消して、ドアを閉め、鍵をかける。

そして、家に帰って、中国に行く準備をすることにした。

現金とカードとパスポート。そして、多少の着替えを用意してフィレーンは家を出た。

こんなに何も考えずに動いたのは家出したとき以来だ。

いや、家出したときの方がまだ計画性があった。その家出のときに会社の社員データから得た開封のデータにも実家の住所は書いていなかった。

あの広大な中国のどの地方かすらわからない。開封に追いつけるわけがない。会えたら、それこそ奇跡だ。会える可能性は限りなくゼロに等しい。

(なんなら観光だけして帰ったっていいか)

フィレーンはそんな気持ちでいた。

電車に乗り、国際空港へ向かう。流れゆく景色は母に会いに行くときのいつもの風景と変わらない。

開封は何をしに帰ったのだろうか。ふと、それが気になった。何年も帰っていなかった開封が、急に帰ろうと思った理由とは何なんだろう。

いや、違う。

フィレーンは気づいた。

今まで帰らなかった理由はなんだ？

普通、実家には年に一度くらい帰るものだろう。結婚して家庭があるならともかく、一人身の開封が盆にも正月にも家に帰らなかった理由はなんだ？盆が中国にあるかどうかは知らないが、正月があるのは間違いない。

何故帰らなかったのか。帰れなかったのだろうか。有給休暇もたまっているのに？一人暮らしで無駄遣いもしない開封には貯金だって結構ある。経済的、物理的な理由は思いつかない。

となると、精神的な問題だろうか。だが、親と喧嘩なんて、開封の性格的に考えにくい。

フィレーンには開封が家に帰れなかった理由は思いつかなかった。

どれもじっくりこない。

そして、じっくりこないまま、フィレーンは飛行機に乗った。

(会って聞く以外ないか・・・)

結局、結論はそこに行き着き、フィレーンは中国に行ってからどうするかを考え始めた。

会える可能性があるのは交通の要所だろう。開封が家を出たのは、おそらく今朝か、今日の昼だ。

帰りにくい理由があるのなら、まっすぐ家に帰っていない可能性もある。どこかの駅で待っていれば会えるかもしれない。

(向こうに着くの、夜か・・・)

出る前に、家に住み込みで働いているお手伝いさんが気づいてくれてよかった。空港の近くの父親の会社の施設に何とか泊まることができたのだ。たぶん、彼女が気づいてくれなかったら、今晩は路頭に迷うことになっていただろう。

家を出るときに見せた、彼女の少し寂しそうな顔を思い出す。

いってらっしゃいませ。と言った彼女の表情は家出したときと同じだった。

フィレーンのする、我侭やとんでもないことに、彼女は反対しなかった。そういう指示をされているのか、彼女自身の考えがあってそうしているのかは知らない。だが、いつも助けられているのには違いなかった。彼女の顔を思い出すと、なんだか家に帰らないといけない気がしてくる。別に帰って来た時笑顔で迎えてくれるわけでもないのだが・・・。

彼女の姿が小さくなり、自分の家も小さくなっていく。

上から眺めているようなそんな情景が目の前に広がり、フィレーンは眠りについた。

(フィレーンさん・・・怒ってますかねえ・・・)

おそらく、フィレーンが家を訪れている頃だろう。開封は空港を出て、久しぶりの母国の風にあたりながらそんなことを考えていた。

10年も来ないと変わるものだ。今日は少し観光でもして、明日の昼頃に列車で実家に向かおう。

(列車か・・・)

仕方がない、それしか家に帰る手段はないのだから。

周りから聴こえる久々の母国語になんとか気後れする。自分はこの国の人間に見えるのだろうか。そんな不安が頭をかすめた。ひさしぶりすぎて、いろんなことを忘れていた気がする。

携帯の電源を入れかけて、自分の携帯が国際電話は出来ないことを思い出した。

持ってきた意味がなかったか。そんなことを思い、人に悟られないように小さく笑う。

軽く夕食を済ませ、その辺をぶらぶらと歩く。懐かしさと、新鮮さの入り混じった風景。

街も時間も人を待ってはくれない。それが、少し寂しかった。

あの人も開封を待ってはくれなかった。

「そんなに・・・待てないんだから」

言った彼女の顔が、声が、鮮明に脳裏に浮かぶ。

彼女が待っていてくれれば、もっと早く帰ってきたのだが、そんなことは今更思っても仕方がないということは開封自身が一番よく知っていた。

彼女の家はまだ、同じところにあるだろうか。それが不安だった。

1年前、妹が新婚旅行に日本に遊びに来たときは変わっていないと言っていた。

「たぶん、大丈夫だろう。」と思う反面、街の変わりようが、もう開封の知っている場所などこの国にはないと言っているような気がしてならなかった。

(本でも買おうかな)

列車に乗っている間、暇なのは間違いなかった。ちょっと長めの小説でも買おう。

本屋によって、本を開けると中には漢字がびっしり並んでいた。当然なのだが、なかなかこの感覚が戻ってこない。

開封は、その本を買ってからホテルへ向かった。

日本に帰ったらフィレーンになんと言われるだろうか。

これから帰る家のことよりも、そのことのほうが気になった。

怒るだろうか。それとも、拗ねるだろうか。意外とどうってことない顔をしているかもしれない。

野上は一応言ってから出て来てたのだが、おそらく「どうだった？」とも聞いてこないだろう。開封の顔を見て、「ふーん」とか、やる気のない声で一人で納得するに違いない。

10年。

野上と出会ってから、10年もたっているのか。そんなことにも思いを馳せる。

10年前の野上。記憶をたどって出てきたのは最初に目が合ったとき睨まれて怖かったということだった。

結局いろいろあって仲良くなったのだが、当時の野上が人を寄せ付けない空気を放っていたのは間違いな

かった。

今では、課の中で普通に年下の女性社員にからかわれたりする。野上も負けじと言い返したりして、仲良くやっている。

10年という月日は、人が変わるのには十分すぎる時間なのかもしれない。

この長い時間の中で変わらないものなどあるのだろうか。どんなに変わるまいと思っても、変わってしまうのではないだろうか。変わっていないと信じている自分のこの思いさえも、同じつもりで、変わってしまっているのかもしれない。

強い思いでさえも、時間は風化させることができるのだろうか。

どんなに硬い石であっても、風雨にさらされれば小さくなってしまう。朝夕の気温の変化の中に放っておかれれば、割れる事だってあるだろう。

それとも、思い出は誇張され中身の無い空虚なものになってしまっているのだろうか。

それだけは嫌だった。忘れてしまうのと同じくらい嫌だった。

変化していてもいい。あの人への思いが確かに存在していれば。どんな形であっても・・・・・・・・

更けていく夜に反抗するように光を放つ街のなかで開封は狭い空を見上げていた。

次の日の朝。

起きて顔を洗うと、フィレーンは軽くパンと牛乳を食べて、すぐに最寄の駅に向かった。

開封がいつ頃、実家に向かうかはわからない。その上、その駅を使うかもわからないのだ。

今日一日、この駅で粘ってみて、それでダメだったら適当にその辺を観光でもして帰ることにしよう。

駅の改札が見えるベンチに座り、じっと待つ。

欠伸がでた。

ふと、これに一体何の意味があるのかと疑問に思う。

開封を見つけて、疑問をぶつけて、そしてどうするのだろう。開封は答えてくれるのだろうか。迷惑に思うかもしれない。

知らない土地で一人でいるのは不安である。しかも、周りの人間はなじみのない言語でしゃべる。

一時期、独学で勉強したことがあったので、簡単な単語くらいは聞き取れるが、所詮その程度だった。

私。あなた。彼。彼女。行く。おはよう。こんにちわ。またね。

切れ切れの単語だけが頭に入ってくる。

道行く人がフィレーンを振り返る。

金髪の中学生在がこんな朝早くからこんな所に座っているのがどうも気になるらしかった。

これなら、もしかしたら開封の方が自分に気づくかもしれない。そんなことを考えながら、フィレーンは辺りを見回して開封を探していた。

たまに、それらしい後姿を見つけたが、横から見ると全然違う人だった。いつも背広のイメージが強いので、もし私服を着ていたら見逃すかもしれない。それが怖かった。

せっかくここまで来て、万が一通りかかったとして、気づかなかつたらバカらしい。

しばらくすると人通りが多くなってきた。

通勤時間らしい。

フィレーンは天井を仰いだ。

この中にはいない。直感でそう思う。開封は人ごみは嫌いだ。おそらく、人が減った頃にでもものんびり現れるのだろう。

一通り通勤ラッシュも終わった頃に、フィレーンは空港で買ったスナック菓子を鞆から出して食べ始めた。

暇だ。とことん暇だ。とはいえ、目を離している隙に開封が通ったら困る。

一旦ベンチから立ち上がり、伸びをして改札の方へ歩き出す。改札からホームの中を眺めてみるが、開封らしい人影はない。ため息をついてベンチに戻る。

通り過ぎる人の数を数えたり、何をしゃべっているのか聞き取ろうと耳をすましたりして時間をつぶす。

電車から降りてきた人がどっと出てくると、決まって数がわからなくなり、また1から数えなおしていた。

もう、昼になっただろうか。空腹を感じてフィレーンは何か食べ物を買おうかと考えた。

何度目になるかわからないが、ベンチから立ち上がり売店に向かい、改札に向かう人の進行を横切る。

フィレーンを避けて通過していく人の中に、一人立ち止まった人間がいた。

長身で細身の・・・・・・・・

フィレーンは、視界の端に捕らえたその人物に振り向いた。向こうもこちらを見ていた。

目が合った。

「あ。」

口から、なんら意味のない音が漏れる。向こうも同じような間抜けな顔をしていた。口が半開きだ。

「フィレーンさん?!」

突然、見知らぬ世界の中で日常の声が出てフィレーンはいつもの調子で答えていた。

「やあ、開封。どしたの?」

つつつかとこちらに早足でやってくると、男はフィレーンをまじまじと眺めた。

「いえ……どしたのって……。それはこっちの台詞ですよ!何をやっているんですかこんなところで?!」

「ん……開封を追いかけてみた。」

「はあッ?」

素直に答えたのだが、開封は良く分からない顔をしていた。

「追いかけてみたって……私、行き先も教えていないのに」

「野上に聞いた。」

「タツだって中国としか知りませんよ。」

「うん。そう聞いた。」

「いえ、ですから……」

開封は言いかけてため息をついた。

「中国の何処かもわからないのに来たんですか?」

「うん。」

「会えなかったらどうするつもりだったんですか?」

「会えたし。」

「……………」

開封は困った顔をしてフィレーンを見ていた。

フィレーンはそれに気づいていながら、開封の目をじっと見ていた。

開封が何か言おうと口を開きかけたときだった。

ぐきゅう。と、フィレーンのお腹が切なげになった。

開封は出しかけた言葉を飲み込み、代わりに違う言葉を吐き出した。

「……何か、食べましょうか。」

「うん!」

フィレーンの満面の笑みに、開封はどうしたものかと頭をかいたのだった……

昼食を終え、二人は開封の乗ろうとしていた列車に乗った。

乗車時間は相当長らしい。

開封とフィレーンは並んで座っていた。乗客は少ない。

開封は本を読んでいた。

フィレーンは聞きたいことはたくさんあったのだが、なんとなく聞きにくくて話を切り出せずにいた。しかたなく、窓の外を眺める。

通り過ぎていく風景が、寂しい。

自分はなんのためにここに来たのだろう。とフィレーンは自分に問いかけてみたが、答えは見つからなかった。

本を読む開封の横顔は、話しかけないでくれ。と言っているように見えた。

～next day 午後～

電車の中でフィレーンは静かだった。自分は本を黙々と読んでいたので話しかけることが出来なかったのかもしれない。

開封はフィレーンが自分を追いかけてきた理由がわからなかった。

何処に行ったかもわからない人間を追って、国境を越える。特に意味もなく。偶然会えたから良かったものの、会えなかったらどうするつもりだったのだろうか。

フィレーンは普段、こんな突発的なことはしない。いつも、多少なりとも計算と計画をした上で行動する。それも小学生の頃からである。その辺の子では、ありえないほどしっかりしている。しっかりしすぎていて、子供らしくないと感じるのも事実だが、正直大人でも舌を巻くほどの綿密な計画を立てるこの才能には感心してしまう。何がフィレーンの背中を押したのかはわからないが、今回はそのフィレーンとしては珍しく計画性がなかった。

どれくらい時間がたったのだろうか、顔を上げて窓の外を見ると、ずいぶん都心からは離れたらしく建物がまばらになっていた。

日はまだ高い。読んでいた本の残りは、あと4分の1といったところだろうか。

隣を見ると、フィレーンは眠っているらしかった。慣れない土地で一人で、会えるかどうかわからない人を探していたのだ。疲れていたのだろうか。探していた人と会えて、ほっとしたのかもしれない。

(そんなにまでして探すほどの人間でもないのに・・・)

中学2年になったフィレーンの寝顔は、出会った頃の寝顔とあまり変わらないようだった。

起きているときは、大人ぶって背伸びしたり、格好つけたりもするが、何も飾らない寝顔は変わらない。

(変わらないものか・・・)

10年経つとやはり、この寝顔すらも変わってしまうのだろうか。

フィレーンに出会ったのは、彼が小学4年生のときだった。あれから五年経っている。あと五年で、この何も考えてなさそうな寝顔が変わってしまうのだろうか。開封は、どんなに考えてもそれが想像できなかった。

未来なんて想像できないものだ。だが、ここまで何も浮かばないと五年後もこの寝顔は変わらない気がする。

そっとフィレーンの頭をなでてから、開封は本の続きを読み始めた。目的地まではまだ遠い。

小説は山場に入ったのだが、開封はのめりこむこともなく、ただ淡々とその情景を画面ごしに見ているような気分だった。

主人公がどんなに必死だろうと、ヒロインが嘆こうと、友人がどうしようもない状況で裏切っても、所詮は作り話だ。ハッピーエンドでもバッドエンドでも、どっちだってかまわない。どっちにしても、世の中はそんなに単純ではない。

例えば、人生は自分が主役の物語だという人がいる。だが、自分が主人公だったとして、愛する人がヒロインだったとして、ヒロインは主人公のいないところで危険な目にあうことだってある。主人公だろうと、なんだろうと、助けることはできない。

友人は意外とあっさり裏切るときもある。山場もなにもなく、平坦な日々を過ごす主人公だっている。かと思えば、小説にだってないような奇跡も起こる。

それが現実だ。

別に小説が嫌いなわけではない。むしろ、好きなくらいだ。ただ、これから向かい合う現実のことを思うと、どうも素直に楽しめないだけだった。

知っているのと、目の当たりにしてその事実を消化するのはまったく別物だ。

すべて知っているのに、こんなに怖いのはそのことを理解しているからだ。

手や足が震えたりはしない。逃げるつもりもない。向き合うことを決めてここに来たのだから。必要なのは強い意思だ。

開封は自分にそう言い聞かせながら本の上に並ぶ文字を目で追っていた。

列車が止まった。

ガクン、と大きく揺れて、フィレーンが思いっきり開封にぶつかった。

「……………あれ？」

寝ぼけた声をだして、目を覚ます。

「もう着いたの？」

いまいち状況がわかっていないフィレーンに笑いかけて、開封は答えた。

「まだですよ。信号か何かでしょう。」

「ふーん……………」

開封は本を閉じて鞆にしまった。最後まで読めていないが、また後で読むことにしよう。

「あのさ、開封。今更だけど、何処に向かっているの？」

「私の実家です。」

「……………たまに帰るの？」

フィレーンはどこか聞きにくそうに尋ねてきた。

「いえ、10年ぶりくらいです。家を出てから一度も帰っていません。」

少しの間があってから、フィレーンは次の質問をした。

「なんで、ずっと帰らなかったの？」

開封は返答に迷った。あまり話したくないのが正直なところである。しかし、自分が帰ろうと思ったきっかけがフィレーンにあったことを思い出し、話すことを決意した。

「……………家出同然で出てきたものですから、帰りにくくて。」

少し照れたように言う。フィレーンの反応が不安ではあった。

他人が思い描く自分のイメージはだいたい知っていた。真面目で、優しく、優等生的。親孝行してそんな人間。たいがいの人は勝手にそう思っているらしい。

フィレーンも、そう思っていたらしい。あまりのギャップに唖然としているようだ。

「開封が……………家出？」

「ええ。父親が頭の固い人間で、日本で働くと言ったら反対されました。」

「……………そうなんだ……………」

フィレーンはなんと返していいのかわからずにいるようだった。

「あなたが家に帰ったのを見て、私もそろそろ帰らないといけないかなあ、と思ひまして。」

「僕？」

自分が人に影響を与えたというのが驚きだったのか、フィレーンは目を丸くしていた。

「そっか……………開封も家出してたんだ……………」

そして感心したように、「ふーん」と言う。

本当は帰れなかった理由はもう一つあるのだが、開封はそれは言わないでおくことにした。

開封が怖いのは、言わなかった方の理由だった。

10年以上経っているのに、まだ言葉にするのが怖いという方が正しいのかもしれない。知っていても、まだその事実を受け入れきれないからだろう。だから、言葉にできない。

フィレーンはそれ以上何も言わずに、ただ下を向いて何か考え込んでいるようだった。

話は終わったようだったので、開封は本を鞆から取り出して小説の続きを読み始めた。

その後、目的の駅に着くまで開封とフィレーンの会話はなかった。

駅に着き、外に出る頃にはもう夜になっていた。月と星が明るい。

開封とフィレーンはそこからタクシーに乗り、開封の実家に向かった。ぼつぼつと家の明かりが見える。

家と家の間隔は広く、その間には畑があった。そんなところに開封の育った家はあった。

ここはたいして変わらない。そんなことを思いながら家の呼び鈴を鳴らす。

少しして、玄関があいた。

出てきたのは間違いなく開封の母親だった。ただ、開封の記憶してる母親ほど、明るく朗らかではなく、年をとり疲れた顔をしていた。

開封を見るなり疲れた顔が、明るくなっていくのがわかる。

「おかえりなさい、開封。ずいぶん立派になったのね。」

久しぶりに聞く地方訛りの母国語と、母の声が懐かしい。

「……ただいま。母さんは、年とったね。父さんは？」

懐かしいが、別に嬉しくはない。時間の経過が空しいだけだ。自分が立派になったとも思えない。

「元気よ。でも、あなたには会わないみたい。もう寝てる。」

「そう……。そうだ。電話したときは言わなかったんだけど、もう一人泊めてもらえるかな。」

言って、開封は全く会話の内容を理解していないフィレーンを母親に紹介した。

「日本で知り合った子なんだけど、中国に行ってみたいっていうから一緒に来たんだ。いいかな？」

フィレーンは何がなにやらわからなかったが、とりあえず頭を下げて覚えていた挨拶をした。

「栄地フィレーンと言います。初めまして、よろしく申し上げます。」

母親は少し驚いてフィレーンと開封を交互に見ていた。

開封の方は、まさかフィレーンが中国語を少しとはいえ勉強していたとは思っていなかったのが驚いていた。

なんの返答もないので、フィレーンは焦って頭を上げた。

そして開封を見る。

「僕、なんかまずいこと言った？」

聞かれて、開封は、はっとした。

「……いえ。あなた勉強してたんですか？」

「ん……。うん。ちょっとだけ。」

小声で日本語で会話してから、母親の視線に気づき開封はさっきの話を続けた。

「それで、うちに泊めてもいいかな？」

「ええ、それは構わないわ。上がって、ご飯食べなさい。まだでしょう？」

「うん。ありがとう。」

家の中は開封の記憶にはないほど静まり返っていた。

兄は近くに住んでいるらしいのだが、どうもこの家にはいないらしい。妹は結婚して、もうこの家にはいない。あれだけ騒がしかった家が、今では老夫婦が静かに暮らしているだけだ。

変わらないのは父の頑固さだけということか。そう思いかけて、開封は頭を振った。家の敷居をまたぐ事ができたということは、父もやはり年老いて変わったのだ。

開封とフィレーンは、長旅での疲れもあって、夕飯を食べ終わるとすぐに眠りについた。

昨日はあのあと、列車から降りて、タクシーで開封の家まで行った。

開封の家には、開封の母親と父親だけが住んでいるようだったが、父親の姿は見かけなかった。

開封は母親と何か少しだけ話したようだったが、フィレーンには内容はよくわからなかった。二人は、そのあと開封の母親の作った夕食を食べ、そのまま同じ部屋で寝ることになった。

フィレーンは、聞きたいことや話したいこともあったのだが、開封は長旅で疲れていたらしく、すぐに寝てしまった。フィレーンも疲れていたのは自分でわかっていたので寝ることにしたのだった。

朝、目が覚めると開封はもう部屋にいなかった。急いで着替えて昨日夕食を食べた食卓へ向かう。

台所には、開封の母親がいて、フィレーンの分の朝食がテーブルに残っていた。

開封の母は、フィレーンに気づくと、笑顔で何か言ったのだが、中国語らしく、フィレーンにはいまいち内容が把握できなかった。

フィレーンは、とりあえず挨拶をして部屋を見回した。開封は、ここにもいないようだった。

開封の母がもう一度話しかけてきた。なんとなく朝食を食べるように促しているようだったので、フィレーンは朝食を食べ始めた。

開封は何処へ言ったのだろうか。そんなことを考えながら朝食を口にする。開封を追ってここまで来たのだが、結局追いついていない気がする。

良く考えてみれば、フィレーンに何も言わずに日本を出たのは、一人で帰りたかったからではないだろうか。それならば、フィレーンを置いて、何処かへ行ってもおかしくない。

しかし、ここまで来て何もしないのももったいない。何か得て帰らなければならない。何とか開封を追いかけて、追いつかなければならない。

フィレーンは心の中で、そう強く決心して箸を置いた。

まずは、この開封の母に開封が何処へ行ったのか聞かなければならない。

英語なら通じるだろうか。そう、考えて口を開いたときに玄関から開封の声がした。帰ってきたらしい。

少しすると、開封が部屋に入ってきた。

「あ、フィレーンさん。起きたんですか。」

「あ、うん。おはよう。」

開封は手に花束を持っていた。一点の曇りもない白い花。

「・・・その花束、何？」

フィレーンに言われて、開封は意表をつかれたような顔をした。

「あ・・・ああ。これですか？」

開封は花束を見て、少し考え込んだようだった。短い黙考の後、開封は花束を見たまま小さな声で答えた。

「ある人に、届けようと思ひまして・・・」

「誰？」

続いたフィレーンの質問に開封は小さく笑った。そして、その微笑をフィレーンに向ける。

「これから行くので、フィレーンさんも一緒に行きませんか。」

「え、いいの?!」

一人で行きたいものだと思っていたので、思わぬ誘いにフィレーンは声を大きくした。が、当の開封はきょとんとしている。

「?いいですよ。たぶん、その方があの人も喜ぶますし。」

「ななななんですか?」

意味がわからずフィレーンが身を乗り出す。

「いえ、なんでと言われても……。なんとなく、そんな気がしたからとしか言いようがないのですが。」

開封は少し困った顔をして、そのあと母親に話しかけた。たぶん、これから出かけることを伝えたのだろう。

「準備ができていたら行きますけど、大丈夫ですか?」

「え、あ、うん。」

本当は顔を洗っていなかったのだが、フィレーンは予想外の事態に咄嗟にそう答えてしまった。

「じゃあ、行きましょうか」

言うと、開封はスタスタと玄関に向かう。

「ちょっと開封?ああ!待ってよ!!」

フィレーンは慌てて開封の後を追う。部屋を出る前に、軽く開封の母に頭を下げて礼を言う。

そして、再び開封を追いかける。

スタスタ歩く開封の後ろをフィレーンが早足で追いかける。

何しろ開封の身長は180cm以上ある。対してフィレーンは小学生の頃よりは伸びたとはいえ、その身長差は30cm。歩幅が違う。

フィレーンは開封の後を追いかけてながら、いろんなことを考えていた。

あの人というのは誰なのか。何故、一緒に行ってもいいのか。さらには、自分がいると相手が喜ぶ理由。

フィレーンがいて困る場面は考えられても、喜ばれる場面というのは想像しがたい。

しかも、花束を持っていくような相手である。女の人だろうと思うのだが、一体どんな人なのか。フィレーンの心は、期待と不安でいっぱいだった。

しばらく歩いて着いたのは、墓地のようだった。

「ねえ、開封」

フィレーンが息を切らせながら、開封に話しかける。

「何ですか?」

振り返らずに開封が応える。

「人に会うんだよね?」

「……そうですよ。」

開封はすぐに答えたのだが、フィレーンは小さな沈黙が気になった。

墓参りじゃなくて?

聞こうと思ったのだが、なんとなく言い出しにくい。開封が持っている花束は墓に供えるものでないのは明白だった。

開封の歩調が早くなっている。フィレーンは小走りになって追いかけていた。

「ちょっと開……」

もう少し、ゆっくり歩いてくれと頼もうと思ったとき、開封の足がぴたりと止まった。

開封は一つの墓石と正面から向かい合っていた。そこでしゃがむと、その墓石をじっと見つめる。

開封の表情は波のない水面のように静かだった。静かだが、決して穏やかではない。

水面下で、何かが渦を巻いていた。普段の顔を作っている。そんな表情だった。

開封は、しばらくすると疲れた笑顔で、小さな声で一言二言しゃべってから持っていた花束を墓の前に置いた。

フィレーンは何も言えずに、それを眺めていた。

開封にとって、大切な人だったのだろう。それだけは、見ていればわかった。

恋人だったのだろうか。なんとなく、そんなことを考える。だとしたら、それはどんなに辛いことだろう。

(あ……)

フィレーンは2年前のある冬の朝を思い出した。

あのとき、フィレーンは開封にしつこく「彼女はいないのか」と聞いていた。開封の家の隣に住んでいる由紀が、知りたがっていたから聞いただけだったのだが、開封に適当にはぐらかされて、結局聞くことはできなかった。

最終的に「結婚しないのか」と聞いたとき、開封は「しない」とだけ答えたのだった。

理由は教えてもらえなかったのだが、もし、これが恋人の墓だったとしたら、結婚しない理由もわかる気がする。

フィレーンがそんなことを考えているうちに、開封の用事は済んだらしく立ち上がり、フィレーンの方へ歩いてきた。

「もういいの？」

言ったフィレーンに笑いかけ、開封は何も言わずにフィレーンの背を押し、墓の前に押し出す。

「な、何？誰のお墓なの？」

焦るフィレーンに開封は静か答えた。

「私が中国を出たちょうどその日に、列車事故で死んだ幼馴染です。」

開封はまた墓に向かって何か言っていたようだったが、フィレーンには全くわからなかった。

フィレーンは開封に肩をつかまれ、墓の前に立たされて、何をしたらいいものかと考えている。知らない人なので、かける言葉も浮かばない。

開封が知らない言葉を話しているからだろうか、目の前の現実が淡く、色あせた世界に見えた。

「？」

突然、頭に冷たいものが当たる。

雨かと思って頭上を見上げると、いい感じの青空が広がっていた。

開封の手がフィレーンの肩から離れ、開封がもと来た道へと歩き出す。

「帰りましょうか。」

開封は背を向けたままそう言った。なんとなく、開封の話す日本語が懐かしい。

「……うん。」

返事をしたフィレーンに、開封はやわらかい、いつもの笑顔で振り返った。

「墓参りになんて付き合わせて申し訳ありません。」

「いや、いいよ。別に。」

軽く答えて、フィレーンは開封の横に並ぶ。

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

こっちに来てから、開封が優しくしたのは始めてかもしれない。フィレーンは嬉しくなって、明るい声で応えた。

「開封が結婚しない理由さ……前に聞いたとき、僕が誰かを好きになったら教えてくれるって言ったよね？」

「そう……でしたっけ？」

フィレーンは2年前のことははっきりと思い出していたのだが、開封はあまり記憶にないようだった。

まあ、そんなものなのかもしれない。

開封に彼女がいない理由だとか、結婚しない理由だとかを聞く人間は多いだろう。

フィレーンはここ2, 3年一緒にいて、開封がモテることは知っていた。

「あれ、なんかわかつちゃった。」

「・・・はあ。」

開封は頭の上に疑問符を並べていた。

そんな開封に親近感を覚えながらフィレーンは言葉を続ける。

「だからさ。僕が誰かを好きになって・・・ホントにいつになるかわからないけど、そしたらさ。その幼馴染の人の話してね。」

「ええっ?!」

驚いて、というよりはむしろ焦って、声を上げる開封にフィレーンは笑いかけて少し前を歩いた。

「どういう理屈でそうなるんですか?!」

「ダメなの?」

立ち止まり、開封が追いつくのを待つ。

「え・・・いえ。」

追いつきかけた開封がひるんで、フィレーンの半歩後方で減速し、その間隔を保つ。

「じゃ、約束したよ。」

「・・・はい。」

フィレーンと開封は墓地の道を開封の家に向かって、のんびり歩いて行った。

目を覚ますと、夢の中にいるような不思議な感覚に襲われた。

目の前にあるものは、ひどく懐かしいが、記憶が遠すぎて知らない場所のようにしか感じない。

自分がいたのは、10年以上も帰っていなかった自分の家だった。

部屋を見渡すと、昨日、思わぬところで出会ったフィレーンが眠っていた。列車に乗っていた時と同じ、変わらぬ寝顔で寝息を立てている。

開封は布団から出ると、顔を洗い服に着替えた。

台所では、母が朝食の用意をしていた。

「おはよう。」

そっけない開封の声に母親は手を止めて振り返った。

「おはよう。」

やわらかい声が耳に懐かしい。しかし、母はいつからこんな力のない声で話すようになったのだろうか。妹が嫁いだ頃からなのだろうか。それとも、自分が家を飛び出した頃だろうか。わからないが、それは別に開封にはどうでもいいことだった。

子どもは巣立っていく。そういうものだ。どんな形であっても、親はそれを受け入れる以外ない。

「私は朝食いらないから。フィレーンさんのぶんだけお願いします。」

「・・・そう。」

開封は、言い終えるとすぐに玄関に向かった。

開封は外に出て、歩き始めてから、いつもより歩調が速いことに気づいた。

何を焦っているのだろうか。こんなところで速く歩いても意味がないのに。いくら焦ったって何も変わらないのに。

しばらく歩き続けていた開封の足が花屋の前で止まった。店頭飾ってある白い花が目にとまる。

墓に供える花としては場違いだ。そんなことも思ったが、開封はその花をずっと見ていた。

自分が彼女にあげるなら、こんな花がいい気がする。透けるような白と、滑らかな花卉のライン。こざっぱりとしているが、そのぶん純粋で誠実そうだ。

(花なんて、ガラじゃないか・・・。)

なんとなく、彼女に笑われそうな気がする。カラカラと笑う彼女を想像して少し恥ずかしくなる。

「いらっしゃいませ。何をお探しですか？」

急に店員に声をかけられビクリとする。

「あ、いえ、あの・・・えと・・・これ、花束にしてもらえますか？」

焦って一瞬言葉がでなかったが、何とか持ち直して照れ笑いをしながら店員に頼む。

「あ、はい。かしこまりました。」

何故焦ったのかわからない店員は、少し不思議そうな顔をしながら白い花を持って店の奥に戻っていった。奥から小さな声でさっきの店員とおばさんの声がしていた。

「・・・開封くんじゃ・・・の？波さん・・・の」

「かなあ？なんかそんな・・・るけど。」

途切れ途切れで聴こえる会話。開封はそれを右から左へ聞き流し、空を眺めていた。飛んでいる一羽の小鳥を目で追って、輪廻転生は実際起こりうるのかを考える。起こったとしても前世の記憶がないのなら意味がないのではないだろうか。もし仮に記憶が残っていたとして、それは幸せだろうか。親はどう思う？

その人の知り合いはどう思う？きっと世の中はぐちゃぐちゃになってしまうのだろう。

人の記憶を持った小鳥。小鳥の記憶を持った人。

何の意味もない。伝えたいことを伝える手段もない。

「お待たせ致しました。」

店員がおずおずと開封に花束を差し出した。

「ええ。ありがとうございます。」

開封は礼を言うと、会計を済ませて花屋を後にした。そして、また歩き出す。

今度は民家の前で立ち止まり、一つ深呼吸をしてから呼び鈴を鳴らす。

声が出て、中から開封の母と同じくらいの年齢の女性が出てきた。女性は戸を開け、開封の顔を見たときに「あ」と声を出した。

「開封くん？」

「はい。おひさしぶりです。」

開封が答えると、女性の頬を一筋の涙が伝っていった。

「あ……ごめんなさい。あなたを見たら煌のこと思い出してしまって……久しぶりね。大きくなって……」

やさしい笑顔だ。開封は花束をあげるはずだった彼女の笑顔を思い出していた。親子だから似ているのは当たり前だ。

「もっと早く帰ってこれば良かったんですが……お恥ずかしい話ですが、怖くて帰って来れませんでした。」

少し照れたような笑顔を彼女の母親に向け、開封はそれ以上言葉がでなかった。

「そう……でも、帰ってきてくれて嬉しいわ。お墓には行った？」

「いえ……場所を知らないの、それを聞きに来ました。」

女性は、開封がなんとか振り絞った言葉に頷いてから、場所を教えてくれた。

一通り場所を教え終わるころ、彼女の母は開封の持っている花束に気づいた。

「それ……」

開封は言われて慌てて花束を自分の後ろに隠した。

「あ、いえ、えっと、その……お墓に供えるものじゃないのはわかってるんですが、その……」

「ありがとう」

焦った開封を咎めることはせず、彼女の母は笑顔で一言礼を言っただけだった。

「……ありがとうございました。」

開封はお墓の場所を教えてくれたことに礼を言うと、彼女の家を後にして、自分の家に向かった。

彼女に伝えられることには何があるだろうか。

昔伝えようと思ったこと。今も想っていること。今の自分。

フィレーンはまだ起きただろうか。まだ、寝ているような気もする。寝ているようなら、一人でいけばいいことなのだがフィレーンと一緒にいくのもいいかもしれない。

今の自分が幸せだという証拠。

「ただいま」

開封は家に入ると、台所に向かった。

食卓にフィレーンと母がいた。

「あ、フィレーンさん。起きたんですか。」

「あ、うん。おはよう。」

フィレーンの声には、いつもほどの威勢がない。

ふと、フィレーンの目が開封の手元に移る。

「・・・その花束、何？」

フィレーンに言われて、開封は意表をつかれたような顔をした。

「あ・・・ああ。これですか？」

開封は花束を見て、少し考え込んだ。どう答えるのが適切なのだろうか。墓に供えるなんて言えない。

短い黙考の後、開封は花束を見たまま小さな声で答えた。

「ある人に、届けようと思ひまして・・・」

「誰？」

続いたフィレーンの質問に開封は小さく笑った。興味があるのなら、やはりフィレーンも連れて行こう。

開封はその微笑をフィレーンに向けた。

「これから行くので、フィレーンさんも一緒に行きましょうか。」

「え、いいの?!」

誘ったとたんに、大きな声でフィレーンが聞き返してきたので開封は驚いて目を瞬いた。

何故、こんなにフィレーンが意外そうな顔をしているのかわからない。

「?いいですよ。たぶん、その方があの人も喜ぶますし。」

「なななななんで？」

いつもではありえないほど、困惑しているフィレーンの質問に開封も困る。

「いえ、なんでと言われても・・・。なんとなく、そんな気がしたからとしか言いようがないのですが。」

フィレーンの頭の上に疑問符が浮かんでいるのを眺めてから、開封は母親に話しかけた。

「これから、煌のお墓参りに行ってくるから。」

母は開封の言葉に目を丸くしていた。そして、何も言わずに頷く。それを確認してから、開封は今度はフィレーンに話しかける。

「準備ができていなら行きますけど、大丈夫ですか？」

「え、あ、うん。」

「じゃあ、行きましょうか」

フィレーンがすぐに答えたので、開封はすぐに玄関に向かって歩き始めた。

「ちょっと開封?ああ!待ってよ!!」

フィレーンが開封の後を追ってくる。部屋を出る前に、母に礼を言ったようだった。

開封の後ろをフィレーンが追いかけていた。

開封は墓地に向かって歩き続けた。はやる気持ちを抑えながら。

急いでも仕方がないと繰り返し自分に言い聞かせてはいたが、足は速まるばかりだった。

墓地に着くと、フィレーンが話しかけてきた。

「ねえ、開封」

「何ですか？」

開封は振り返らずに応えた。

「人に会うんだよね？」

開封は一瞬どう答えるべきが迷った。確かに人に会うのである。開封にとってはそうなのだ。

他の人にとってはそうでなくても。

開封は迷った末、結局自分の見解で答えた。

「そうですよ。」

おそらくフィレーンは不思議に思っているだろう。墓地で花束を持って人に会う。

常識で考えればおかしい話だ。自分の歩調が速くなっているのを感じながら開封は墓石の名前を見ていた。

「ちょっと開……」

フィレーンが声をかけたそのとき、開封は目的の名前を見つけて歩くのをやめた。

そして、その墓石を正面から見据える。しゃがみこんで、その墓に掘られた名前から目を離せなくなっていた。

これが、彼女の墓なのか。

彼女はここに眠っているのか。

彼女は死んでしまったのか。

本当に死んでしまったのか。

わかっていたことを今更痛感させられる。

どこかで、認めていなかった彼女の死を、今墓を目の前にして認めざるを得ない状況にある。

思ったより自分は愚か者だったらしい。墓を見るまで信じていなかった。

こんなのは嘘だ。彼女はどこか違うところで生きているんだ。ここに彼女はいない。違う。

違う。ここにいる。死んでしまった彼女は。これが現実で、受け入れるべき事実だ。

いい加減認めて、大人になろう。どんなに辛くても目の前の現実を受け入れなければ前には進めない。

進もう。前に。過去を過ぎ去ったものにしよう。伝え切れなかった想いを吐き出して、全て終わらせよう。

そのための、この花束だ。

開封は花束を握り締めて、なんとか言葉をつむぎだした。

無理にでも笑おう。彼女に泣き顔なんか見せられない。彼女はきっと、くだらないプライドだと言うだろう。

「でも、男の子ってそんなもんだよね。」と、彼女なら言う。それでいい、笑おう。

花束を静かに差出し、小さな声で話しかける。

「これ、私の気持ちです。本当は、墓前に供えるものではありませんが……あのとき言えなかったので、今言いますね……」

開封は一呼吸おいて、続けた。

「好きです。今も、これからもずっと。遅くなって申し訳ありませんでした。」

開封は気持ちの整理をつけると立ち上がり、フィレーンの方へ歩いていった。

「もういいの？」

言ったフィレーンに笑いかけ、開封は何も言わずにフィレーンの背を押し、墓の前に押し出した。

「な、何？誰のお墓なの？」

焦るフィレーンに開封は静かに答えた。

「私が中国を出たちょうどその日に、列車事故で死んだ幼馴染です。」

フィレーンに答えてから、墓に声をかける。

「私は今、日本で幸せに生活しています。この人はフィレーンさん。私の親友で……まあ、弟みたいなものです。」

フィレーンは困惑したように目をきよときよとさせていた。

「昔は、その……辛くて死のうとしたときもありましたけど、もう大丈夫です。いい友人ができましたし。煌のことを忘たりはしません。ちゃんと覚えていて、あなたを好きでいるまま幸せになれる方法を見つけたんです。心配しないで。だから」

話しながら、頬を温かいものが伝っていくのを感じる。

ああ、自分は泣いているんだ。そう実感したとき、開封の頬は自然に緩んでいた。

「やっぱり、くだらないプライドでしたね。」

最後に言おうとした言葉は飲み込んで、開封はそう言って笑った。

フィレーンの肩から手を離し、少し上を向いて、もと来た道へ歩き出す。

「帰りましょうか。」

開封は背を向けたままそう言った。

「・・・うん。」

返事をしたフィレーンに、開封はやわらかい、いつもの笑顔で振り返った。

「墓参りになんて付き合わせて申し訳ありません。」

「いや、いいよ。別に。」

軽く答えて、フィレーンが開封の横に並んだ。

「ありがとうございます。」

「どういたしまして。」

フィレーンが明るい声で応えた。続いたフィレーンの言葉に開封は首をかしげた。

「開封が結婚しない理由さ・・・前に聞いたとき、僕が誰かを好きになったら教えてくれるって言ったよね？」

「そう・・・でしたっけ？」

記憶にないことを言われてなんと答えていいのかわからなくなる。

「あれ、なんかわかつちやった。」

フィレーンが少し得意げに言った。

「・・・はあ。」

開封は頭の上に疑問符を並べていた。

「だからさ。僕が誰かを好きになって・・・ホントにいつになるかわからないけど、そしたらさ。その幼馴染の人の話してね。」

フィレーンがニッと笑って開封に言った。

「ええっ?!」

予想外のことに開封は叫んでいた。

フィレーンは開封に笑いかけると、開封の前を歩き出した。

意味がわからない。

「どういう理屈でそうなるんですか?!」

「ダメなの？」

フィレーンは立ち止まり、開封が追いつくのを待つ。

「え・・・いえ。」

追いつきかけた開封がフィレーンの半歩後方で減速し、その間隔を保つ。

「じゃ、約束したよ。」

「・・・はい。」

フィレーンと開封は墓地の道を開封の家に向かって、のんびり歩いて行った。

晴れた空に開封の疑問は昇華することなく、ただ積もっていった。

## ゼンヤサイ

---

いきなりだが、今日は文化祭前日である。

文化祭前日というのは、どこのクラスも6時くらいまで残って作業したりするものだ。

週休二日の影響でどこの中学の文化祭もわびしくなっているという噂だが、陽南中学は違った。

歴代の生徒会長のおかげで休日を裂いて、文化祭準備時間を設ける許可をもらい、おかげで今も昔ほどではないにしろ文化祭らしいことをしている。

そして、その歴代の生徒会長の中にはあのハチャメチャ生徒会長も含まれている。

生徒会というものは、文化祭を盛り上げるのに一役かっていたりするものだから、例に漏れず遅くまで残っているのである。

普通のクラスでは6時完全下校のところを生徒会のみ特別措置として8時までの活動を許されている。

が、しかし。他の生徒が大方下校してしまった6時現在、生徒会室にはほとんど人がいなかった。例年より早く仕事が終わってしまったため、皆帰ったのだ。そして、早く仕事が終わったのは要領よくこなせたからである。

「いやあ。やっぱり二年目ともなると手際が良くなるわねえ〜♪」

大層ご機嫌な坂本優はパイプ椅子に座り足を組んで「うんうん」と満足そうに頷いていた。

「三期連続生徒会長なんて、普通いませんよ。」

あきれ返った様子で洋介がつぶやいた。

「だって、三年後期の選挙に立候補しちゃいけないなんて校則ないもの。」

「まあ、そうですけど。受験はどうするんですか、受験は。」

洋介が言うと、坂本は洋介のほうを見て、二、三回瞬きをした。

「受験？あんなの推薦ですぐ受かるし。問題ないわ。」

当然のように言った坂本に洋介が詰め寄る。

「ええ〜?! そんなアッサリ決まるもんなんですか?!」

「ん? うん。生徒会長とかバリバリやってるから内申もバッチリだし、普通の成績もいいから。」

「う・・・うらやましい・・・。あ、谷口先輩も推薦ですか?」

優越感に浸っている坂本は無視して、洋介は掃除をしている谷口の方を向いた。

「え? ああ、受験ですか? 僕は普通に入試受けますよ。」

「へ? じゃあ、こんなところで生徒会とかしてたらまずいんじゃないんですか?」

洋介が言うと、谷口は少し答え難そうに眉を寄せた。

「それはそうなんですが・・・」

口を濁し、洋介にだけわかる程度に視線で坂本を指す。

「あ。そうですか・・・お疲れさまです。」

洋介は素直に納得した。なるほど、確かにこの人が生徒会長をやっている限り谷口は必要である。彼女の暴走を止められるのは谷口ぐらいなものだ。

「別に受験勉強とかいらないでしょ、谷口君は。全国模試でも常にベスト5入りしてるし。」

「僕はちゃんと勉強してますよ。」

「私だってしてるわよ。」

二人の会話は、洋介には遠い世界の物語でしかなかった。

賢いのは知っていたが、ここまでだったとは知らなかった。こんな田舎の公立中学に全国レベルの人がい

るなんて・・・。

「・・・もう、いいです。何か先輩達の話を知っていると、俺がダメな人みたいな気分になるからいいです。」

「そう？」

肩を落とす洋介を見て、坂本と谷口は二人で顔を見合わせ、首をかしげた。

「ああ、坂本さん。掃除も終わりましたが、このあと何がすることでもあるんですか？」

谷口は箒を掃除用具入れに片付けながら聞いた。

坂本はものすごく嬉しそうな顔をしていた。

洋介は嫌な予感がした。坂本が嬉しそうな顔をしているときはろくなことを考えていない。そして、問答無用でその「ろくでもないこと」に自分を巻き込むのである。

水鉄砲でサバゲーとか。大福ロシアンルーレットとか。階段滑りおり競争とか。

さらに、何故か負けるのは8割方洋介なのだ。

「な・・・何もすることないなら帰りましょうよ・・・」

洋介は、出来る限りの小さな抵抗を試みた。たぶん効果は無い。

「何を言ってるの？やることならあるでしょ？」

「いや、だって仕事は終わったじゃないですか！早く帰って、明日に備えましょうよ！！」

洋介の必死の訴えを坂本は鼻で笑い飛ばした。

「せっかく夜の学校にいるのに何もしないで帰るなんてそんな・・・」

「帰りましょう。さっさと帰りましょう！だってほら、時間遅くなると危ないですよ？会長女の子なんですし！」

「まあ！心配してくれるの？ああ・・・河崎くんって紳士ねえ。」

「ええ、紳士です。ジェントルです。帰りましょう。今すぐ帰りましょう！！」

「そんなにジェントルなら女の子のお遊びにも付き合ってくれるわよね？」

どんなに必死になったところで坂本には勝てないことを洋介は知っていた。

知ってはいるが、ここで引き下がるわけにはいかない。

「ダメですって！そんなこと許すのは本当の紳士じゃありませんって！！ねえ？谷口先輩？！」

とりあえず、助け舟が欲しいので谷口を会話に巻き込む。

「ああ・・・まあいいんじゃないですか？帰りは僕が家まで送りますから危ないこともないでしょう。」

が、とんだ泥舟だった。谷口は変なところで天然を発揮する。洋介はこの事実を忘れていた。

「たーにぐーちせーんぱーいッ！！」

洋介が半泣きで抗議したのだが、谷口はその意味を理解した様子もなくキョトンとしていた。

一方、坂本は満面の笑みを浮かべている。

「ありがとう、谷口君。それじゃあ始めましょうか。」

洋介は自分の努力が結局無駄に終わったという徒労感に打ちのめされ、がっくりと頭を垂れた。

坂本の声は聞きたく無かったのだが、耳をふさぐこともしなかったため言葉の続きは嫌になるほどはっきりと耳に届いた。

「肝だめし。」

「いーやーだー！！」

洋介の叫びは無視して、坂本は話し続ける。

「ルールは簡単。ここにある白い蠟燭を一本だけ持って4階の女子トイレまで行きます。蠟燭は小さいのでもって5分。4階まで上がるのには十分ね。でも、ゆっくりしていると帰ってくるまではもちません。し

かし、急ぐと火が消えてしまいます。で、トイレの一番奥の窓のところに私が昼間大きめの蠟燭を3本用意しておきました。火を移し変えて、大きめの蠟燭を持って帰ってきてください。」

「女子トイレ……ですか？」

谷口が困ったような顔をした。

「うん。だって、女子トイレのほうが個室が並んで怖いじゃない。大丈夫よ。誰もいないから。」

「……い、いたらどうするんですか？」

洋介が恐る恐る聞く。

「生徒はいないわよ。もちろん、先生も。いるとしたら……ま、例のあれよね。」

洋介は背筋に冷たいものを感じながらひきつった笑いを浮かべていた。

「じゃ、順番ジャンケンで決めようか。勝った人からね。ジャン・ケン・ホイ」

間髪おかずに話を進め、坂本はチョコキを出した。

二人は咄嗟にパーを出していた。

「はい。私いちばーん！」

仕方が無く、残る二人は再びジャンケンをする。

勝負はすぐについた。

「じゃあ、僕が二番ですね。」

「……ラ……ラストっすか……？」

洋介は自分の開いた右の手のひらを恨んだ。

こういう場合、後になればなるほど恐怖は倍増するものである。

「じゃ、いってきまーす♪」

坂本は蠟燭に火をつけると元気に生徒会室を出て行った。

何が肝試しか。楽しんでいるだけではないか。いや、むしろ単純に彼女の肝が据わっているだけか。

洋介は生徒会室に谷口と二人で残され、最後に自分の番が回ってくることを考えて顔面蒼白になっていた。

その様子に気づいた谷口が洋介の気持ちを落ち着かせようと口を開いた。

「大丈夫ですよ。怪談話があるほど古い学校でもありませんし。」

「古くなくても、夜の学校ってだけで十分怖いですよ！しかもトイレとか……ああ！絶対出る！たぶん、昔いじめられて女子トイレに閉じ込められたまま死んだ子とか出て来ますって！！」

一人でわめきたてる洋介の肩をたたき、谷口はなだめようと心がけた。

「そんな話聞いたことありませんから、ちょっと落ち着いて冷静になりましょう。ね？」

「ががが学校と教育委員会が揉み消したんですよ！絶対そうだ！！」

「どう考えても無理ですって……ほら、そんな想像力をたくましくしているから、余計に怖くなるんですよ。蛍光灯がついてないだけで、いつもと同じですって。」

「何言ってるんですか？！日が落ちたら学校なんて昼間とはまったく別次元ですよ？！」

「……いえ、次元は変わらないと思いますけど……」

谷口はなだめるのは無理だと判断し、会話をあきらめた。

「……会長……遅くないですか？」

突然おとなしくなったと思ったら洋介はそんなことを言い出した。

谷口は生徒会室に掛っている時計に目をやった。そして、少しうんざりする。

「2分しか経ってませんから。」

谷口はため息をついたあと、静かに坂本の帰りを待つことにした。

洋介は、一人でいらぬ想像力を働かせて恐怖とストレスでカタカタと震えていた。

数分後。

「いやあ〜。怖かったあー。」

たいして怖くもなさそうな声でそう言いながら坂本が大きめの蠟燭を持って生徒会室に戻ってきた。

「じゃ、次、僕行ってきますね。」

職員室に行くのと変わらない調子で谷口が腰を上げると蠟燭に火をつけ生徒会室を出て行く。

坂本は谷口を見送ると洋介の様子がおかしいことに気づいた。

「?どうしたの河崎くん?そんな青白くなっちゃって。」

「あなたのせいじゃないですか?!」

バツと顔を上げ、洋介が叫ぶ。

「ええ?やあね。ただの肝だめしじゃない。何?幽霊でるとか思ってるの?」

小バカにしたように言う坂本にひるんで、洋介はなんとか言い返そうと、少し考え込んだ。

「できるかもしれないじゃないですか!」

考えた結果、この程度のことしか頭に浮かんでこなかったらしい。

「ふーん」と、坂本は興味もなさそうに言うと椅子に座った。

「ま、出ると思ってるると出るらしいけどね。」

なんとなしに言った坂本の言葉に洋介の血の気がさらに引いていく。

「……………い、いないッスよ。何言ってるんですか。だって、この学校新しいし。」

さっきとは正反対のことを、とりあえず口に出して、洋介は何も出ないことを祈るしかなかった。

## ゼンヤサイ（ツツキ）

---

谷口はいつもの調子で生徒会室に戻ってきた。

「お疲れ〜どうだった？」

坂本は楽しそうにヒラヒラと手を振っている。

「誰もいないとわかっていても女子トイレに入るのはやっぱり気が引けますね。」

「はは一。さすが谷口君。ズレた答え返してくるね。」

坂本は笑って、机をバシバシと叩いた。

「ところで坂本さん。蠟燭が・・・」

「じゃ、河崎くん。行ってらっしゃい！」

谷口が何か言いかけたのをさえぎって、坂本は洋介を立たせると蠟燭に火をつけ持たせて廊下に押し出した。

「ま・・・マジで行くんですか？」

完全に生気の無い顔をした洋介が、焦点も定まらないまま坂本に聞いた。

「あたり前じゃない、私も谷口君も行ったし。」

洋介は蠟燭の火を眺めていた。

「・・・・・・・・・・ですよね。」

力なく言った洋介は下を向いていたので坂本が不適な笑みを浮かべたことに気づかなかった。

「うん。行ってらっしゃい。」

「はい・・・・・・・・」

静かに返事をして洋介は生徒会室を離れていく。

「あの・・・・・・・・」

洋介が去ってから、谷口が後ろから恐る恐る坂本に声をかけた。

「なに？」

振り返った坂本は、明らかにたくらみが成功した顔をしていた。

「トイレの奥の蠟燭って・・・僕が持ってきたので最後だった気がするんですけど・・・・・・・・」

「ああ。たぶん、そのはずよ。」

「は？」

「誰が1本しか持って帰ってきちゃダメって言ったかしら？」

坂本のスカートのポケットから、坂本が火をつけて持って返ってきた蠟燭とは別の蠟燭が出てきた。

谷口が暫し啞然とする。

「鬼ですか、あなたは。」

「ふふん♪小悪魔と呼んでもらえるとありがたいわ。」

坂本はいたずらっぽい笑みを浮かべていた。

「いや、むしろ鬼神でしょう。」

平然と谷口が返したので、坂本の笑顔は引きつりそのまま固まる。

「で、どうするんですか？」

ため息とともに谷口が吐き出した声に坂本はいつもの調子に戻り、生徒会室においてある懐中電灯を手にとった。

「これを持って、河崎くんの後をこっそりつけます。」

「そんなことだろうと思いましたよ。じゃ、行きますか。」

坂本が頷くと、二人は生徒会室を出て、洋介の通った廊下をゆっくりと歩き始めた。

一方こちらは一人びくびくと歩いている洋介。全神経を外に向け、どんなわずかな音も動きも見逃すまいとしていた。

夜の学校はこれでもかというほど静まり返り、自分の足音しか聞こえない。

動くものも、自分と自分の影、そして歩くごとにゆれる蝋燭の火ぐらいなものである。

「何もいない何もいないいるわけない。いてもあれだよ、ゴキブリとかそういう虫だって。うん。あとコウモリ。糞とかよく落ちてるしね。コウモリ見た人はいっぱいいるもんね。だから、怖くない。」

洋介は一人でぶつぶつ言いながら自己暗示でなんとかこの場を乗り切ろうとしていた。

階段を一段一段昇り、やっとこのことで4階までたどり着く。

階段からトイレまで、まっすぐな廊下が続いている。

ヒタヒタという自分の足音が嫌だ。自分の足音なのに廊下で反響して自分以外の誰かが後ろから歩いてきている気がしてならない。

怖いし、振り返りたくなるのだが、振り返るのも何かいたら嫌なので怖くて出来ない。

「何もいない何もいない何もいない……」

自分が立ち止まれば足音もなくなる。

「……やっぱり、俺の足音だよねぇ。」

息を吐いて、再び歩き出す。

女子トイレの前にはすぐに着いた。

洋介はつばを飲み、決心をつけ女子トイレに足を踏み入れた。

良く考えてみれば女子トイレに入ることなど、まずない。掃除のときでも、女子が男子トイレに入ることがあっても男子が女子トイレに入ることはそうない。洋介は、めったに出来ない経験をしたということで、なんとか気分を明るい方へ持っていかようと努力した。

女子トイレは個室が並び、廊下と違い見えない部分が多いので余計に怖い。それでも、ここまで来たのだから我慢してトイレの奥へと進む。

窓が見えた。あそこに蝋燭があるはずである。たどり着き、自分の小さな蝋燭をかざす。

「ええと……」

洋介はしゃがんで床を照らす。

「ちょっと待ってよ……」

段々気が焦ってくる。額に汗がにじんできた。

「嘘だろお……」

もう一度立ち上がり窓の縁を見る。冷や汗が頬を伝った。

「なんで？」

なんで蝋燭がないんだ????

そんなはずは無いのである。ここに蝋燭があるはずで、新しい蝋燭がないと帰るとき真っ暗中帰らなければならない上に、ここまで来た証拠がないことになる。

洋介は何度も窓際とその周辺の床を調べた。が、いくら探しても見つからない。全身から汗が噴き出してきていた。

「ろ……ろうそく……なんでないんだよ。畜生。ありえねぇ。」

恐怖を紛らわすためにいちいち思ったことを声に出している自分をどこかで自嘲しながら洋介は必死に床

を這いまわっていた。

「何処行った。蠟燭。ってか、もういい加減この蠟燭もなくなっちゃうし……何処いったんだよ一蠟燭……」

声に泣きが入ってきた。

「これ？」

のんきな声がして洋介の目の前に蠟燭が差し出された。

間違いなく蠟燭である。

「あったあ！よかった、ありがと！」

洋介はすかさず蠟燭を手にとると、もう燃え尽きようとしていた自分の蠟燭から火を移した。

「ホントありがと、コレないと鬼のような先輩にいびられるとこだったんだよマジで！」

洋介は煌々と輝く蠟燭を両手で持って立ち上がり蠟燭を渡してくれた人に礼を言った。

「……………て……………へ？」

洋介の頭に一つの疑念が浮かんだ。

ここに自分以外の人間がいる？

「あのさ、君なんでこんな時間に……………」

言いながら渡されたほうに蠟燭の火を向ける。

誰もいなかった。

「あれ？」

首をかしげ、洋介は自分の周りをぐるっと見回した。

と、洋介に一筋の光が当たる。

まぶしさに一瞬目を閉じる。うっすらと目を開けるとトイレの入り口のところに坂本と谷口が懐中電灯を持って立っていた。

「だれが鬼のような先輩ですって？」

坂本はどう見てもご立腹であった。

しかし、そんな恐怖よりも洋介にとっては他の人に会えたことが嬉しかった。

こんな人でもいるだけで、意外と安心感があるものらしい。

「ちょっ……………も一やめてくださいよ。ほんとに。マジでビビったんですから……………」

どうやら蠟燭を渡したのは坂本だったらしい。

「そんなことどうでもいいから、鬼のような先輩って誰のことよ？」

本気で怒っているらしい。

「いや……………あれは、その……………」

なんとか言い訳を探すが見つからない。

「ふーん。もう、いいわ。河崎くんなんか放って置いて、谷口君一緒に帰ろうか。」

「ああ！そんなこと言わないでくださいよ！」

坂本はサクサクと歩いて谷口を引っ張り、トイレから出て行く。

洋介は慌てて二人の後を追ってトイレを出た。

トイレから出ると、坂本はもう、階段を下りるところだった。谷口は坂本に引っ張られている。

「ちょっと待ってくださいよ！」

洋介は走って追いかけようとして、蠟燭の火が揺れて消えそうになっていることに気づき少し減速した。

どンドン先に行ってしまう二人を追いかけ、洋介はやっと生徒会室にたどり着いた。

二人はもう帰る準備を済ませていた。

「何？一緒に帰るの？早くしなさいよ。」

「はい！」

洋介は返事をすると手に持っていた蠟燭の火を消して机の上におくと鞆を引つつかんだ。

「あれ？」

と、機嫌を損ねていた坂本から不思議な声が漏れた。

坂本はじっと洋介の置いた蠟燭を見ている。

「どうかしましたか？」

谷口が近づくと坂本は顔を上げた。

「河崎くん。この蠟燭どうしたの？」

「は？会長が渡してくれたやつですけど？」

洋介が鞆を肩にかけながら答えた。坂本は腕を組んで真剣な顔をしている。

そしてスカートのポケットから一本の使っていない蠟燭を取り出す。

洋介が持って帰ってくるはずだった蠟燭である。

そして、ポケットから出した蠟燭と洋介が持って返ってきた蠟燭を比較する。

「……………違う蠟燭よね。」

「そうですね。」

坂本が眉間にしわを寄せじっと二本を見つめている。

谷口は同意すると考え込んだ。

坂本が出したのは100円均一で売っている、良く見る少し透明感のある白い蠟燭である。

一方洋介が持って返ってきたのは、透明感の無い白い蠟燭。サイズはそう変わらない。

暗かったため気づかなかった。

「坂本さんではない……………と。」

谷口言葉に洋介の顔が引きつった。

「谷口君でもない……………と。」

続く坂本言葉に洋介の顔はさらに引きつった。

「あそこに蠟燭があるわけないのよね。で、河崎くんは女子生徒に渡されたと言っている。」

「誰かいたんですかね？」

坂本が言ったことに、谷口がとんでもない疑問を返す。

「いるわけないわよね。」

スッパリと言い切って、坂本は天井に目をやる。意味は無い、ただ少し考え込んだだけである。

「ま、いいか！さ、帰ろ帰ろ。」

数秒でその結論を出し、坂本は生徒会室を出た。続いて谷口も廊下にする。

「え……………ええ?! ちょっと待ってくださいよ! どういうことですか?!」

慌てて洋介も廊下に飛び出す。

「河崎くん。電気。」

飛び出した途端に坂本に言われて洋介は生徒会室に電気を消しに戻った。

洋介がスイッチを押そうと手を伸ばし、スイッチに触れる直前。フッと電気が消えた。

「あれ？」

洋介が首をかしげる。

「何やってるの、消したらさっさと鍵閉めて帰るわよ。」

廊下から坂本の声がしたので洋介は大きな疑問を残したまま生徒会室を出た。

坂本が鍵を閉め、三人で職員室へ鍵を返しに行く。

「さっき……俺が電気消す前に消えたんですけど……」

「8時になったし、先生が勝手に切ったんじゃない？」

「はぁ……」

坂本の答えに、洋介は釈然としないまま頷いていた。

暖かな職員室の明かりが三人の後ろにやんわりとした影を作り出していた。

この学校に怪談話は一つも無い。

## ブンカサイ

---

クラスメイトがワクワクしているのをよそ目に、洋介は去年同様沈んだ面持ちだった。

昨日のこともあるといえはある。前島や門田にも話したのだが、まったく信じてもらえなかった。

唯一、山本が信じてくれたのだが、山本は「見える」人だったらしく「男子トイレの方は知ってたけど」とか、不吉なことを言っていた。

どうやら、男子トイレにもなにかいるらしい。

それよりも、毎年恒例となってしまった生徒会役員で文化祭を回るというのをやめて欲しい。

洋介はそう思っていた。

生徒会役員と言っても、結局生徒会長と副生徒会長の三人で行くのだが・・・

「あ、いたいた！河崎くん、早く行こー！」

洋介の耳に聞きたくも無い、能天気な声が飛び込んできた。

「じゃ、俺達は俺達で楽しむから、お前は頑張れよ。」

山本が薄情なことを言う。

「お前と一緒に回りたいのは山々だが、俺らにどうこうできる人じゃないし。」

前島が多少は気遣ったらしい言葉を吐く。

「俺たちも命が惜しいから。」

門田は本当に正直だ。

「僕は一緒に回っても構わないよ。」

「え?!」

フィレーンの言葉にその場にいた全員が驚愕した。

「栄地、やめたほうがいいって。マジで、これは本当に命に関わるから。」

真剣な顔で前島が言う。

「ああ・・・ま、いいんじゃない？栄地なら大丈夫でしょ。属性が会長よりだし。」

山本は少し考えてからお気楽発言をした。

「いや・・・あのさ・・・それって、俺の被害が増えるだけなんじゃ・・・」

洋介がポロっと言ったそのとき、後ろから会長が顔を出した。

「被害って何？」

「うわあ?!」

恐怖に顔を引きつらせた洋介を眺めて、坂本生徒会長はため息をついた。

「さっきから呼んでたのに気づかなかったの？」

「い、いえ。聴こえてはいましたが、生存本能が拒絶反応を・・・」

「・・・・・・・・。」

坂本が冷たい目をしていて。

「あ。」

洋介は自分の失言に気づいた。

「えーと、山本君だけ？柔道部員連れてきて。」

「はい。わかりました。」

坂本の命令に即座に応え、山本が3組の柔道部員を呼びに行く。

「こら待て山本！この薄情者！！」

洋介が叫ぶが、山本は止まらない。

「坂本さん……その辺りでやめましょうよ。」

ここまで来て、ようやく後ろに控えていた谷口副生徒会長が口を開いた。

「山本君。行かなくていいですよ。」

「はい。」

谷口に言われて、山本はくるりとこちらに向き直った。

谷口が洋介の隣に来て小さな声でつぶやく。

「今年だけの辛抱ですから。」

「うう……はい。」

「僕は来年もいるけどね。」

ヒソヒソ話を聞いていたフィレーンが洋介のささやかな明るい未来をつぶしにかかる。

「た、谷口先輩！！」

なんだか泣きそうになりながら洋介は谷口にすがりついた。

「……いえ、そんな顔されても……僕だって三年間坂本さんと一緒にいましたし。苦労は身にしみて良くわかりますが。」

ちょっと困った顔で言った谷口を、洋介は心底尊敬した。

そうか、そういえばこの人三年間もこのハチャメチャ生徒会長の相手してきたんだ。そして、尊敬と共に同情もする。

「あのね。そんなところでワケのわからない男のドラマ展開されても困るんだけど。」

当の本人は、自分が元凶であることなどきづかずに不機嫌顔である。

「じゃ、俺達クラスの当番なんで。」

前島と山本が、もう関わりたくないと思ったのだろう、そそくさと去っていく。

「じゃ、俺も。」

門田も二人に続いて去っていく。

残ったのは、洋介、谷口、坂本の生徒会の面々と栄地フィレーンだった。

洋介の憂鬱な文化祭が始まる。

\* \* \* \*

なんといっても、やはり見所は三年生の出し物だろう。

教室の展示も大掛かりだ。教室の前に長蛇の列が出来上がっている。

「1年は4組のが面白かったけど、他はいまいちね。まあ、毎年そんなもんだけど。」

その長い列の真ん中あたりに洋介はいた。

その隣にいるのは谷口だ。

列から外れたところで、他の展示の話をしているのが坂本だった。

フィレーンもフィレーンで適当に楽しんできたらしい。プードルの風船を持っている。

「まだ、もうちょっと順番回ってこなさそうね。」

坂本はそう言って小さくため息をつく。

洋介はうんざりしていた。

(ため息をつきたいのはこっちだよ、どんだけ待ってると思ってんだ・・・)

「うーん・・・今度は部活の方も見てこようかな。谷口君、一緒に行こうか。」

「あ、いいんですか？」

「じゃ、フィレーン君お願いね。」

洋介がうんざりしている間に、フィレーンと谷口が交代する。

「え？ああ、はいはい。」

フィレーンは適当に返事をして、列に入った。

そして、谷口と坂本は階段を下りていく。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

洋介は黙って二人を見送った。

フィレーンはプードルの鼻を引っ張ったり、ねじったりしている。

「なあ、なんで俺は交代されないわけ？」

「さあ？そんなの僕が知るわけないだろ。」

洋介は、並び始めてから一度も交代していない。

最初は洋介とフィレーンだった。

2年の出し物を見て帰ってきたら、フィレーンと谷口が交代した。

1年の出し物を見て帰ってきたら、谷口とフィレーンが交代した。

「絶対不公平だと思うんだよ。」

「そうかな？」

「っていうか、むしろイジメだと思うんだ。」

「どうかな？」

フィレーンはどうでもよさそうに相槌をうっていた。

「去年も、こんな感じで結局1個か2個しか見れなかったんだよな。」

「へえ～」

「お前、聞く気ないだろ。」

「文句があるなら、直接本人に言ったらいいんじゃないか？」

「言えないからお前に言ってるんだよ。」

不機嫌にブチブチと言っている洋介に、フィレーンはあくまで態度を変えなかった。

「ふうん。でも、僕が洋介の愚痴を聞いてやる道理もないね。」

「お前って冷たいよな。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

フィレーンは何も言わずに、前方を眺めた。

前にいる人数は少しずつだが減ってきている。

出てくる人は満足しているようだった。

「じゃあ、次。変わってもらえるように頼んでやろうか？」

フィレーンが、調子を変えずにさっきとは違うことを言った。

これには洋介自身が一番驚いていた。「冷たい」という言葉に少しでも反応してくるとは・・・

「え？本当に？！それ、嘘じゃないよな？」

「うん。そんな嘘ついても仕方ないし。」

フィレーンの言葉に洋介はちょっとばかり感動さえた。

「なんだあ・・・お前も優しいトコあるんだなあ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

フィレーンは、何も返さなかった。

洋介はそれが少し気にかかったのだが、嬉しさのほうが勝ってしまい気にしないことにした。

「これ、やるよ。」

フィレーンがプードルを差し出す。

「へ？」

フィレーンが、面倒くさそうにプードルの風船を洋介に押し付ける。

洋介は、フィレーンとプードルを交互に見ていたが、しばらくしてフィレーンがその手を引っ込める気がないのがわかり、受けとった。

「あ、ありがと。」

まったく欲しくはなかったのだが、こういう風にされては仕方が無い。もしかしたら、フィレーンなりの思いやりなのかもしれない。

「きっと不器用なんだな」と洋介は勝手に一人で納得していた。急にキャラクターに無いことをされると、こちらも戸惑ってしまう。

二人は会話をしないまま、変な空気の中で坂本と谷口が帰ってくるのを待っていた。前を見ると、だいぶ人も減ってきた。あと、もう少しだ。

(・・・・・・・・・・あれ?)

洋介は、ふとしたことに気づいた。

(ん?なんかおかしいぞ)

洋介が完全に気づくその前に、坂本と谷口が帰ってくる。

「美術部の展示はやっぱりいいわねー。」

さっきと似たようなことを言って坂本が列に近づく。

「坂本先輩。洋介が変わって欲しいそうです。」

フィレーンが即座に坂本に告げた。

「え?ホントに？」

坂本がキョトンとしている。

「他の展示が見たいそうです。」

フィレーンは毅然とした態度である。

(・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・?!)

このときようやく洋介は気づいた。

「ちょちょちょっと待て!フィレーン!!やっぱさっきのな」

「長い間待っていて、もう嫌なんだそうです。僕は別に構わないので洋介と代わってやってください!」

洋介の声を掻き消して、フィレーンが大声で坂本に迫る。

「あ、いいよ。河崎くんがいいなら・・・・・・・・まあ、別に」

なんだか釈然としない面持ちで坂本が答える。

「ありがとうございます!良かったな、洋介。」

「いや、違」

「僕たちのことは気にせずに他の所見て来いよ!」

フィレーンは、そう言って洋介を列からはじき出した。

「男に二言は無い。」

やたらと男らしい口調でそう言うと、フィレーンはニヤリと笑った。

「じゃ、次の人どうぞー。」

展示をしている3年6組の人が二人に声をかけ、坂本とフィレーンは教室の中に入っていった。

「河崎君、よかったんですか？ずいぶん待たせたし、河崎くんに入ってもらおうかって坂本さん言ってましたけど。」

谷口の言葉が洋介の心にグサグサと突き刺さる。谷口に他意はない。事実なのだろう。

洋介は、長い列の並ぶ教室のドアをなみだ目で眺めていた。

「はめられた……」

入る直前のフィレーンの顔が浮かぶ。

してやったり。

明らかに、その顔はそう言っていた。

風船のプードルがふわりと廊下に舞い降りて、洋介はその場に膝をついた。

洋介の様子から、なんとなく経緯を察した谷口は洋介の肩に手を添えてやる事しか出来なかった。

あ、どうも。山本アキラです。

なんで話しかけ形式なのかというと、実は俺には幽霊だけでなくその他のものもいろいろ見えたりするからだ。

うん、そう。だから、あれよ。君らがなんだか、やたら洋介のことやら栄地のことを執拗に観察しているのは知っているんだよ。

たまに、俺達のことも見てるみたいだね。

ま、人間観察は俺も好きだから、それをどうこう言う気はないよ。うん。

つまらん授業聞いているときとかは俺も人間観察してるしね。

他人の観察なんてするのは暇な証拠だよ。なんか他に生産的なこと探したらどうかな。

って、俺が言うのもおかしいか。

ちなみに、幽霊にしてもなんにしても声は聞こえないから、俺。

君らが何を言おうと俺には聞こえないよ。だから、好き勝手に言ってくれて構わない。

えーと、なんだっけ？俺は、何を話したらいいんだ？

何でもいいのかな？まあいいか。じゃあ、文化祭のあとに見た風景の話にしとこうか。

文化祭が終わって、洋介も解放された頃の話だ。

俺達は片付けも大体終えて、いつものように一緒に帰ろうとしていた。

2年生の教室は3階にある。3年は2階だ。関係ないが1年は4階まで毎日階段を上らなければならない。

去年は苦勞した。そして、1階には生徒会室や美術室みたいな特別教室なんかがある。

階段は二つあるのだが、建物の端にあるほうの階段を下りていくと、校舎裏が見える小さいスペースがある。

薄っぺらい長方形の形をした校舎なので、そのすぐ向かいには昇降口がある。

学校の構造はこのくらいにしておいて、俺達が目撃したのはその校舎裏が見える小さなスペースだった。

階段下りると、視界に入る。

そこには知った顔が二人いた。ハチャメチャ（死語か？）生徒会長と俺達の所属する弓道部の部長である。

そういえば、同じクラスになったとか言ってたなあ。なんてことを思い出しながら、俺は皆には何も言わずに歩きながらそれを見ていた。

そして気づいた。

手、つないでやがる。

そして、楽しそうにおしゃべり。ガラス越しなので会話は聞こえない。

俺は、「あーそういうことね。」と妙に納得して一人でニヤリとしていた。

他の三人には言っていない。たぶん、驚くんだと思う。

なんだかんだで、俺が思うに次回辺り最終回で、卒業式とかやるに違いないので、バラシてもいいだろうと思っての暴露話でした。

お幸せに。

## ソツギョウ

---

春である。まだ、肌寒いがそれでも春である。

別れの季節。

別れというと、なんとなく物悲しいイメージが着いて回るが、洋介にとっては喜ばしいことだった。

別れの季節。わずらわしいドタバタ生徒会長との決別。明るい学生生活。

今日、3月10日。旅立っていく三年生を見送る卒業式。

本来なら、生徒会長が送辞を、元生徒会長が答辞を読むわけだが、生徒会長を三年生がやっているという異例の事態なので、送辞を読んだのは副生徒会長の河崎洋介だった。あの生徒会長のために流す涙など一滴もない。本当に迷惑以外かけられた記憶もない。

と、いうわけで卒業式を無事終えた洋介はすがすがしい気持ちでいっぱいだった。そんな洋介の気持ちを代弁するかのように、空も晴れ渡り、すがすがしい春風がそよいでいる。

今は、卒業式も終わり校舎と正門をつなぐ、まだ花の咲かない桜並木の道でそれぞれ思い思いの相手と話をしたり写真をとったりしている。

洋介は当然、坂本と谷口と一緒にいた。坂本は後輩達から貰った花束を抱えていた。その中に洋介が形式上渡さなければならなかったので渡した花束もある。谷口は洋介が渡した花束だけを持っていた。

「ご卒業おめでとうございます。本当におめでとうございます。」

洋介は嬉々とした態度でニコニコしながら、そう繰り返していた。

「なんか、そこまで嬉しそうに言われると腹立たしいわね。」

「はっは一、そうですか？」

「しかも、いつもより態度でかいし。」

対して坂本は洋介の態度にご機嫌斜めな様子だ。眉間にしわがよっている。

「まあまあ、そう言わずに……」

こうやって谷口がなだめるのも最後なのだろう。

「谷口先輩も、本当にお疲れ様でした。高校に行ったら、誰かの暴走を気にすることも無くのびのびとハッピーライフをエンジョイしてください。」

「……いやぁ……そこまで言われると喜んでいいのやら……」

洋介は谷口の手を両手で握っていた。谷口は複雑な表情で洋介と坂本を交互に見る。

「おーい、洋介！」

声がして、人ごみの中から前島が花束を持って現れる。

「あ、ご卒業おめでとうございます。」

卒業生である坂本と谷口に気づき、前島は軽く会釈した。後ろにいた門田と山本も小さく頭を下げる。前島が洋介に向き直る。

「部長見なかったか？渡さなきゃいけないんだけど、見つからなくてさ。」

前島は、頭を掻きながら辺りを見回していた。

「さぁ？俺は見てないよ。」

洋介が答えるとほぼ同時に、坂本が口を開いた。

「弓道部の部長なら、昇降口の方でクラスの友達とはしゃいでたわよ。」

「ありがとうございます。じゃあ、そっち行ってみます。」

前島は坂本に頭を下げるとそのまま昇降口へ向かおうとして、一度振り返った。

「高校へ行っても元気に大暴れしてくださいね。活躍楽しみにしてます。」

言い捨てて、全力で走り去る。

坂本は眉間に縦のしわを三本ほどよせて、口をへの字に曲げ、前島たちの走り去った方を見ていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・これって馬鹿にされてるのかしら。なんだか不愉快だわ。」

「まあ、そう言わずに・・・」

洋介はすがすがしい笑顔で二人の会話を聞いていた。春の日差しと周りのざわめきが心地よい。ふいに、不機嫌だった坂本が気づいた。

「そういえば栄地くんはどうしたの？いないみたいだけど。」

「フィレーンですか？」

言われて洋介もハッとした。そういえば、さっきの前島、門田、山本とはいっしょにいなかった。

「・・・・・・・・・・教室で黄昏てるんじゃないですかね？」

洋介が適当なことを言う。が、実際、そのくらいしか思い当たることはない。

「なんで？」

坂本に聞かれて、洋介は少しだけ考え込んだ。

「・・・仲の良かった先輩っていないだろうし、それに・・・・・・・・・・そういうの好きそうじゃないですか、あいつ。」

「・・・・・・・・・・どういう理屈ですか。」

半ばあきれ返って谷口がツッコむ。

「あー、でも確かに好きそうよね。うん。じゃあ、栄地くんでも探そうか。」

「はぁ?!」

唐突な提案に洋介はいつものように悲鳴じみた声を上げる。

「さあ、行くわよ！」

坂本の手が洋介の腕をつかむ。洋介が条件反射的に坂本の目を見るとその目の奥ではいつものように何かが光っている。続いて嫌な予感。

「やっぱり、こうでなくっちゃね。」

ニヤリと笑みを浮かべた坂本が小声でつぶやいた。

「え？」

「Go!」

洋介が聞き返す間もなく、坂本は走り出した。

洋介は引っ張られ、谷口も走り出す。

「どおぉぉぉ？！会長！！おかしいですよ！たいして年も違わない男引っ張れる女子中学生って変ですよ！！」

「あー細かいことは気にしない気にしない！あんまりしゃべると舌嚙むわよ。」

「結局、卒業式もこんな感じなんですねえ・・・」

完全に諦めた口調で谷口が言った。

「めざすは校舎3階、2年2組！」

昇降口で止まることなく、三人は外履きのまま校舎内に入っていく。

中央の階段を駆け上がり、三階に着いたところで右に曲がる。

2年2組。

ここまで一気に走ってきたのでさすがに坂本の息も切れている。洋介は、体力うんぬんよりは精神的にキツかったらしくぜーは一言っている。谷口は息が弾む程度だった。

教室のドアを開けると春の昼下がりののほほんとした空気と、昼間の教室ではめったにない人気のない静かな空間が出迎えてくれた。その一番窓際前から四番目の席でフィレーンは窓の外を眺めていた。外からは、別れを惜しみながらも卒業というイベントを楽しんでいる人々の声が聞こえてきている。「ほら、俺の言ったとおりでしょ？」

息を切らせながら、洋介が言うと、フィレーンは3人に気づいたらしく教室の入り口に顔を向けた。「私の卒業も祝わずに教室で一人黄昏てるっていうのは、どうゆう了見かしら？」

坂本の発した言葉にフィレーンはぽかんとしていた。いつもは締まった顔が口が半開きなため間抜けに見える。

「たいして仲良くなかった、なんていわせないわよ。」

坂本はつかつかとフィレーンの前に歩いていき、フィレーンの目の前にびしっと右手人差し指を突きつけた。

「あ……ご卒業おめでとうございます。」

啞然としたままのフィレーンが、ちっともめでたくなさそうに言う。

坂本はそれで満足したらしく、ニッと笑った。

「あなたに頼みたいことがあってね。」

「何ですか？」

「河崎くんをお願いしようと思うのよ。」

即座に答えた坂本の発言内容に驚いて、洋介はその会話を止めに入った。

「ちょっと待って下さい！ どうして俺がコイツに面倒見てもらわないとまらないんですか？！」

洋介の反論は無視され、空しく春風の中に消えていく。

「一年半も生徒会をやっているとはいえ、河崎くん一人だとやっぱり不安だし。」

坂本はそのまま話を続ける。

「そうですか……では、僕ができるだけのことはやります。」

フィレーンも乗ってきてしまった。

「ん……？ 会長、ちょっと待ってください。なんだか会話の内容から嫌な予感がするんですけど。」

洋介の言葉は完全に無視され、谷口は静かに見ている。

「ありがとう。」

坂本が真剣にそう言い終えると同時に、坂本とフィレーンが同時に洋介を見て、それぞれ洋介の肩を軽く叩いた。

「がんばってね、次期生徒会長！」

「がんばれよ、次期生徒会長！」

二人はわかりあえたらしく、無意味にうそ臭い感じでひとみをキラキラと輝かせて洋介を見ていた。

「うそお……」

洋介が小さくつぶやいて二人のキラキラした瞳を交互に見る。

「新生生徒会の誕生よ！！」

「明日の学校は僕らが創ります！」

坂本はかなり本気だったが、フィレーンは半分ノリでもう半分は洋介への嫌がらせだった。

谷口はドアの所で少し困った顔で暖かく見守っていた。

そして、洋介は完全に置いてけぼりだった。

「いーやーだー————っ！！」

人気のない校舎に洋介の叫びがこだまする。

その叫びは外のざわめきに吸収され掻き消える。

たとえありふれた日常に埋もれていようと、洋介が苦勞することに変わりはない。





普段は親バカです。